ちょっと名大史

編集
名古屋大学　大学文書資料室

■「ちょっと名大史」は、学内外にある名古屋大学関連の記念物（記念碑・記念樹・記念建物など）を中心に取り上げて名古屋大学の歴史を紹介するもので、2002年5月から名古屋大学の広報誌『名大トピックス』の裏表紙に連載されています。この冊子は、これまでに掲載された「ちょっと名大史」（第1号から第83号まで）をまとめて再録しました。

学内外にある記念物など本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちの方は、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）までご連絡くださるようお願いいたします。

名古屋大学　大学文書資料室

1　香菓園と愛知医科大学予科歌碑
2　渡邊龍聖名古屋高等商業学校初代校長の胸像
3　第八高等学校の正門
4　「岡崎高等師範学校跡」記念碑
5　名古屋県仮医学校・仮病院跡
6　仮病院（愛知県病院）・医学講習場跡
7　愛知県立医学専門学校跡
8　豊田講堂
9　古川総合研究資料館（旧古川図書館）
10　シンポジオン（創立五十周年記念施設）
11　八高寮歌伊吹颪（おろし）歌碑
12　医学部附属病院分院（東新町時代）
13　鬱金桜（うこんさくら）
14　農学部第一回卒業記念樹
15　名高商栴檀（センダン）と樟（クスノキ）
16　郁達夫（ゆたっふ）文学碑
17　伊藤圭介胸像および「伊藤圭介先生誕生之地」碑
18　岡崎高等師範学校帽章
19　其湛（きたん）塔と創統（そうとう）の鐘
20　旧名城キャンパス文学部三号館（明治村旧歩兵第六聯隊第十中隊兵舎）
21　汪兆銘（汪精衛）の梅
22　豊田講堂完成記念品
23　古川為三郎・志ま夫妻記念プレート
24　東山キャンパス「緑のトンネル」
25　野依教授ノーベル化学賞受賞記念樹・記念碑と記念施設
26　「名大」マンホールカバー
27　八高生青春像―わが友　若き旅人よ―
28　清川正二（きよかわ・まさじ）
―第10回オリンピック・金メダリスト―
29　工学部旧１号館（南棟）
－東山地区最初の鉄筋コンクリート建物
30　齋藤　眞（さいとう・まこと）
―日本における脳神経外科学のパイオニア―
31　加藤鐐五郎と名古屋大学
32　「牧島メモ」―旧学生部初代次長　牧島久雄―
33　坂田昌一（さかた・しょういち）
―研究の民主化と平和利用をもとめて―
34　須賀杯争奪駅伝競走大会
35　絵はがきの中の八高
36　東山キャンパス「田村模型」
―1940年当時の東山敷地全体模型―
37　名大史を見てきたクスノキ
38　第１回名大祭
39　名大初の女性博士
40　青色発光ダイオードと豊田講堂時計台
41　ＮＵマーク　―名大の学章―
42　豊田講堂と勝沼胸像
43　嚶鳴寮から国際嚶鳴館へ
44　愛知医専・愛知病院正門遺構
45　名大グラウンド小史
46　名古屋大学「職員用バッヂ」
47　名古屋大学と歌
48　揚輝荘衆善寮－戦前名古屋の留学生宿舎
49　鏡ヶ池　―名大の70年とともに―
50　第11回名大祭　―1970年代の名大祭―
51　日本学士院賞と名古屋大学
52　夏目漱石（金之助）「祝辞」横額
―五高創立10周年記念祝辞―
53　航空医学から宇宙医学へ
54　「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」等の学印
55　『八高生のぞ記』―旧制高校生たちの学園生活―
56　豊田講堂地階倉庫
57　後藤新平の自筆書掛け軸
―後藤と愛知医学校教師柴田邵平（しょうへい）―
58　医学部附属病院分院（東門前町時代）
59　農学部旧安城キャンパス記念碑
60　名古屋帝国大学初代総長澁澤元治関係資料
61　地域社会に支えられてきた名古屋大学

62　第22回名大祭　―1980年代の名大祭―
63　瀧川文庫―瀧川幸辰（たきがわゆきとき）博士の蔵書―
64　明治初年愛知県公立病院外科手術の図
65　G・C・アレン
　　―日英のかけはしとなった外国人教師―
66　『名古屋大学五十年史』
　　―部局史・通史・写真集―
67　伊勢湾台風と名古屋大学
68　自校史教育　―名大の歴史をたどる―
69　名大トピックス―15年のあゆみ―
70　名大史ブックレット　―テーマ別の名大史―
71　槇文彦氏と豊田講堂　―50年の時をこえて―
72　郁達夫（ゆだっふ）文学碑と名大学生歌歌碑
　　―豊田講堂改修に伴い移設―
73　名古屋帝国大学の文学部設置構想
74　豊田佐吉翁肖像画
75　キタン会（経済学部同窓会）旧蔵資料
76　第八高等学校創立百年を記念して―八高会―
77　名大教養教育の源流を語る八高資料
78　ホームカミングデイ
　　―卒業生・地域住民との交流を求めて―
79　昭和30年代の名古屋大学
　　―ノーベル賞受賞者を生んだ時代―
80　名古屋大学創立50周年記念行事
81　坂田記念史料室　―世界の物理学史を語る―
82　名古屋大学平和憲章
　　―「平和の創造に貢献する大学づくり」に向けて―
83　名古屋大学の「創基」138周年

ちょっと名大史

①香菓園と愛知医科大学予科歌碑

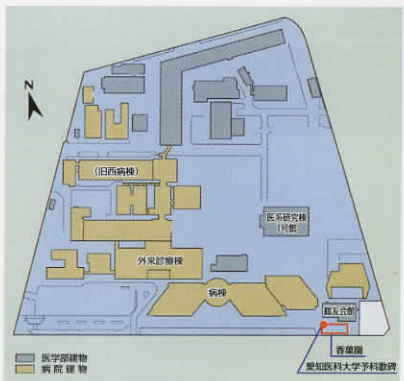
戦前にあった愛知医科大学（1920～1931）は現医学部の前身ですが、この大学には4年間の学部本科とは別に、3年間の「予科」がありました。戦前は、語学や基礎教養（リベラルアーツ）を旧制高等学校・専門学校などで学んでから大学に行きましたが、この愛知医科大学予科もこれに相当します。

香菓園（かぐの　このみの　その）は、愛知医科大学予科の同窓会「橘会」の設立五周年を記念して1982年に竣工、名古屋大学に寄贈されました。園の名称は歌碑の両側に植えられている橘が、非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）と別称されていることに由来します。歌碑に記されている愛知医科大学予科の校歌「源清き」はつぎの通りです。

源清き堀川の
流れ栄ある五十年
久遠の理想仰ぎつつ
向上の意気凝るところ
紫匂ふ東の
鶴舞が原の黎明に
至高の光燦として
輝く星と君見ずや
西金城の朝風に
橘泉神如の影清く
韻律高く鳴り渡る
嗚呼健男児の胸の裡

▲碑と庭園　全景

▲庭園の石碑



▲鶴舞地区

（名大トピックス　No.108　2002年5月31日発行）

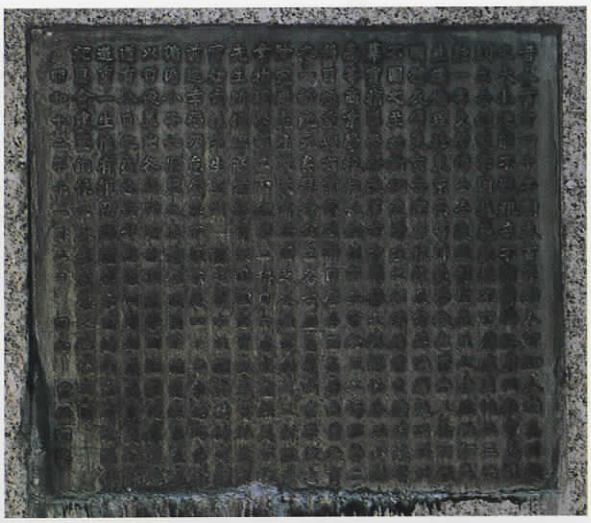
ちょっと名大史

②渡邊龍聖名古屋高等商業学校初代校長の胸像

名古屋高等商業学校（名高商）は現経済学部の前身校で、1920年に設置されました。初代校長渡邊龍聖氏は帝国大学文学部を卒業、東京音楽学校校長・小樽高等商業学校校長を歴任後、1921年11月名高商校長に就任、1935年までの14年間の長きに渡って校長を務めました。全国で六番目の高等商業学校が名古屋に創られたのは、氏の助言によるとも言い伝えられています。専門は倫理学で、著書に『乾甫式辞集』などがあります。

「学生は学生らしくあること」「学生は学生の本分をわするゝな」という二大信条、「学校は家庭の延長なり」「学校は生徒の健康保護所なり」という二大要望を氏は掲げ、名高商教育の柱としました。専攻が倫理学でもあるためか、氏の教育観はこのように人格主義ではありましたが、一方で実践・実用を重んじたカリキュラム編成も行っていました。名高商の校風は氏はよって創られたといっても過言ではなく、辞任後も名高商にその影響は強く残ったようです。

胸像は1938年に完成、同年５月15日に除幕式が行われていますが、戦時中に軍事供出されてしまいました。その後名高商創立60周年を記念して1980年10月に、同窓会「キタン会」によって新しい胸像が再び建てられました。ただ裏面の銘板は戦前当時のものです。



▲銘板

▲東山地区

ちょっと名大史

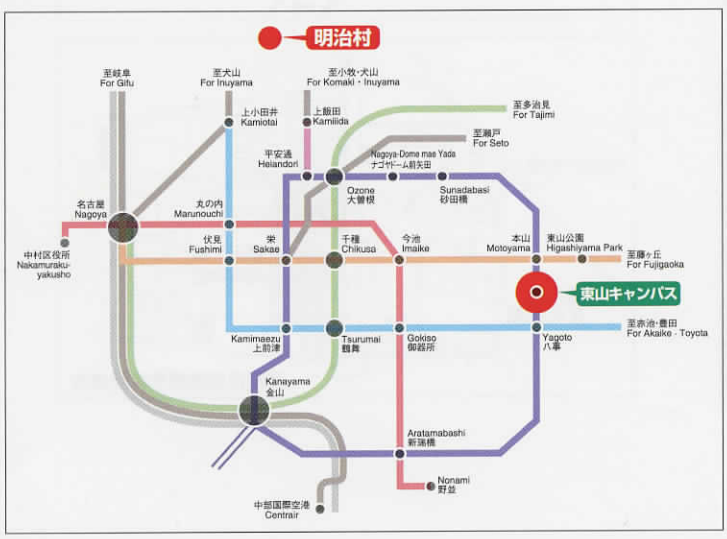
③第八高等学校の正門

この連載第１回（No.108）でご紹介しましたように、戦前は旧制高等学校で語学や基礎教養（リベラルアーツ）を学んでから大学に進みましたが、第八高等学校（八高）は、文字通り全国で八番目の旧制高等学校として1908年に創設されました。そのため、名古屋帝国大学（名帝大）が出来た1939年当初は、名帝大とは全く別の高等教育機関でしたが、1949年新制大学発足の際に名古屋大学に包括され、名古屋大学分校（旧教養部）となりました。なお、番号を校名に冠する旧制高等学校（ナンバースクール）はこの八高が最後です（八高以降1919年から新たに設置された旧制高等学校は、松本高等学校などのように地域名を冠しています）。

創立当初は愛知県立第一中学校校舎跡地（中区丸の内三丁目２番、現東海郵政局付近）を一時利用していましたが、翌1909年に現在の名古屋市立大学経済学部･人文社会学部キャンパス（瑞穂区瑞穂町山の畑１）の地に移転しました。写真の正門もその時に建てられたもので、左右に脇門をもつ門柱・赤煉瓦と花崗岩との紅白の横縞模様の角柱と袖塀・鉄製門扉・門柱上の電飾燈などは、明治後期の様式の特色を伝えています。1970年に博物館明治村（愛知県犬山市内山１）に移設され、明治村正門として現存しています。

▲明治村正門

▲滝子商店街街燈
八高正門門柱を模す滝子商店街振興組合（所在：滝子市バス停付近）



▲明治村

▲滝子商店街街燈

ちょっと名大史

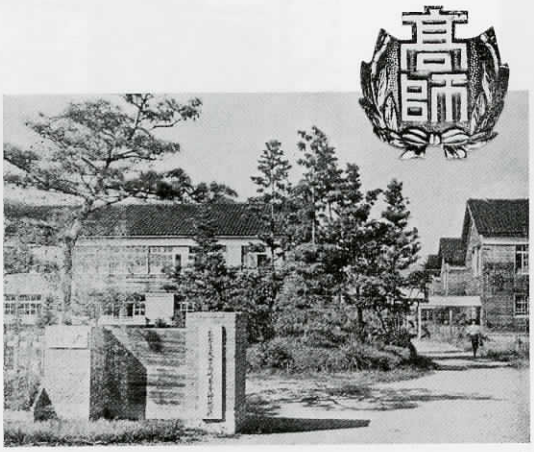
④「岡崎高等師範学校跡」記念碑

1949年に新制名古屋大学が発足した際、名大に包括された旧制学校の一つに岡崎高等師範学校があります。岡崎高師は、戦時体制下にあって科学技術者の動員を計画した国策に沿う形で、理科系の中等教員養成を目的として1945年4月に設置されました。

岡崎高師は、その名のとおり、岡崎市内（市立工業学校跡地。現在の愛知教育大学附属岡崎中学校地）に創立されましたが、第1回入学式直前の7月19日深夜の岡崎市空襲により、すべての校舎を焼失した状態で8月15日の終戦を迎えています。その後、同校は市内針崎町の勝鬘寺内に生徒宿舎（振風寮）を設け、三菱重工業針崎工場青年学校を仮校舎として本格的な教育活動を開始するとともに、本格的な移転先の検討を進めました。

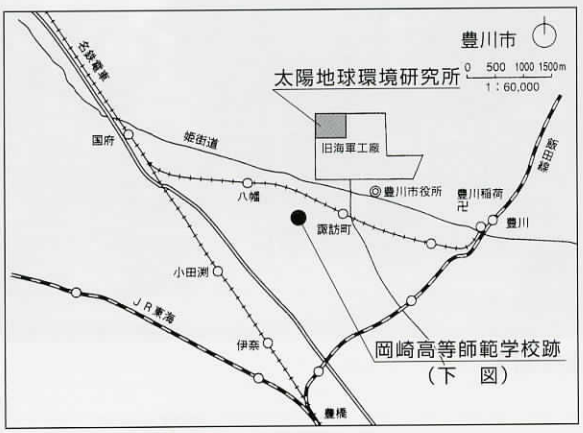
その結果、岡崎高師は12月に豊川市内の旧海軍工廠工員養成所（現在の県立豊川工業高等学校地）に、また振風寮も同じ工員養成所の寄宿舎（現在の豊川市文化会館、市立代田小学校地）に移転しました。写真の記念碑は、岡崎高師創立30周年を記念して同校の同窓会「黎明会」によって設置が計画され、豊川市文化会館前庭に1980年6月に建立されました。碑文は、岡崎高師初代校長を務めた水野敏雄の揮毫です。

岡崎高師は、新制名大へ包括された際に「名古屋大学岡崎高等師範学校」となり、そこには名大豊川分校（旧教養部）が併置されました。1952年3月、岡崎高師は第4回卒業式の後に閉校式も挙行され、わずか7年間の校史に幕を閉じました。なお、岡崎高師の閉校にともなって名大豊川分校は名古屋市内の名大瑞穂分校に統合され、名古屋大学分校（旧教養部）となりました。



▲岡崎高師正門（『岡崎高等師範学校誌』1950年より）

▲記念碑



ちょっと名大史

⑤名古屋県仮医学校・仮病院跡

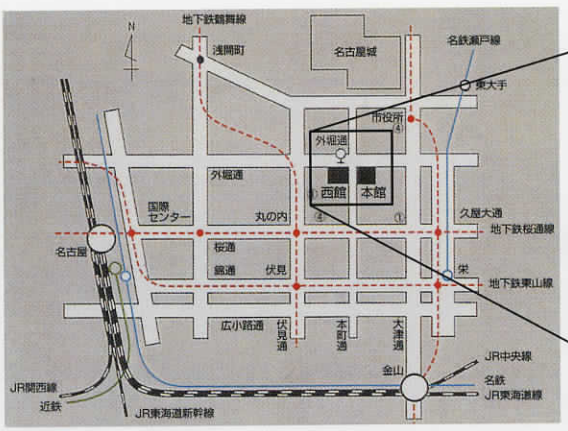
名古屋大学の源流は、医学部の前身となっている1871年８月開設の名古屋県仮医学校・仮病院にまで遡ります。仮病院は、名古屋城の南外堀のほぼ中央に架かる本町橋の南東にあった旧名古屋藩の評定所跡地に、仮医学校もその西側、本町通りを挟んで向かい側にあった、同じく旧名古屋藩の名古屋町奉行所跡地に設けられました。

開国前後にコレラなど、諸外国からもたらされたと思われる伝染病が頻繁に発生し、その対策医療が明治新政府の重要な政策課題のひとつとなっていました。名古屋城＝名古屋県庁の南すぐ近く、旧評定所・旧町奉行所という旧藩政の重要な行政機関の跡地に、仮医学校・仮病院が設置されたことは、いかに明治新政府＝名古屋県が医療政策を重要視していたかということを思いうかがわせます。

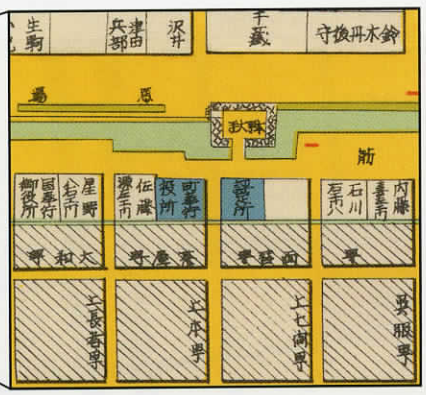
仮病院は半年後の翌年２月にいったん廃止され、仮医学校の方も同年８月の学制変革により廃校に及んだとされています。しかしこれは名古屋県の行政改革上の一時措置であったらしく、同年８月には仮医学校職員らの有志により「義病院」の名称で同じ場所で再開されました。ただこの義病院は財政難から、翌1873年２月にはまたもや閉院になったとされています。

現在は、仮病院跡地が愛知県産業貿易館本館（名古屋市中区丸の内三丁目）に、仮医学校跡地が同会館西館（同丸の内二丁目）になっています。

▲愛知県産業貿易館



▲所在地



▲当時の街並

ちょっと名大史

⑥仮病院（愛知県病院）・医学講習場跡

前号（連載第５回）で紹介した「義病院」の閉院３ヵ月後の1873年５月、愛知県は西本願寺掛所（別院）に仮病院（1875年１月以降、愛知県病院）を復興しました。義病院が財政難から閉院に至った教訓を活かし、今回の病院復興に際しては財源面・人事面ともに全面的な民間依存策が採られました。その結果、本願寺派（西本願寺）・大谷派（東本願寺）・高田派のいわゆる真宗三派では信徒からの喜捨を募って、５万円もの巨額を拠出しています。

仮病院には、ドイツ系アメリカ人医師ヨングハンスが雇われていました。彼は、本学の歴史上最初の外国人教師です。当時、愛知県下では医師の約８割が漢方医であった状況において、彼は県下の医師に対して、自らの診療公開や死体解剖の実演等を行って西洋医学の啓蒙・普及に貢献しました。また彼は、1874年に日本初といわれる皮膚移植手術も行っています。

病院復興の翌1874年11月には病院内に医学講習場も設けられました。そこではヨングハンスが英語による医学教育を行っています。彼の生理学の講義録（口語訳）『原生要論』（1876年刊）は、本学附属図書館医学部分館に残されています。

このように仮病院（愛知県病院）・医学講習場は、本学医学部前身の一つとして、当時の西洋医学受容の尖端的拠点ともいえる場所でした。現在の西本願寺別院境内（名古屋市中区門前町１）にあたります。

▲西本願寺別院

▲西本願寺掛所（『愛知県写真帳』1910年より）

ちょっと名大史

⑦愛知県立医学専門学校跡

前号（連載第６回）でも紹介しましたように「愛知県病院・医学講習場（公立医学所）」は1873年５月に西本願寺掛所（別院）で復興しましたが、約４年後の1877年７月に、当時の名古屋町域の西端を流れていた堀川の東岸、天王崎町にあった旧名古屋藩士千賀家の屋敷跡地（現中区栄一丁目）に移転しました。前の西本願寺も当時の名古屋の南端にあたっており、最初の名古屋城正門の真向かいにあった時と比べ、不便な位置に移されたことになります。これは当時の病院に対する忌避意識、すなわち「伝染病がうつるのではないか」という一般人の恐怖感・忌避感に押されて、名古屋の町のはずれに建てられたと思われます。

しかし、この移転によってはじめて、新築の医療と医療教育専門の専門施設が建てられました（それまでは既存の建物を修築して利用していました）。約五千七百坪の敷地の正面に病院診療棟１棟、北に医学校舎としてコの字形の教場棟１棟と塾舎４棟、その南に翼状の病棟３棟が並ぶ、当時としては立派な疑似洋風建築でした。

移転後はじめの約７ヶ月間は、学校は休講措置をとっていましたが、翌1878年２月に学校の新規則が制定されたのをうけ、再び開校されました。そして同年４月公立医学校と改称、それまでは病院の付属施設でしたが、ここにおいて独立した機関となりました。さらに1879年にはそれまでの中等教育機関から高等教育機関である「専門学校」に格上げされ、1903年３月には愛知県立医学専門学校と改称されました。そして1914年３月に現名古屋大学医学部鶴舞キャンパスに移転するまでの約37年間、この地で医療教育と医療活動を続けました。

▲現在の景観

▲当時の写真

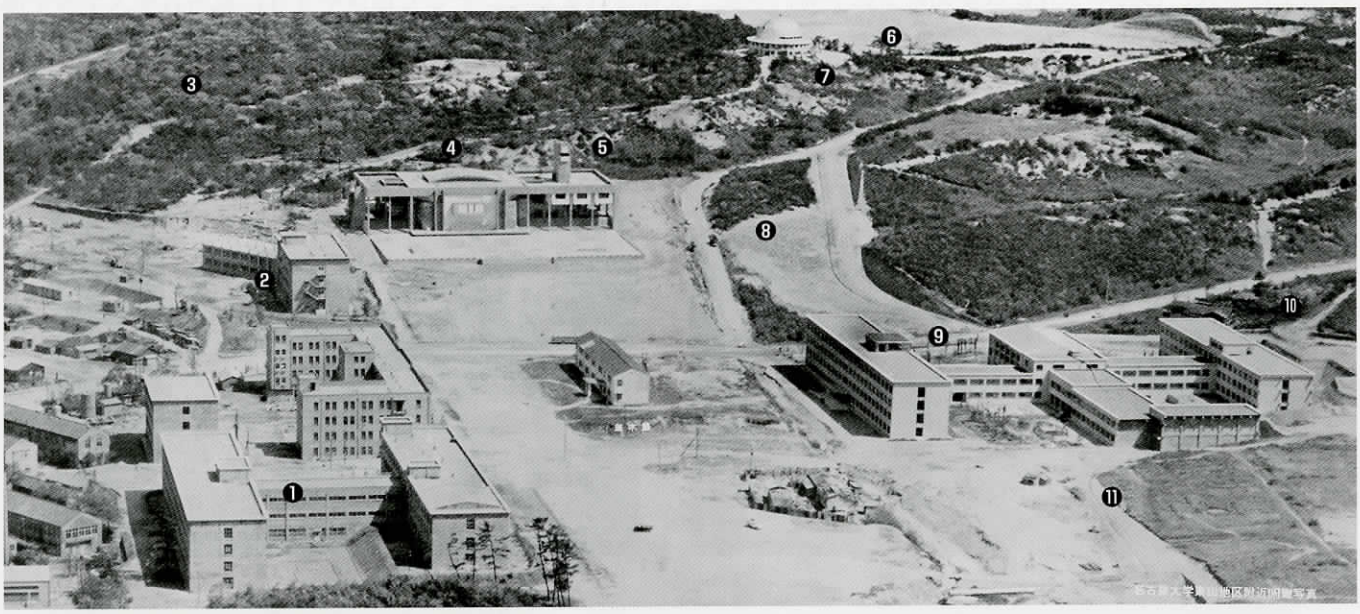
ちょっと名大史

⑧豊田講堂

本学東山キャンパスのシンボルの一つである豊田講堂（設計者:槇文彦。1962年度日本建築学会賞受賞）は、1960年にトヨタ自動車工業株式会社（当時）から建設寄付を受けた建物です。建物名称については、「発明家豊田佐吉翁を記念する意味で豊田講堂」としたことが記録に残されています。

本学では、名古屋帝国大学創設当時から、講堂と図書館は地元からの建設寄付を仰ぐという方針がありました。しかし、戦時下に創設された十分な施設設備を整える間もなく終戦を迎え、さらに戦後新制大学として再出発した直後も各部局が東山・鶴舞・名城地区など10余の地区に分散したいわゆる「たこ足大学」状態にあった本学では、講堂・図書館の設備は手付かずのままになっていました。東山キャンパスに豊田講堂ができる以前は、鶴舞キャンパス医学部構内にあった附属図書館内の講堂が本学唯一の講堂でした。

しかし本学では、1950年代はじめ頃から全学的な設備計画を策定し、医学部と附属病院を除くほとんどの部局を東山地区に集結させることが決められました。この東山地区移転は、1960年代中頃までにかけて、工学部、経済学部、法学部、文学部、教育学部、本部、教養部、農学部の順で行われました。豊田講堂の完成は、法学部の移転までが完了した時期にあたります。



▲豊田講堂完成直後の東山キャンパス（1960年）

❶工学部
❷理学部
❸原子力研究室予定地
❹豊田講堂
❺本部予定地
❻クラブハウス予定地
❼宇宙線望遠鏡研究室
❽図書館予定地
❾経済学部
❿法学部
⓫文学部、教育学部予定地

▲現在の東山キャンパス（2001年）

ちょっと名大史

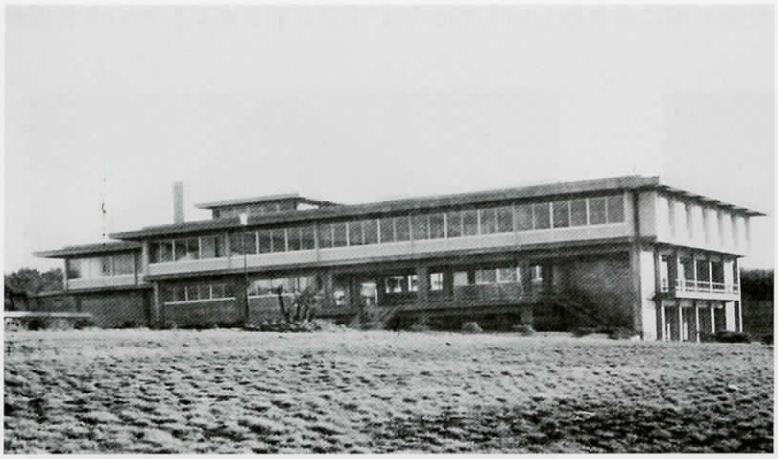
⑨古川総合研究資料館（旧古川図書館）

東山キャンパス豊田講堂の南西に位置する古川総合研究資料館は、1964年に完成した建物です。名称は故古川為三郎（日本ヘラルド映画株式会社の創立者）・志ま御夫妻から建設資金の寄付をいただいたことに因みます。

名古屋帝国大学創設当時、医学部のある鶴舞キャンパスに旧愛知医科大学時代に建てられた図書館がありましたが、ここに大学全体の図書館本館および医学部分室がおかれました。当時からすでに、地元官民各界の建設敷金寄付によって東山新キャンパスに新図書館を建設する計画がありましたが、戦中戦後の混乱の中、その実現は困難をきわめていました。敗戦後の1948年、名城新キャンパスにあった旧歩兵第六連隊の兵舎建物に本館が移転しましたが、これもあくまでも暫定措置と考えられていました。

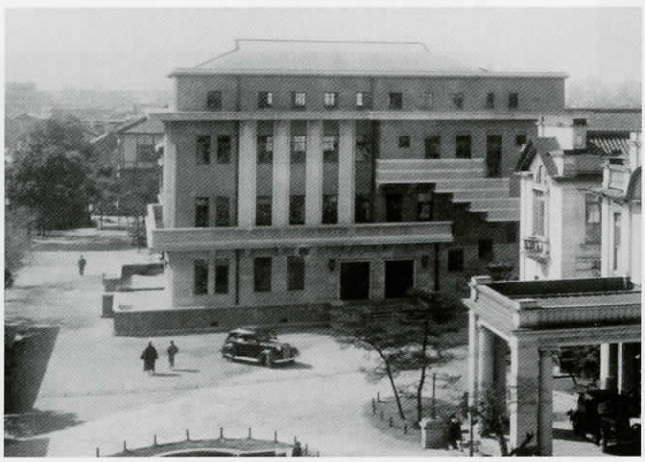
そして前号でもふれましたが、東山キャンパスの整備計画が進む中、前述の寄付が実現、古川図書館が建てられました。設計者は谷口吉郎 東京工業大学教授で、二階建てにみえる三階建てや、東西に長く広く設計された吹き抜けの空間配置などは、平行するグリーンベルトの傾斜や東西の広がりを考慮に入れてデザインされているそうです。

1981年にグリーンベルトの西側に新中央図書館が完成した図書館が移転した後は、古川総合研究資料館となり、現在は名古屋大学博物館や年代測定総合研究センターなどが入っています。



▲完成当時の写真

▲博物館入口そばに残る銘板



▲鶴舞キャンパスの図書館（1935年）

（東山キャンパス）

ちょっと名大史

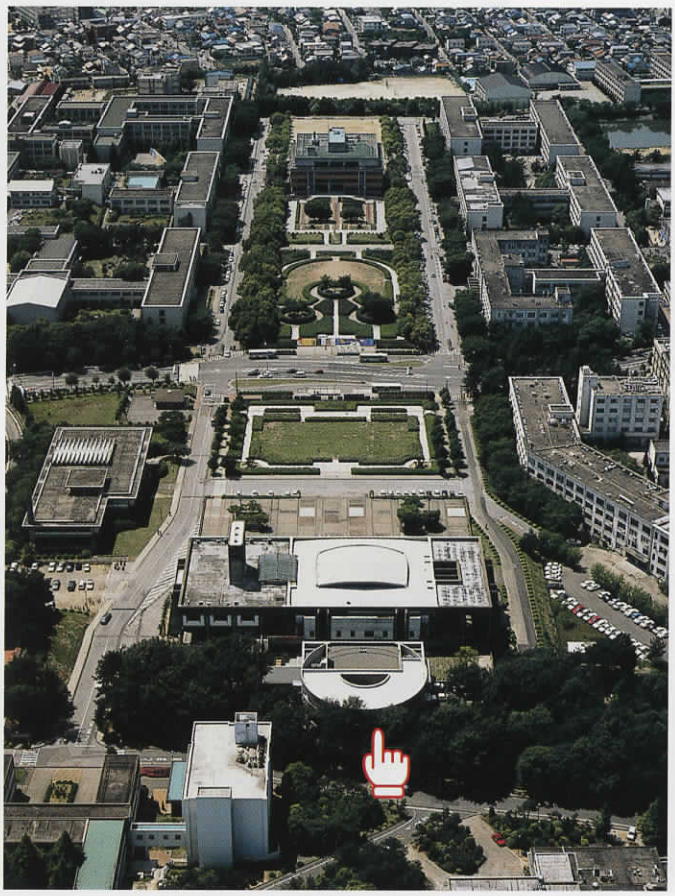
⑩シンポジオン　（創立五十周年記念施設）

シンポジオンは、前回・前々回で取り上げた旧古川図書館や豊田講堂と同じく、本学の記念施設の一つです。同施設は、会議室（シンポジオンホール）、レストラン、ティーラウンジ、研究室等を備えた3階建て複合施設で、1992年に竣工・開館しました。

1984年以降、本学では、名古屋帝国大学創設から起算してちょうど50年にあたる1989年に向けて、創立五十周年記念事業が企画されました。同事業では、名古屋大学史の編纂・刊行や学術交流基金（仮称）の創設などと並んで、記念施設の建設が行われることになりました。当初、その記念施設については、国際会議場、同窓会館、総合体育・文化施設、合宿研修・保健施設の4施設のいずれかを建設することが計画されていましたが、最終的には「名大会館（仮称）」を建設することになりました。この「名大会館（仮称）」が、今日のシンポジオンです。

シンポジオンは、1987年に発足した学外組織である名古屋大学創立五十周年記念事業後援会（初代会長は竹田弘太郎名古屋商工会議所会頭）が建設し、名古屋大学に寄付したものです。当初、職員会館に隣接して建設される予定でしたが、その後、豊田講堂との一体的な運用もできるように現在の場所（豊田講堂の東隣）での建設に変更されました。

なお、建物名称については、ギリシア語の「シポジオン」が「饗宴」「饗宴の参加者」「饗宴が行われる部屋・場所」を意味することから、学術研究の成果発表等交流の場にふさわしいものとして「シンポジオン」という名称が採用されました。



▲中央手前（☝部分）がシンポジオン、その奥が豊田講堂

▲名古屋大学シンポジオン

（東山キャンパス）

ちょっと名大史

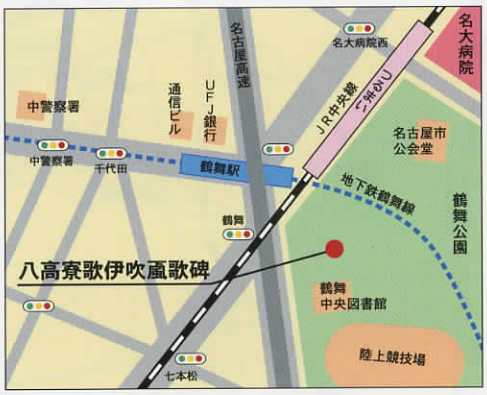
⑪八高寮歌伊吹颪歌碑（おろし）

「伊吹おろし」は、名古屋大学の包括校にあたる第八高等学校（八高）の寮歌で、1916年に作られました。八高寮歌は「伊吹おろし」以外にも数多くあり、「伊吹おろし」が作られる前でもすでに５曲ありました。この年はじめて八高の寮歌集を作成することとなり、新たな寮歌を寮内だけではなく校内へも掲示公募して採用された３曲の一つが「伊吹おろし」です。「伊吹おろし」が八高寮歌の代表歌となったのは、この寮歌集が刊行され、広く一般に流布したことと関係あるのではないかと思われます。作詞は中山久氏、作曲は三橋要次郎氏（八高第８回卒業）で、全国の寮歌の中でももっとも優美で、ロマンチックな寮歌といわれているそうです。八高生にかぎらず、当時名古屋の中学生や女高生にも歌われていました。現在の名古屋大学でも、体育会を中心に歌いつがれています。

歌碑は、1958年に八高創立五十周年を記念し、鶴舞公園内の鶴舞図書館前に建設されました。鶴舞公園が選ばれたのは、旧市街から八高へ行く途中にあって八高生が通学の際必ずここを通っていったからです。

歌碑の敷石は岡山県北木島産の白御影石、台座石は福島県浮金村産の黒御影石（浮金石）、碑面は岡山県万成山産の紅御影石（万成石）という、赤白黒の三色を調和させてすっきりつくられていますが、これは八高の清潔な校風を示しているといわれています。また碑には楽譜が刻まれており、これは曲碑といって当時としては極めて少ない珍しい碑でしたが、永く青少年に歌いつがれることを願って、このような歌碑にしたそうです。

碑の設計は浜田稔氏（当時東京大学教授、八高第12回卒業）が、建設事務はおもに浜島敏雄氏（当時愛知県建築部長、八高第20回卒業）が担当しました。なお碑陰には６月１日と刻まれていますが、これは五十周年記念祭が行われた日であり、実際の除幕式は９月に行われています。



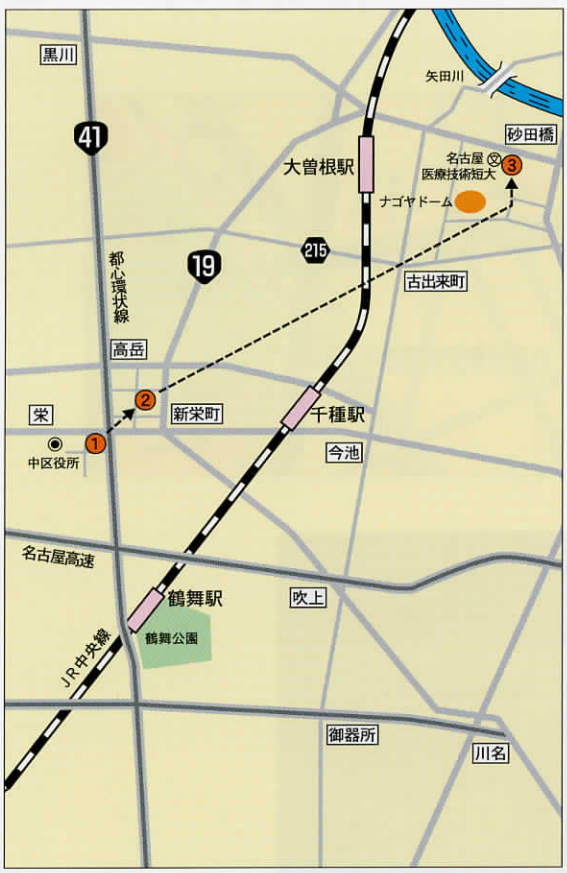
ちょっと名大史

⑫医学部附属病院分院（東新町時代）

現在、本学の医学部附属病院は分院組織を持っていませんが、1949年５月の新制名古屋大学設置以降、1996年までは医学部附属病院分院が設けられていました。その前身は、1943年５月に陸田志よう氏から寄付を受けた市内中区新栄町三丁目（現在の中区栄四丁目）にあった陸田ビルの敷地・建物を使用した名古屋帝国大学医学部附属医院分室でした。その後この分室は、翌1944年５月に正式に医学部附属医院分院としての設置が認められています。

なお、附属医院（病院）分院の所在地は、設置当初の①市内中区新栄町三丁目（現在の中区栄四丁目）から、1961年には②市内東区東門前町二丁目（現在の東区東桜二丁目）へ、また1979年には③市内東区大幸一丁目（現在の東区大幸南一丁目にある大幸医療センター）へと移転しています（下図参照）。『名古屋大学医学部附属病院分院記念誌』（1997年）では、それぞれを①東新町時代、②東門前町時代、③大幸町時代と呼んでいます。

写真は、東新町時代（分院開院当時）の建物風景および陸田ビル（分院）の石膏模型です。この分院は、993㎡の敷地に５階建て鉄筋コンクリート（延べ3781㎡）の建物で、当初から11の診療科（内科・外科・整形外科・眼科・産婦人科・小児科・耳鼻咽喉科・皮膚泌尿器科・神経精神科・放射線科・歯科）が置かれて臨床実習ならびに一般診療を行っていました。



ちょっと名大史

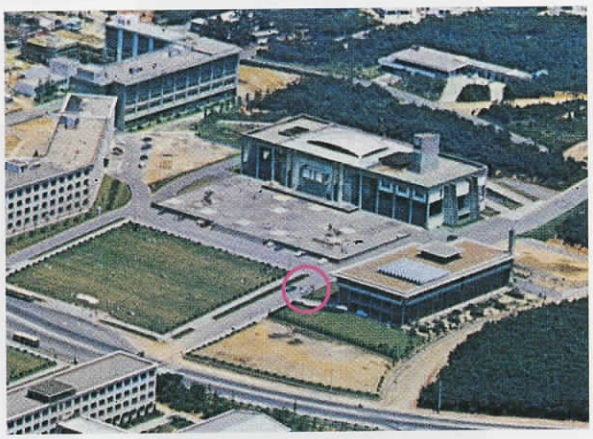
⑬鬱金桜（うこんさくら）

本学博物館（旧古川図書館）の西角に一本の桜があります。それは、ソメイヨシノの開花より遅く４月下旬～５月上旬に薄黄緑色で八重咲きの花をつける「うこんさくら」です。

「うこんさくら」は、漢字では本来「鬱金桜」と書きます。「鬱金」とは漢方薬や染料などに使われる植物の名前で、鬱金が使われた染料色である鮮黄色を鬱金色と呼びます。この桜の花も鬱金色をしているところから鬱金桜と名がついたそうです。

一方、昔から「右近の橘、左近の桜」といわれています。これは、植える桜の品種に関係なく、宮殿（天皇の座る場所）の中から正面南の方を見て、左の位置に桜を植えることを意味します。ところが、天皇に拝謁する（すなわち南から北へ宮殿を見る）側からこれを見ると、桜は右の位置にあることになります。こうしたことから、この位置の意味（「左近の桜」が右に見えること）や「鬱金桜」という品種名が混同されて、位置関係の意味での「右近の桜」と誤用されたり、また品種名「鬱金桜」に本来とは逆位置を意味する「右近桜」の漢字を宛てたりするようになったようです。しかし、品種上は「鬱金桜」、位置関係では「左近の桜」というのが本来の意味です。

ところで、本学にある鬱金桜の植樹時期・経緯については、当時の附属図書館職員の杉山茂雄氏（1969年度退職）が個人的に植えたものであるともいわれていますが、正確なことは不明です。学内資料的には、1967-8年頃に撮影された写真にその幼木と思われるものが写っており、それ以前の写真にはまだ写っていないことを確認できるのみです。



▲『名古屋大学概要（昭和43年）』より

ちょっと名大史

⑭農学部第一回卒業記念樹

学内も鮮やかな緑いっぱいに彩られる時期になりました。とくに東山キャンパスに緑が多いのは、建設当時はこのあたりがまだ名古屋市街地から郊外にあたる山の中であったことと、これに着目した澁澤元治初代総長が提唱した「緑の学園」構想によるところが大きいものと思われます。この「緑の学園」に寄与している中に、学内に植樹されたさまざまな記念樹があります。そのなかで今回は農学部第一回卒業記念樹をご紹介しようと思います。

農学部の創立は1951年です。名古屋大学九学部のうち、1949年の新制大学設置より後に創立された唯一の学部です（1993年創立の情報文化学部は旧教養部に泉源をもっています）。しかも名古屋から遠く安城に学部キャンパスが造られました。当時は理・工学部以外の学部は東山キャンパスにありませんでしたが、それでも名古屋市内にあり、農学部だけが名古屋市外にありました。このため農学部関係者はいろいろな不自由さを感じて生活していました。第一回卒業記念樹は、1955年にこの旧安城キャンパスに植えられました。樹種はメタセコイアです。

そして1966年農学部の東山移転とともに、現在の地に移植され、今に至っています。移転に際し、記念樹も一緒に移植するのは珍しくはないのでしょうが、そのなかでもこの第一回卒業記念樹が選ばれたのは、学部創立や安城生活に対する農学部のさまざまな思いを後世にも伝えようとしたのではないかと思われます。またそれが樹であることも、いかにも農学部という気がします。この樹は『名古屋農学部三十年史』や『名古屋大学五十年史　部局史二』に掲載されたほか、一昨年刊行された『名古屋大学農学部五十年史』では、その栞のデザインとなっています。農学部同窓会も「セコイア会」と称しています。ある意味農学部の一番古い歴史・伝統を伝える象徴的な記念物と思われます。

▲現在のメタセコイア

▲現在の記念碑

▲植樹当時の幼木（安城キャンパス）

▲東山キャンパス

▲50周年記念誌の栞

ちょっと名大史

⑮名高商梅檀（センダン）と樟（クスノキ）

本学経済学部第１講義室に通じる屋外階段に向かって右側（西側）の少し離れた場所に１本の大きな樟があります。約40年前、その場所に樟はありませんでした。1964（昭和39）年、そこには酒井正三郎（正兵衛）経済学部教授の退官を記念して、１本の梅檀の樹が移植されました。酒井正三郎は、1925（大正14）年に本学経済学部の前身校である名高商（名古屋高等商業学校）の教官となり、その後1964年３月に退官するまで経済学部教官として本学に貢献しました。その間、初代法経学部長（名高商の後身校である名古屋経済専門学校長を兼任）ならびに初代経済学部長を歴任しています。

退官記念樹の梅檀は、もとは名高商（現在の名古屋市立大学医学部）の玄関付近にあったものですが、名高商時代から名大経済学部時代を歩んだ酒井正三郎の足跡と重なりつつ経済学部の歴史を見守る樹として移植されたのでした。残念なことに、その梅檀は、大学紛争時の学生間の騒動で傷つけられ、その後に立ち枯れてしまいました。

一方、現存する樟は、当時を知る人の話によると、梅檀の移植後にその西側に植えられたもので、梅檀と樟が並んで立っていたとのことです。梅檀が存在しない現在、樟はその役目を引き継ぐかのごとく、新緑に萌えています。

▲酒井正三郎名誉教授（1965年頃）

▲現在の樟（左横にあるのが屋外階段）

▲梅檀と樟（「経済学部卒業アルバム」1969年度）
左端に梅檀（右奥）と樟（左手前）が写っている

▲東山キャンパス

ちょっと名大史

⑯郁達夫（ゆ だっふ）文学碑

郁達夫（Yu Du-fu）は、1896年中国浙江省富陽県の生まれで、魯迅・郭沫若らにつぐ中国近代文学の代表的な作家です。1913年に来日、1915年名古屋大学の前身校である第八高等学校第三部（医科）に入学しました。翌年第一部（文科）に転部し、1919年に八高を卒業しています。

1921年に刊行された処女小説『沈淪』は、郁達夫八高時代の自伝的小説です。当時の中国人留学生の孤独や抑圧された性を素直に表現しており、中国の近代文学で性の問題を真正面に取り上げた最初の作品として評価されています。また、熱田神宮・鶴舞公園など名古屋の名所が随所に描かれており、当時の名古屋の様子もうかがい知ることができます。

1922年に東京帝国大学経済学部を卒業後に日本を離れ、中国へ帰国後は北京大学・広州大学等で教えるとともに創作活動を行いました。1936年11月に再来日し、志賀直哉・井伏鱒二・大宅壮一・林芙美子・横光利一など当時の日本文壇の著名人とも交流しています。日中戦争が始まった当初は、郭沫若らとともに抗日運動に参加しましたが、1938年にはシンガポールへ移って新聞編集や日本軍憲兵の通訳をしました。1945年の敗戦直後、日本軍憲兵に殺害されてしまいました。戦前日本の誤った時代の犠牲者の一人といえます。

郁達夫文学碑は第八高等学校の同窓会である「八高会」により、八高創立90周年を記念して建てられたもので、題字は横山秀吉氏（八高第16回卒業）で、彫塑は石田武至氏、碑文は大池青岑氏、石は中国福建省廈門産の御影石です。1998年６月30日に除幕式が行われました。

▲郁達夫

▲郁達夫文学碑

▲八高創立90周年記念「郁達夫文学碑」除幕式

▲東山キャンパス

ちょっと名大史

⑰伊藤圭介胸像および「伊藤圭介先生誕生之地」碑

名古屋を代表する世界的な著名人として「文においては伊藤圭介、武においては豊臣秀吉」ともいわれる伊藤圭介は、1803（享和３）年１月名古屋呉服町（現名古屋市中区丸の内３丁目10番）の医者の家に生まれました。植物学に興味をいだき、1826（文政９）年２月宮（現熱田区）で、江戸に赴く途中のシーボルトに、植物の学名の点検を依頼したのを機に、翌年長崎に赴き、シーボルトの下で植物学を学びました。「泰西本草名疏」を訳述刊行したほか、多数著書を出しています。また医者としても尾張藩で種痘を始めるなど、この地域の医療に尽しました。

明治政府から大学に出仕するよう命じられ、1870（明治３）年11月に名古屋を離れ上京、1881年東京大学教授に任ぜられ、1888年日本初の理学博士の学位を受けました。1901年に逝去しています（享年99歳）。

伊藤は上京する直前、名古屋藩に西洋医学の病院と学校をつくるよう建議し、これが現在の名古屋大学の前身となる仮医学校・仮病院の設置となりました。いわば名古屋大学の生みの親といえます。このほか仮医学校・仮病院の後身校となった愛知医学校の教諭奈良坂源一郎による愛知教育博物館建設にも間接的に関与しています。

第３代名古屋大学総長勝沼精蔵は伊藤の顕彰に努め、彼の強い要請によって1955（昭和30）年に、遺族から「錦窠植物図説」ほか遺品188冊が附属図書館へ寄贈されています（伊藤圭介文庫）。また同じ頃伊藤圭介座像（鶴舞中央図書館前）や「伊藤圭介先生誕生之地」碑（上述生誕地、写真右）が、勝沼の組織した伊藤圭介顕彰会によって建てられています。そのほか東山植物園（写真中）や地元小学校に胸像、平和公園に碑など、名古屋市内各地に記念碑像があります。

▲伊藤圭介

▲伊藤圭介胸像

▲「伊藤圭介先生誕生之地」碑

ちょっと名大史

⑱岡崎高等師範学校帽章

1945（昭和20）年４月に創立された岡崎高師（岡崎高等師範学校）は、その４ヵ月後に岡崎市空襲で校舎を焼失、その後同年12月に岡崎市から豊川市への移転、1949年度には新制名古屋大学への包括を経て、1951年度末に閉校となり７年間の校史に幕を閉じました。

現在、大学史資料室には岡崎高師の徽章（帽章）が保管されています。同校同窓会（黎明会）の加藤貞夫氏の寄贈によるものです。一般に、徽章はステータス・シンボルとして、在校生・卒業生の所属感・連帯感などを生み出すものとされていますが、岡崎高師の徽章は「高師」という文字を桜の小枝で囲んだデザインとなっています。岡崎公園が桜の名所であることから、「岡崎」を表するものとして桜が使われたと考えられています。

帽章は、創立間もない頃は物資が極端に欠乏していた敗戦前後の時期であったため、黒布にデザインを印刷したものが使われていました（写真１）。その後、時期は不詳ですが、厚手の台布にデザインが刺繍された帽章が登場しました（写真２）。さらにその後、帽章はようやく真鍮製のものになりました（写真３）。しかし、長髪学生の増加に伴い学生帽の着用が減少したため、この帽章も次第に使われなくなったようです。

ちなみに本学では、名古屋大学学章取扱要項（1998年制定）により、通称「NU（エヌ・ユー）マーク」（図１）が公式学章とされ、公的印刷物などの各種用途に使用されています。

▲写真１

▲写真２

▲写真３

▲岡崎高等師範学校正門

▲図１

ちょっと名大史

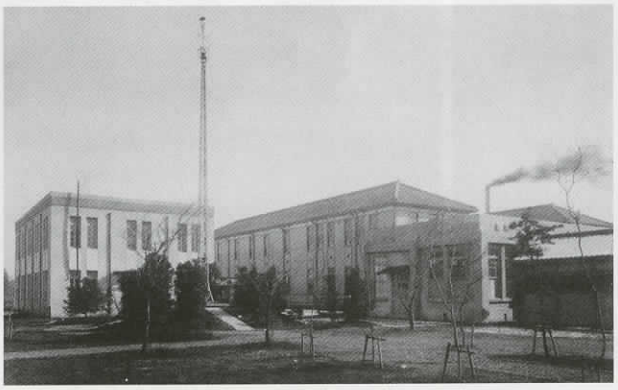
⑲其湛（きたん）塔と創統（そうとう）の鐘

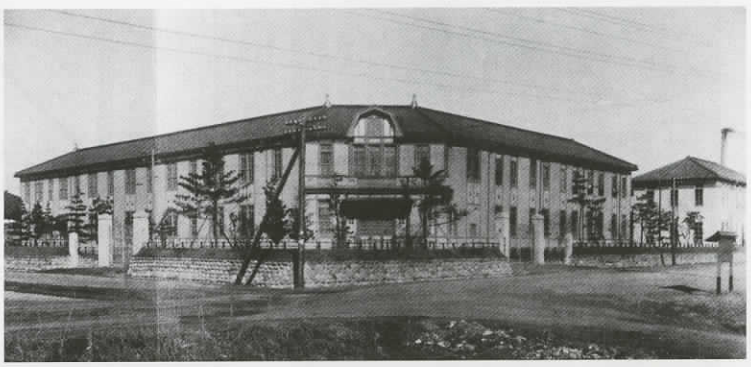
本連載第２回（No.109）で取り上げたように、1920（大正９）年に創立された名古屋高等商業学校（名高商）は、本学経済学部の前身校にあたります。名高商が第１回入学生を迎えたのは翌1921年のことでした。写真の時鐘は、その第１回卒業生が卒業記念として母校に寄贈した其湛塔の塔頂に掛けられたもので、その銘文から「創統の鐘」と呼ばれています。「其湛」および「創統」の意味については、「『其湛』の二字は校長渡辺龍聖閣下の撰ばれし所にして無辺際の進展を意味し、・・・『創統』の二字は我等が撰びて以つて我等が把持せる創造的精神の具象たらしめしもの」とされています。

創統の鐘を頂く其湛塔は、高さ約18メートルの鉄骨製の塔で、1924年６月に竣工しました。其湛塔は戦時中の鉄材供出のために取り壊されて現存しませんが、創統の鐘は幸いにもその難を免れました。創統の鐘は、其湛精神の象徴としての音色が重視され鋳物作りの本場である小田原で作成されたもので、全砲金の鋳物で西洋風の瀟洒な形をしています。現在、創統の鐘は本学経済学研究科で保管されています。

なお、其湛塔と創統の鐘が竣工する１ヶ月前の1924年５月には、母校と卒業生とを結ぶ同窓組織としての旧「其湛会」発会式が行われています。同会は、現在の経済学部同窓会である社団法人キタン会の前身組織の一つとなっています。

▲「創統」の鐘


▲其湛塔（名高商1927年アルバムより）


▲名高商校舎外観（名高商1926年アルバムより）

ちょっと名大史

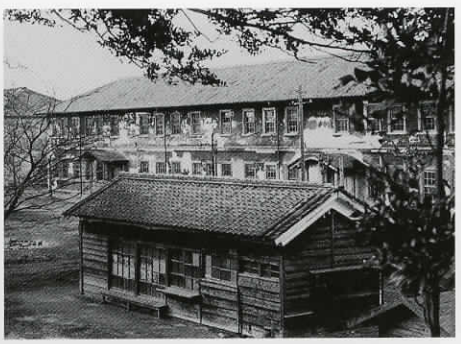
⑳旧名城キャンパス文学部三号館（明治村旧歩兵第六聯隊第十中隊兵舎）

戦前の名古屋帝国大学には文系学部がありませんでしたが、敗戦直後から文・法・経済の文系三学部を新設しようという動きがおこりました。1947年10月に帝国大学の名称がなくなり、名古屋大学（旧制）になると、この文系学部の設置が具体的に検討されるようになりました。そこで文系学部のキャンパス予定地として、名古屋城二の丸内にあった旧歩兵第六聯隊兵舎を取得（名城キャンパス）、1948年６月にまずは大学本部事務局が移転しています。

文系学部設置には紆余曲折がありましたが、結局同年９月に文学部と法経学部が設置され（ともに旧制、法経学部は1950年３月に法学部と経済学部に分離）、翌1949年４月には教育学部（新制）も新設されました。このうち、旧名古屋高等商業学校を母体とする法経学部経済・経営学科を除いた、文学部、教育学部、法経学部法律・政治学科が名城キャンパスにつくられました。このキャンパスはその後、1963年に東山キャンパスへ移転終了するまで使用されました。

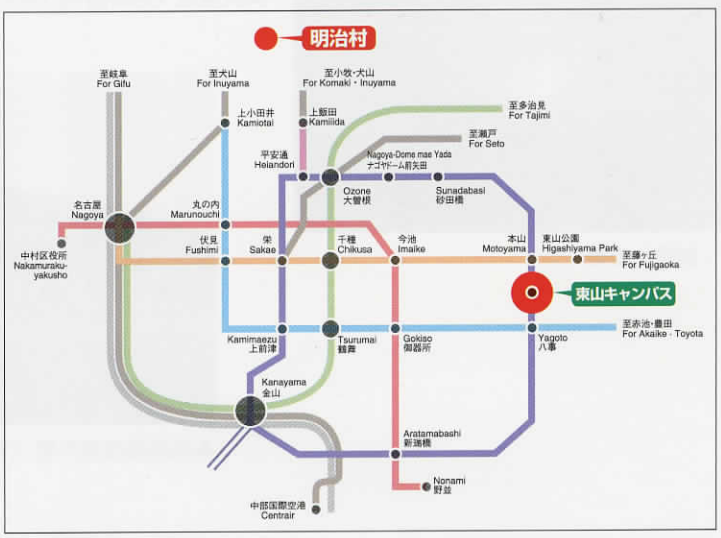
1965年に名城キャンパスにあった旧校舎のうち文学部三号館だけが、博物館明治村（愛知県犬山市内山１）へ移築されました。この建物には二階に東洋史・西洋史・国史（日本史）、一階に地理・考古・独文・英文の各研究室などが入っていました。ただ、明治村に現存のものは、明治期の建物名である旧歩兵第六聯隊兵舎の名称となっています。また明治村へ移築の時に建物が縮小されており、さらに建物の色も灰色であったのが、現存では鮮やかな白となっています。文学部三号館の面影ではなく、それより以前の旧歩兵第六聯隊兵舎の趣きで改装されて残されたのは、「明治」村である以上しかたありませんが、名古屋大学にとってはちょっと残念な気がしますね。

▲旧名城キャンパス全景
（数字号館は文学部建物、1959年）


▲旧名城キャンパス当時の文学部三号館
（後ろの建物）

▲明治村旧歩兵第六聯隊兵舎
（旧文学部三号館）

▲旧名城キャンパス



▲明治村

ちょっと名大史

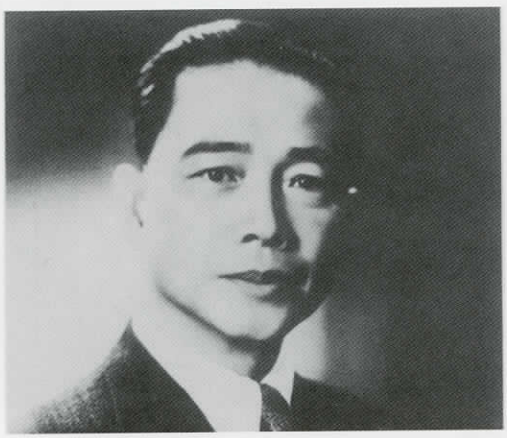
㉑汪兆銘（汪精衛）の梅

本学大幸地区（名古屋市東区）の大幸医療センター内には、「汪兆銘の梅」と呼ばれる二本の梅の木があります。これらの梅は、もとは鶴舞地区（名古屋市昭和区）の医学部中庭に植えられていたものですが、医学部建物の改修工事等の関係で移植されたものです。

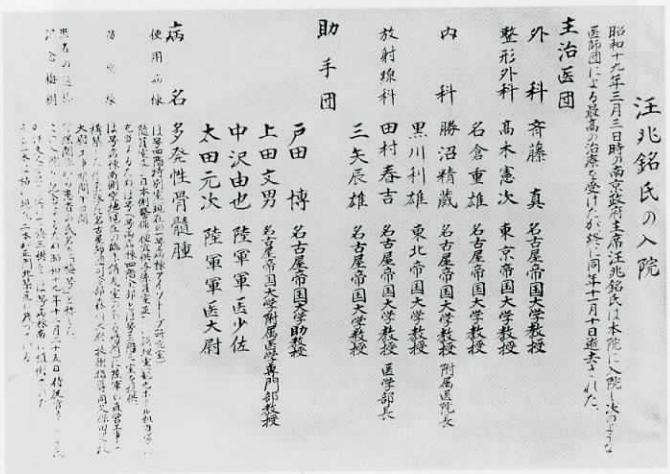
汪兆銘（1883－1944）は中国広東省生まれの政治家で、清朝末期に日本へ留学し法政大学を卒業しています。彼は、孫文の中国革命同盟会のメンバーで、国民党左派の重鎮でした。孫文の死後、汪は国民政府主席として国民党政権を指導しましたが、日中戦争後は親日派として、対日派の蒋介石と対立しました。1940（昭和15）年には日本の支援により南京国民政府を樹立しました。

1943年、汪は、南京の日本陸軍病院で以前受けた凶弾の摘出手術を受けました。しかし、手術後の経過が思わしくなかったため翌年３月に来日し、名古屋帝国大学附属病院で再手術を受けました。このことは、暗号「梅号」と呼ばれて一般には公表されませんでした。しかし、彼の病気は多発性骨髄腫であったため、治療の甲斐もなく同年11月に附属病院内で死亡しました。

「汪兆銘の梅」は、汪の死後、治療に対する感謝として遺族から寄贈されたものです。彼が梅をこよなく愛していたためといわれています。梅は当初三本ありましたが、のちに一本が枯れたため現存するのは二本となっています。



▲汪兆銘（附属図書館医学部分館所蔵）



汪兆銘氏の入院

昭和十九年三月三日時局南京政府主席汪兆銘氏は本院に入院し次のような医師団による最高の治療を受けたが終に同年十一月十日逝去された。

主治医団

外科　斉藤　真　名古屋帝国大学教授
整形外科　高木憲次　東京帝国大学教授
名倉重雄　名古屋帝国大学教授
内科　勝沼精蔵　名古屋帝国大学教授　附属医院長
黒川利雄　東北帝国大学教授
放射線科　田村春吉　名古屋帝国大学教授　医学部長
三矢辰雄　名古屋帝国大学教授

助手団

戸田博　名古屋帝国大学助教授
上田文男　名古屋帝国大学附属医院専門部教授
中沢由也　陸軍軍医少佐
太田元次　陸軍軍医大尉

病名　多発性骨髄腫

使用薬

▲汪兆銘の死亡を伝える掲示（附属図書館医学部分館所蔵）

▲鶴舞地区に植えられていた頃の「汪兆銘の梅」

▲大幸地区

ちょっと名大史

㉒豊田講堂完成記念品

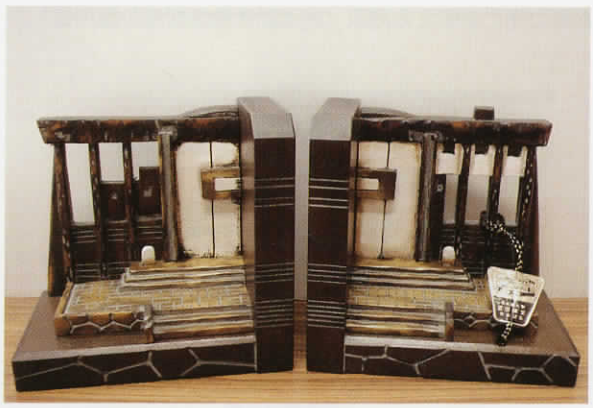
本連載第８回（No.115）において、本学東山キャンパスのシンボルの一つである豊田講堂（設計者：槇文彦。1962年度日本建築学会賞受賞）が1960年にトヨタ自動車工業株式会社（当時）から建設寄付を受けた建物であることについて触れました。今回は、その完成式典等について紹介します。

豊田（とよだ）講堂は1960年４月に竣工しましたが、その完成記念式典は、同年５月９日に行われました。本資料室の保管資料によると、式典は「開式の辞」「音楽演奏」「式辞」「設立経緯について」「工事経過報告」「寄付目録贈呈」「感謝状贈呈」「総長あいさつならびに感謝状授与」「文部大臣祝辞ならびに感謝状授与」「来賓祝辞」「祝電披露」「万才三唱」「閉式の辞」の順で行われ、式典後には同講堂ロビーで祝賀会が催されました。

写真（左下）は、完成式典の際に、本学とトヨタ自動車工業㈱の連名で用意された記念品（木製ブックエンド）です。各サイズが横幅16cm×奥行10cm×高さ15.5cmの豊田講堂をデザインとした特製品ですが、その製作者名や製作数量などは明らかではありません。なお、同講堂の完成記念品としては、このブックエンドのほかに名大生協が作成した「豊田講堂完成・第１回名大祭　記念絵葉書」（４枚組み）があります。

▲豊田講堂完成式典

▲音楽演奏


▲ブックエンド

▲生協作成の記念絵葉書

ちょっと名大史

㉓古川為三郎・志ま夫妻記念プレート

本連載第９回（No. 116）でも述べましたように、本学東山キャンパスの古川総合研究資料館（旧古川図書館）は、故古川為三郎（日本ヘラルド映画株式会社会長）・志ま御夫妻から建設資金の寄付をいただいて、1964年に建てられたものです。

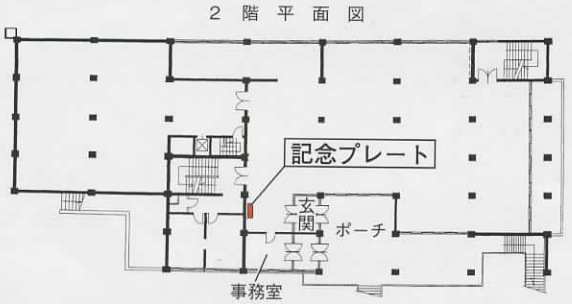
附属図書館の建設経費は約２億円と見積もられ、地元官民各界から資金援助をうけて建設する計画でしたが、なかなか資金繰りがつきませんでした。そのようななか当時（1962年頃）の名古屋市水道局長・松見三郎さんが、千種区長時代に親交のあった古川為三郎さんのご自宅（千種区内）にお願いにあがり、為三郎さんは２億円のうち１億円の寄付を約束されました。当時事業を拡大していた為三郎さんには、個人で援助できる金額としては、１億円がやっとだったようです。

ところが松見さんが帰宅した後、為三郎さんの妻志まさんが、残りの１億円について「その１億円私が出しましょう。大学の図書館といえば、明日の日本を背負う若い人が勉強するところです。そんな人を育てるなら、私の財産など惜しくもありません。さあどうぞ使ってください。」といって、預金通帳・株券などをご自分の金庫から持ち出されました。これに対し為三郎さんは「これは、元へ戻しときなさい。わしは土地を売ってでも、合計２億円にして、名大へ渡そう」と答えたそうです。

翌日、当時の名古屋大学総長勝沼精蔵が古川さん宅を訪ね、あらためて寄付の話をうけました。勝沼総長が帰ったあと、古川さん宅の玄関には勝沼総長の靴がそのまま残っていたそうです。１億円と思っていたのが２億円全額と、そこで初めて聞いた勝沼総長が喜んで帰った様子が推測されます（以上、小橋博史『獅子奮迅　古川為三郎伝』より）。

旧古川図書館＝現在の古川総合研究資料館（博物館）を玄関から入ると、正面の壁に古川為三郎・志ま御夫妻の記念プレートが掲げられています。そこには「この図書館は本学の教育と研究に資するため古川為三郎氏、志ま夫人の篤志によって寄贈されたものである」と、志ま夫人の名前も刻まれており、このエピソードの信憑性を印象づけています。

▲記念プレート



▲博物館内図面

▲東山キャンパス

▲古川為三郎・志ま夫妻（1960年頃）

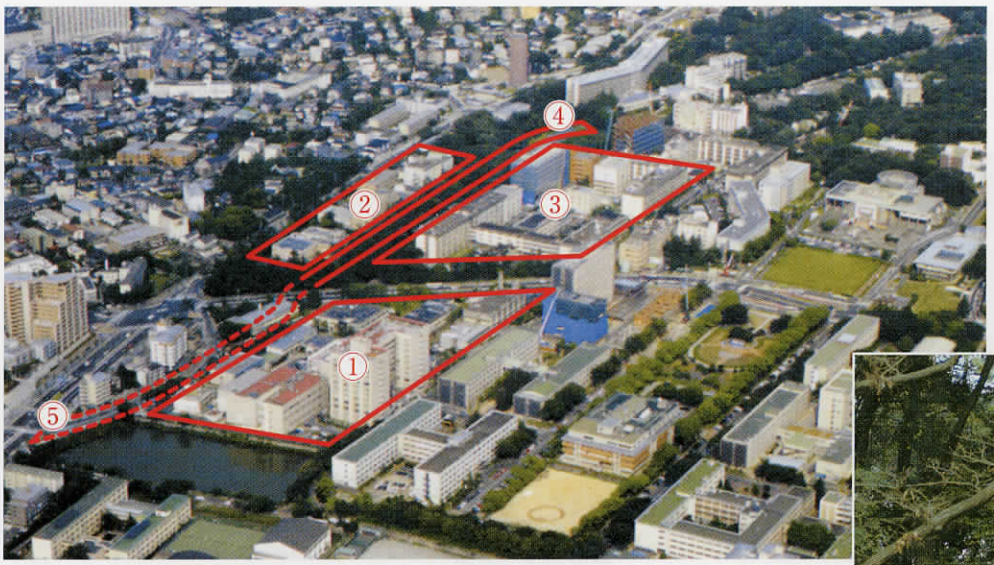
ちょっと名大史

㉔東山キャンパス「緑のトンネル」

本学の東山キャンパス用地は、名古屋帝国大学が創設された1939年に取得されました。そして、1942年４月から６月にかけて、工学部と理学部が東山キャンパスへの移転を行っています。その当時は、四谷通を挟んで、西側（写真１の①）部分に工学部校舎、東側の高台（写真１の②）部分に理学部校舎が建てられていました。また、理学部校舎の南側（写真１の③）部分には「東山運動場」がありました。

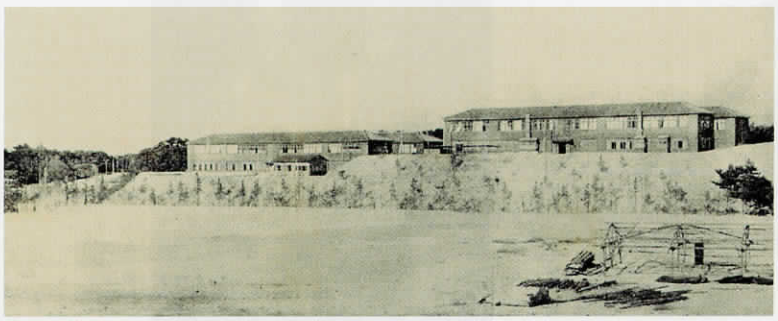
名大史ブックレット２『名古屋大学　キャンパスの歴史１』において紹介されていますように、本学東山キャンパスには「緑のトンネル」と呼ぶことができる道があります（写真２）。この「緑のトンネル」は、四谷通三丁目交差点から四谷通沿いに少し南へ進んだ所に入口があり、そこから工学部５号館・環境総合館、理系食堂・グリーンサロン東山を経て、農学部校舎へと抜けています（写真１の④部分）。

この「緑のトンネル」は、東山キャンパス整備以前の耕地区画整理の際に作られた道で、本来は鏡池の北側から学生会館の南側を通る道（写真１の⑤部分）から続く道でした。当時、この道には樹木がほとんどありませんでしたが、初代渋沢総長による「緑の学園」構想に基づき、植樹が進められたのでした。写真３には、高台に建てられた理学部校舎の手前に、植樹されて間もない樹木（＝「緑のトンネル」）がみられます。



▲写真１：東山地区航空写真

▲写真２：「緑のトンネル」



▲写真３：1942年当時の東山キャンパス

ちょっと名大史

㉕野依教授ノーベル化学賞受賞記念樹・記念碑と記念施設

2001年12月、本学理学研究科の野依良治教授（現･独立行政法人理化学研究所理事長）が、米国のウィリアム.S.ノウルズ氏、K.バリー.シャープレス氏とともに、ノーベル化学賞を受賞したことは記憶に新しいことだと思います。野依氏の受賞がノーベル賞創設100周年という記念すべき年の受賞でもあったことは、本学のみならず日本にとっても非常に喜ばしいことであったといえるでしょう。

本学博物館の前庭には、野依氏のノーベル賞受賞を記念した記念樹と記念碑があります。その記念樹はアスナロ（翌檜）で、「学生がいつか野依教授のようになろうと夢を持ってほしい」との願いが込められています。また、スウェーデン産の御影石で作られた記念碑には、受賞の理由となった不斉触媒「BINAP」のモデル図とともに、野依氏直筆の「研究は瑞々しく、単純明快に」という文字が刻まれています。その記念植樹と記念碑除幕式は、2001年12月28日に行われました。

なお、現在、本学東山キャンパスには、野依氏のノーベル賞受賞にちなんだ二つの記念施設も建設されています。一つは「野依記念物質科学研究館」（本号掲載記事参照）、もう一つは「野依記念学術交流館」と命名されています。

▲ノーベル化学賞賞状

▲記念碑

▲東山キャンパス

▲東山キャンパス

ちょっと名大史

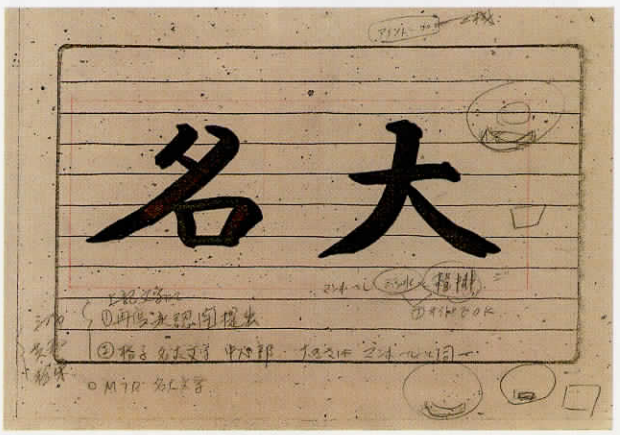
㉖「名大」マンホールカバー

梅雨の季節になって、傘を手放せない日が多くなりました。雨の日に傘をさして歩く時、つい足元に視線が向けられます。今回は、学内のマンホールカバーについて紹介します。

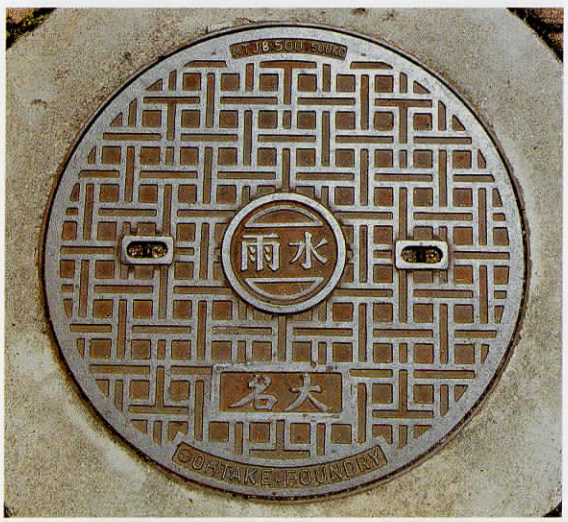
本学構内には数多くのマンホールがあります。それらのマンホールは、形状・大きさともに多種多様で、その設置場所も舗装された道路上のみ限らず、未舗装の地面や建物内など様々です。現在、その正確な数は明らかでないといわれています。

通常、マンホールカバーには「排水」「雨水」「電気」「通信」などマンホールの用途が鋳出されていますが、学内のマンホールの一部には用途名のほかに「名大」という文字の入ったカバーがあります。この「名大」文字入りマンホールカバーは、1970年代半ば頃に作成された特製品です。当時は、市町村や他大学においても名前入りやロゴ入りの特製カバーが作成されたとのことですが、鋳物が高価で取り引きされた時期であったため盗難防止策として考えられたようです。特製品の場合、１度に２～300個を作成しないとコストが割高になるため、その程度の数が発注されたものと思われます。

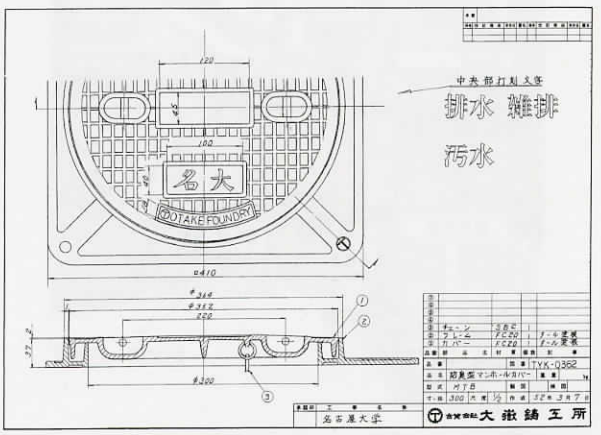
当室には、1977年３月に作成された「名大」文字入りカバーの仕様書（写）とともに、当時の施設部設備課長が揮毫した「名大」鋳出し文字原稿（写）が保管されています。なお、この「名大」文字入りカバーは1991年11月に作成以降、追加作成はされていないとのことです。



▲「名大」鋳出し文字原稿（写）



▲「名大」銘入りのマンホールカバー



▲1977年作成時の仕様書（写）

ちょっと名大史

㉗八高生青春像―わが友 若き旅人よ―

学生帽に学生服、厚いマントを羽織り、高下駄を履いた青年のブロンズ立像（写真①）―この「八高生青春像」は、旧制第八高等学校（八高）の同窓会である八高会が母校創立80年を記念して1988年に名古屋市立大学構内に建立したものです。

本連載の第３回（No.110）でも取り上げたように、八高は1949年に本学が新制大学として（再）発足した際に本学に包括された旧制高等学校です。八高の校地・校舎は、創立翌年に愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑（現在の名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑）に設けられました。同所は、新制名古屋大学の発足に際して本学の瑞穂分校（教養部）となった後、名古屋市に譲渡されて現在のように名古屋市立大学（名市大）山の畑キャンパスとして利用されています。

八高生青春像の設置場所については、吹上公園内や市立博物館前などが検討されましたが、最終的には名市大山の畑キャンパス内の「剣ケ森」（八高の校庭跡）に設置することとされました。ブロンズ像の座台には、八高寮歌「光のどけき」の一節から採った題字「わが友　若き旅人よ」が刻まれています。その除幕式は、1988年10月８日に名市大関係者を来賓として八高同窓生約100名が集まって行われました（写真②）。また、八高生青春像は１／５サイズのミニチュア像（写真③）も製作され、希望者に頒布されました。

なお、八高生青春像については、「名古屋大学大学史資料室ニュース」第15号（2003年10月刊）で詳細に触れていますので、ご参照ください。

▲写真①：除幕式直後の八高生青春像

▲写真②：像を前に寮歌を合唱する除幕式参加者

▲写真③：八高生青春像1/5サイズミニチュア

▲名古屋市立大学のキャンパス

ちょっと 名大史

㉘清川正二(きよかわ・まさじ)―第10回オリンピック・金メダリスト―

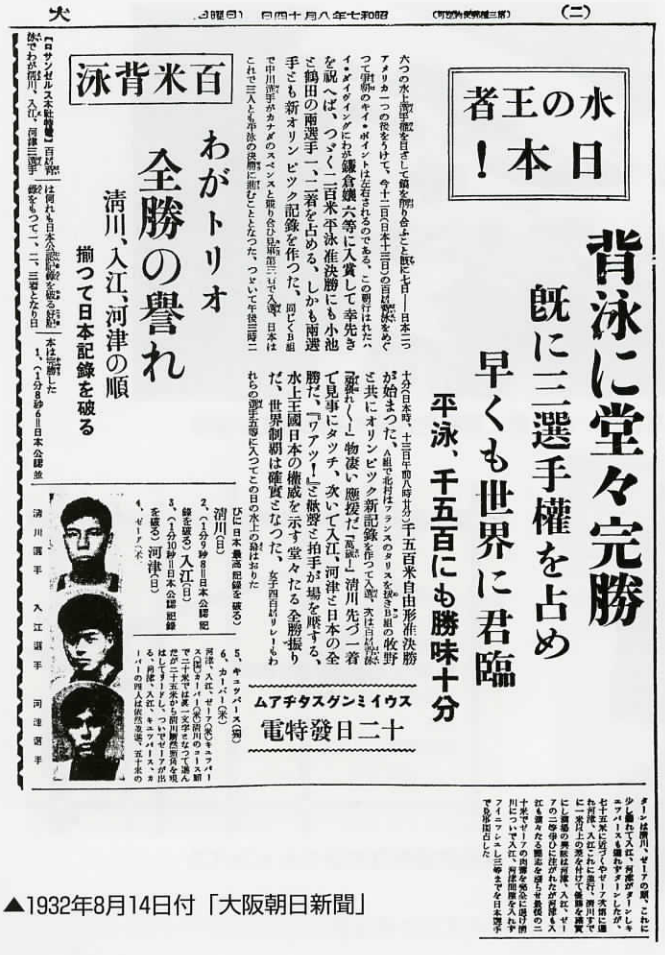
第28回オリンピック（アテネ・オリンピック）の興奮・感動も覚めやらぬ今日この頃です。今回は、オリンピックに関するテーマを紹介します。

今から72年前の1932年、第10回オリンピックがロサンゼルスで開催されました。このロサンゼルス大会では16競技128種目に37ヶ国1328名の選手が参加しました。当時は満州事変などで対日国際世論が厳しい時期でしたが、日本はロサンゼルス大会に192名の大選手団を派遣し、男子競泳６種目中５種目で日本選手が金メダルを獲得して健闘しました。

この金メダル獲得種目の一つである男子100m背泳ぎでは、日本選手が金・銀・銅の３メダルを独占しました。そのとき世界記録に０秒４差の１分８秒６の優勝タイムで金メダルを獲得したのが清川正二です。清川は当時19歳で、本学経済学部の前身校である名古屋高等商業学校（名高商）の３年生でした。また、清川は、1936年のベルリン大会においても同種目で銅メダルを獲得しています。

その後、清川は、1946年から７年間日本水泳チームのヘッドコーチを務め、1969年にはIOC（国際オリンピック委員会）委員に就任、1980年～1983年の４年間はIOC副会長を務め、1999年に86歳でこの世を去りました。

現在、本学経済学部の中庭には、清川の金メダル獲得を記念して(社)キタン会が植樹した月桂樹と「清川正二（十回卒）　ロサンゼルス　オリンピック（第十回）優勝記念」と記された石碑があります。



日本の水王者！

背泳に堂々完勝

既に三選手権を占め

早くも世界に君臨

平泳、千五百にも勝味十分

百米背泳

わがトリオ

全勝の譽れ

清川、入江、河津の順

揃って日本記録を破る

ムアチタスダンミイウス

十二日發電特

▲1932年8月14日付「大阪朝日新聞」

▲清川正二記念樹と石碑

▲キャンパスマップ

ちょっと名大史

㉙工学部旧１号館（南棟）－東山地区最初の鉄筋コンクリート建物－

現在、本学の工学部・工学研究科は、東山キャンパスの北側部分を中心に１号館～９号館およびIB電子情報館などの施設を持っています（下図）。このうち最も新しい建物は地下鉄「名古屋大学」駅３番出口の北側にあるIB電子情報館（北棟と南棟）で、この建物は2001年度国立学校優秀施設表彰の計画部門で文教施設部長賞を受賞しています。

ところで、今から53年前の1951年、ちょうどIB電子情報館南棟が建っている場所に東山地区として記念すべき一つの建物が竣工しました。工学部旧１号館がそれです（写真１）。

工学部旧１号館は、東山地区最初の鉄筋コンクリート造として戦時下の1943年夏に建設が始まりました。しかしその後、基礎の掘削とコンクリート板枠工事が完了した段階で資材不足等のため工事が進まない状態になり、さらに1945年５月の名古屋空襲の際にその基礎板枠のすべてを焼失してしまいました。そして、工学部旧１号館の建設工事が再開されたのは終戦後の1950年のことでした。

本学東山地区で最も古い鉄筋コンクリート造であった工学部旧１号館は、2002年９月に取り壊されています（写真２）。なお、工学部旧１号館が存在しなくなった現在、東山地区で最も古い鉄筋コンクリート建物は1958年に竣工した理学部Ａ館となっています。

▲工学部建物配置図

▲写真１：完成間近の工学部旧1号館

▲写真２：取り壊し前の工学部旧1号館（2001年）

ちょっと名大史

㉚齋藤　眞(さいとう・まこと)―日本における脳神経外科学のパイオニア―

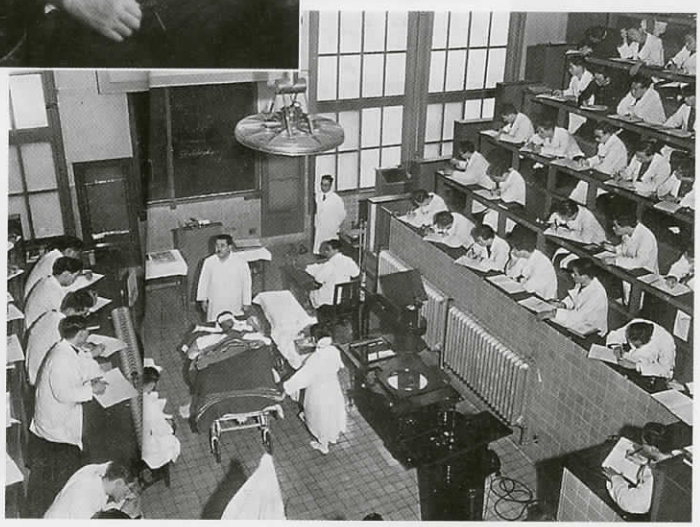
齋藤眞（1889～1950年）は、1911（明治44）年に第二高等学校を卒業後、東京帝国大学医科大学医学科に入学しました。そして1915（大正４）年に同医学科を卒業、翌年には東京帝国大学医科大学副手になるとともに医師免許証を下付されています。齋藤が、本学医学部の前身である愛知県立医学専門学校の講師ならびに県立愛知病院の外科第二部長心得に着任したのは1917年のことでした。

齋藤の専門は脳外科学で、1920年には同医学専門学校教授ならびに同愛知病院外科第二部長職を依願退職したのち、自費でヨーロッパへ渡航し、1924年に帰国するまでウィーン大学、ベルリン大学、パリ大学で病理学と脳外科学の研究に従事しました。この間、齋藤は1922年に愛知医科大学教授に就任しています。

帰国後も、齋藤は脳神経外科における数多くの優れた研究業績を上げ、1929（昭和４）年８月には、ハワイ・ホノルルで開催された第１回汎太平洋外科学会に日本代表として出席し、自身の手になる脳外科の映像を披露しています。また、齋藤は医学教育や学会活動にも意欲的で、1948年には現在の日本脳神経外科学会の前身である日本脳神経外科研究会の発足に尽力し、1949年の第３回総会まで同研究会の会長を務めました。

なお、本学の博物館では現在、齋藤眞の生涯・研究業績と当時の名大医学部の歴史を取り上げた第４回企画展「日本脳神経外科学の開拓者　齋藤　眞」（10／13～11／30）を開催しています。

◀齋藤　眞（1949年撮影）
（同心会編『齋藤　眞』所収）



▲齋藤の設計による外科講堂での臨床講義風景
（同心会編『齋藤　眞』所収）

▲博物館「齋藤眞」展ポスター

ちょっと名大史

㉛加藤鐐五郎と名古屋大学

加藤鐐五郎（1883～1970）は、1910年代から60年代にかけて活躍した、当時の愛知県を代表する政党政治家です。名古屋市議、愛知県議をへて、1924（大正13）年には衆議院議員に初当選し、以後当選12回、通算で30年間もその職にありました。戦後は法務大臣や衆議院議長を歴任、勲一等旭日大綬章をうけています。

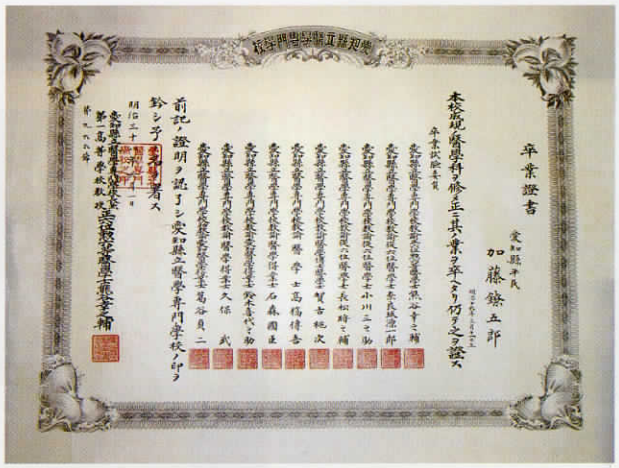
鐐五郎は、名古屋大学医学部の前身である愛知県立医学専門学校を1905（明治38）年に卒業し、医師となりますが、やがてかねてよりの志をはたすべく政治家への道を歩みました。ただそれ以後も、愛知医専の人脈がその政治活動をささえたといいます。鐐五郎も、愛知医専の大学昇格運動では県知事との交渉や県会での演説、官立名古屋医科大学発足時の鳩山一郎文部大臣との談判など、尽力をおしみませんでした。

また鐐五郎は、1944（昭和19）年に名古屋帝国大学から医学博士号を授与されています（「ラッテ」胸腺ノ組織学的研究）。これは1937年の落選による約２年間の「浪人」時代、研究生となって名古屋医科大学に通い勉強した成果でした。戦時中の財団法人喜安病院の設立や、戦後の嫌煙薬「キンエン」の開発は、鐐五郎が名古屋（帝国）大学医学部との連携のもとにおこなった事業です。

一昨年、孫婿にあたる加藤延夫愛知医科大学学長（元名古屋大学総長）から、「加藤鐐五郎関係資料」が愛知県公文書館へ寄託されました。歴史的価値の高い大変貴重な史料群です。これについては、11月発行の『愛知県公文書館だより』第９号に紹介記事があります。

▲愛知医専時代の鐐五郎
（『加藤鐐五郎伝』より）

▲衆議院議員時代（1924年）
（『加藤鐐五郎伝』より）



▲愛知医専の卒業証書（愛知県公文書館）

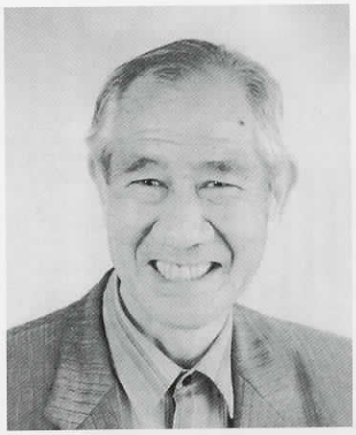
▲名帝大の医学博士号学位記（愛知県公文書館）

ちょっと名大史

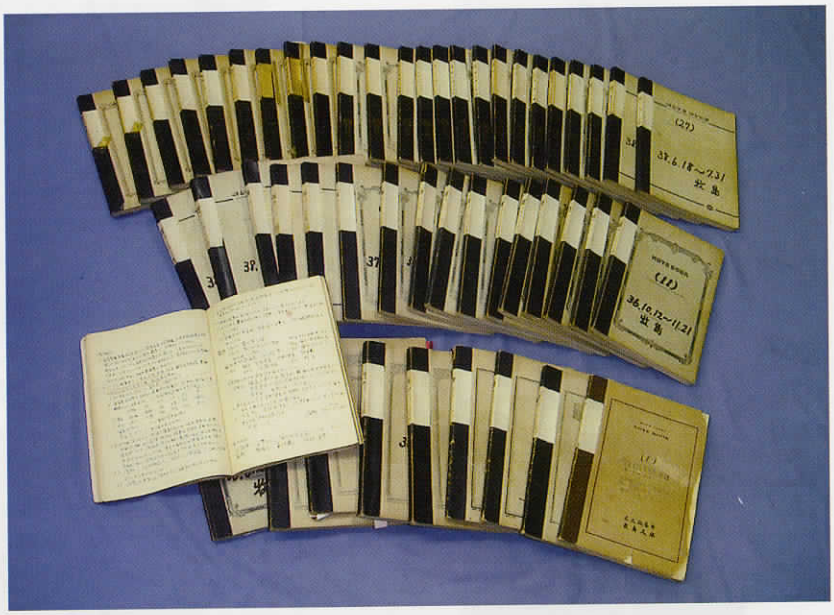
㉜「牧島メモ」―旧学生部初代次長　牧島久雄―

牧島久雄（1913～2000年）は、1939（昭和14）年に東京文理科大学卒業後、奈良女子高等師範学校教授等を経て、1946年には第八高等学校（八高）教授になりました。その後、1949年に八高が新制名古屋大学に包括されて旧教養部になった際、牧島は本学講師になり、1954年には本学助教授となりました。また、牧島は、1959年９月の伊勢湾台風の際に学生の自発的な被害者救援活動に協力したことを契機に、1960年２月から事務局学生部学生課長（教養部助教授を兼任）となり、その翌年度には新設された学生部次長職に就任しました。以後、1975年に定年退官するまでの14年間、学生部次長として学生の生活条件改善に尽力しました。その活動の一端は退官記念論文集『生かされた証』に収められています。また、牧島は、本学退職後も愛知留学生会後援会、国際交流団体協議会、国際留学生会館などこの地域の外国人留学生の生活支援活動に貢献しました。

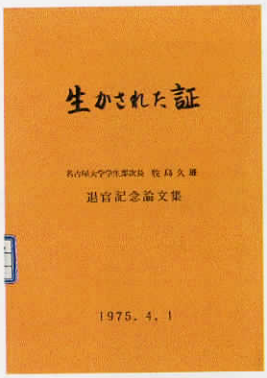
通称「牧島メモ」とは、本学在職中に牧島が書き記したメモです。「メモ」という呼称から数枚程度の記録との印象を受けるかもしれませんが、「牧島メモ」は小型版大学ノートで計206冊にもおよぶ規模の資料群を成しています。現在、「牧島メモ」は、牧島家遺族代表のご厚意により、大学文書資料室に寄託されています。ただし、同メモは大学文書資料室利用規程（第３条第２項）に基づき非公開資料となっています。なお、牧島および「牧島メモ」については、「名古屋大学史資料室ニュース」第10号（2001年３月刊）で詳細に触れていますので、ご参照ください。



▲牧島久雄氏



▲「牧島メモ」（一部）



▲『生かされた証』
（名古屋大学学生部次長牧島久雄退官記念論文集）

ちょっと名大史

㉝坂田昌一（さかた・しょういち）―研究の民主化と平和利用をもとめて―

坂田昌一名誉教授（1911～1970）は、名古屋帝国大学に理学部が発足した1942（昭和17）年から1970年に病死するまで、物理学科（通称物理学教室）の教授として在職しました。ニュートリノなどの素粒子の構造を、いわゆる「坂田模型」や「新名古屋模型」として発表するなど、現在の素粒子物理学の基礎をきずいた世界的に著名な理論物理学者です。『広辞苑』にも、「坂田」の項目にその名前が取り上げられています。

その一方で坂田は、科学が戦争やファシズムに利用された時代を反省し、社会に対する科学者の責任を重視する立場から、研究環境の民主化や研究成果の平和利用を提唱する幅広い活動をした人物としても知られ、多くの著作も残っています（『科学と平和の創造』1963、『科学者と社会』1972など）。

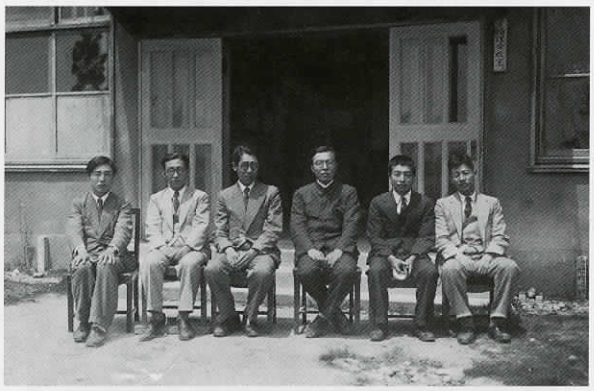
坂田は敗戦直後の1946年、「名古屋大学物理学研究室憲章」制定の中心となりました。そこでは、冒頭に「物理学教室の運営は民主主義の原則に基く。」とうたい、教室が学生をふくめた構成員全員の参加のもと、民主的に運営されることを定めています。同教室では、現在でも憲章の理念にもとづいた規則によって運営がなされています。

また坂田は、京都帝国大学出身の先輩でいずれもノーベル物理学賞をうけた湯川秀樹、朝永振一郎らとともに、科学の戦争利用に反対する運動にも積極的に取り組みました。原子核研究を専門とする立場から、とりわけ核兵器の拡大を憂慮し、科学者による核軍縮運動に情熱をかたむけました。人類がこれまでの「戦争の論理」から、「平和の論理」によって動くようになること、それが坂田の願いだったのです。

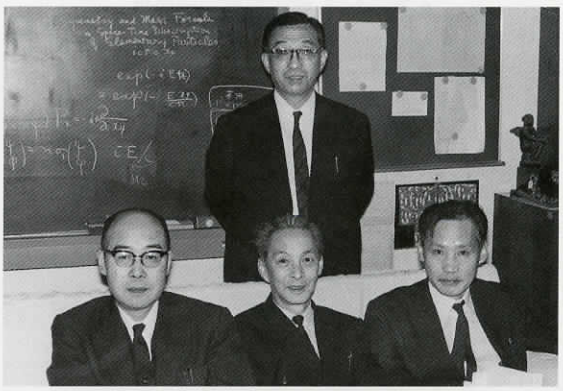
本学の自由闊達な学風と、「名古屋大学平和憲章」（1987年制定）における平和主義の精神は、こうした坂田の科学思想の流れをくむものといえるでしょう。

なお、坂田の死後、物理学教室に坂田記念史料室が開設され、多くの関係資料を収集、整理、保存しています。

▲坂田昌一名誉教授



▲憲章制定の中心になった坂田（左から２番目）、有山兼孝（同３番目）、上田良二（右から２番目）、関戸弥太郎（右端）の各教授（1946年）



▲湯川秀樹（左）、朝永振一郎（中央）両博士と坂田教授（後ろ）

ちょっと名大史

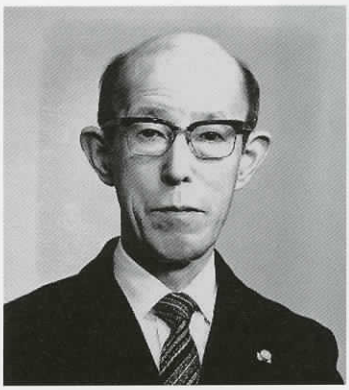
㉞須賀杯争奪駅伝競走大会

毎年10月から１月にかけてのロードレース・シーズンには、いわゆる「学生三大駅伝」―出雲全日本大学選抜駅伝（10月）、全日本大学駅伝（11月）、東京箱根間往復大学駅伝（１月）が開催されます。今回は、そのロードレース・シーズン中に豊田高専（豊田工業高等専門学校）と名古屋大学を舞台に開催される須賀杯争奪駅伝競走大会について紹介します。

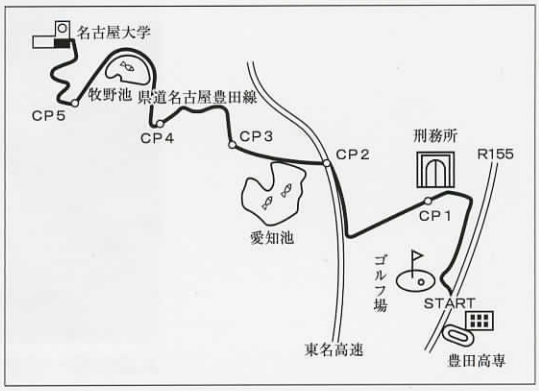
通称「須賀杯駅伝」は、毎年11月下旬頃に開催されます。コースは、下図のように、豊田高専から名古屋大学までの６区間約27㎞となっています。その名称は、創始者である須賀太郎（1903～1986）本学名誉教授にちなんでいます。須賀は、名古屋大学教授時代の1956（昭和31）年から約３年間、学生部長を務めるとともにスポーツを通じての教員学生間の交流を図り、本学体育会の発展にも尽力しました。

当時、名古屋大学工学部教授で陸上競技部顧問をしていた須賀は、1963年４月に豊田高専が設置された際に同校の初代校長に就任し、10年間校長を務めたのち1974年３月に同校を退官しました。その間、豊田高専においてもスポーツ振興にも力を注ぎました。

須賀杯駅伝のように、大学と高専との共同開催で一般道を利用する駅伝は全国的にも数少ないとのことですが、本学と豊田高専の双方でスポーツ振興を図った須賀であったから実現することができた駅伝であるといえます。1964年に第１回大会が開催された須賀杯駅伝は、2004年11月28日秋晴れのもと第41回大会が開催されました。この大会の参加チーム数は本学33チーム・豊田高専26チームの計59チームで、競技の結果、本学のチームが須賀杯を手中に収めました。



▲須賀太郎 豊田高専初代校長



▲須賀杯駅伝ルート図（名大トピックスNo.139より）

▲須賀杯

▲駅伝競争大会の様子（名大トピックスNo.139より）

ちょっと名大史

㉟絵はがきの中の八高

最近、いろいろなところで絵はがきが注目されています。趣味としての絵はがきづくりがちょっとしたブームになっていますし、美術品や文化財として、あるいは歴史を語る史料として研究や鑑賞の対象にもなっています。

このたび大学文書資料室では、戦前の旧制第八高等学校（戦後の名大教養部、現情報文化学部）の絵はがきを入手しました。開校記念と行幸記念のものです。

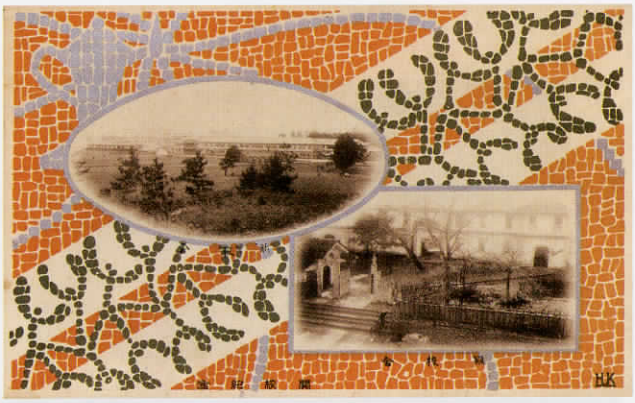
開校記念絵はがきは８枚あり、現在では大変珍しいものです。図柄は、イラストの中に八高の施設や行事などの写真が入っています。下の絵はがきの１枚は、1908（明治41）年創立当初の仮校舎（県立一中旧校舎、現名古屋市東区外堀町）と、その翌年移転した新校舎（現名市大瑞穂キャンパス）の写真を並べたものです。もう一枚は、製図や実験の授業風景です。いずれも、発行は第八高等学校校友会、図案は八高絵画研究会となっています。

行幸記念は３枚で、いずれも写真のみの構成です。これは1927（昭和２）年、即位したばかりの昭和天皇が八高を訪れたことを記念したものです。

八高では、さまざまな行事のたびに、こうした絵はがきを発行していたようです。その他、名古屋市博物館には、所蔵されている八高関係資料（八高会寄贈）の中に絵はがきがありますし、八高関係の記念誌にも写真が載っています。

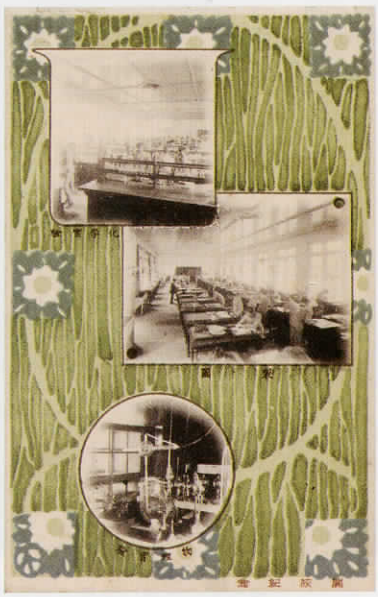
資料室では、こうした絵はがきの展示会ができればと考えています。絵はがきをはじめ、八高関係資料の情報があれば、どんな些細なことでもぜひお寄せください。

▲裏面（開校記念）



▲新校舎（上）と仮校舎（下）（開校記念）

▲行幸記念



▲化学実験（上）、製図（中）、物理実験（下）（開校記念）

36 東山キャンパス「田村模型」
—1940年当時の東山敷地全体模型—

本年2月、大学文書資料室は、豊田講堂地階倉庫内で本学の歴史的遺産ともいえる二つの模型（東山キャンパス「田村模型」）を発見しました（写真1）。今回発見された模型は、名古屋帝国大学創設の翌年にあたる1940（昭和15）年夏から1941年2月頃にかけて製作されたもので、当時の名帝大医学部長である田村春吉（元名古屋医科大学総長・のちの第2代名帝大総長）が京都の島津製作所（模型部）に製作を依頼した1/1000スケール模型です（写真2）。

実は、この「田村模型」については、春光同門会編『田村春吉』（1954年刊）という文献中の山元昌之「聡明敏活」等において、その存在や作成経緯、さらには模型に対する田村の思い入れなどが触れられていましたが、現物の所在は明らかではありませんでした。そこで、大学文書資料室では昨年の春以降、模型の所在調査を開始した結果、1960年代前半の一時期には豊田講堂ロビーに置かれていたという本学元職員の目撃情報等を得ながら模型の探索を行っていました。

この「田村模型」は、当初1/1000模型一つの製作が進められていましたが、途中、田村の指示により高さだけを1/100に変更した模型（写真3）が追加発注されました。追加模型では、現在の東山通（写真3下部）、鏡ヶ池（同右端）、東山動植物園（同左端）のほか民家・街路樹なども忠実に再現されています。しかし何よりもこの「田村模型」の資料的価値は、名帝大創設当初の医学部東山移転構想に基づいて、医学部諸施設の中央を通る（現在の本部別館と硬式テニスコートを結ぶ）計画道路が組み込まれている点、また、東山キャンパス・プランニング用に用意された文字通り本学史上最初の東山キャンパス模型という点にあるといえます。

なお、この「田村模型」については、中日新聞（2005年3月26日付夕刊）においても取り上げられました。

1 発見時の状態（左側が完全な1/1000模型で、右側が高さのみを1/100に変更したもの）
2 模型に貼り付けられた「島津製作所模型部」プレート
3 模型（写真中央から上（南）に伸びているのが計画道路。模型下部を左右（東西）に走るのが現在の東山通。）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

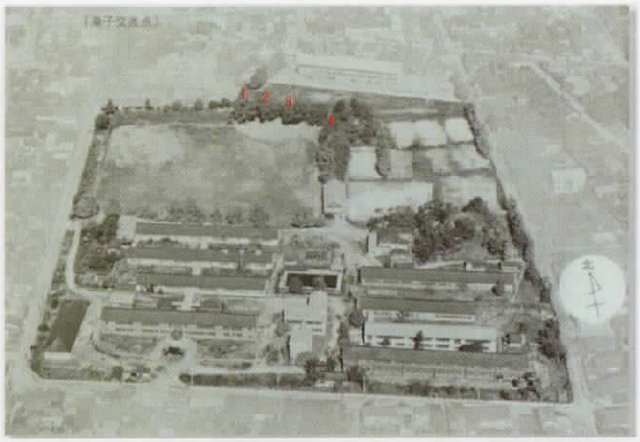
37 名大史を見てきたクスノキ

名古屋市立大学の山の畑キャンパス（瑞穂区瑞穂町）は、かつては名大のキャンパスでした。その歴史は古く、1908（明治41）年の旧制第八高等学校（八高）創設までさかのぼることができます。戦後は名大教養部となり、1964（昭和39）年、東山キャンパスの教養部校舎（現共通教育・情報文化学部棟）建設と交換する形で、名古屋市に譲渡されました。

すでに当時の建物はありませんが、校庭跡は「剣ヶ森」として多くの樹木を残し、八高・名大時代の景観を現在に伝えています。中でも古いのが、以前このコーナーで紹介した「八高青春像」の脇および西方にあるクスノキです。直径約1.5mで、正式な測定はされていませんが、樹齢100年前後のものではないかと言われています。

クスノキの古木といえば、樹齢700～800年をほこる伊勢神宮、それよりやや若い熱田神宮のものが名古屋近辺の双璧をなします。しかしそれ以外は単独の古木はあるもののごく新しく、山の畑のクスノキは、地域における学校史のモニュメントとしてだけではなく、植物学的にも貴重なものです。その他にも同キャンパスには、創立当初に本館前へ植えられ、八高のシンボルとも言われた大ソテツが残されています。またこうした巨木は、周囲の気温を下げる効果もあるそうです。

このような、文化財としても自然の記念物としても高い価値を持つ樹木を、ぜひ長く保存して後世に伝えていきたいものです。



1	2
	3

1 名市大・山の畑キャンパス（写真中の数字で示したものが、樹齢100年前後と言われるクスノキ）
2 東山キャンパスに移転する直前（昭和38年頃）の名大瑞穂キャンパス（教養部）
3 名市大のクスノキ（名市大・谷本英一教授撮影）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

38 第１回名大祭

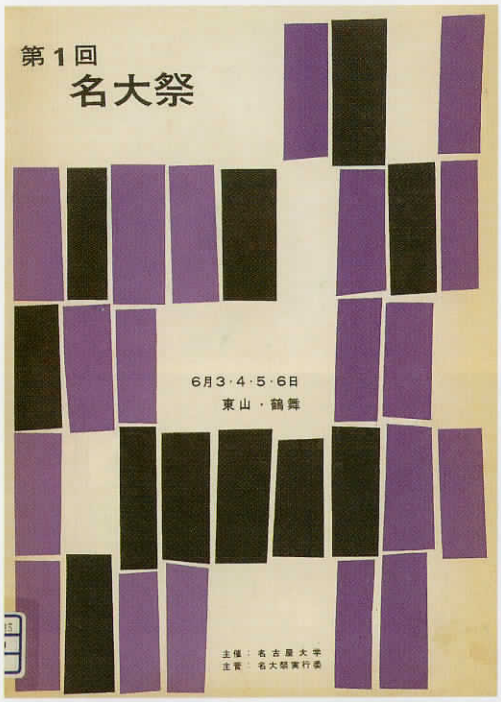
2005(平成17)年６月、名古屋大学では恒例の名大祭(テーマ：道草）が６／２（木）から６／５（日）の４日間にわたって開催されました。

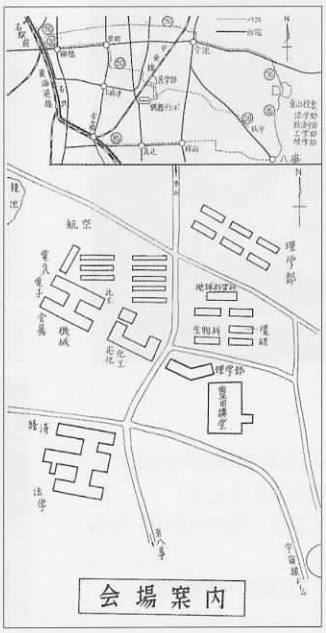
さて、例年６月初旬に開催されるという点で全国的にも珍しい大学祭の一つである名大祭ですが、その記念すべき第１回が開催されたのは1960（昭和35）年のことでした。以下、大学文書資料室が保管している第１回名大祭プログラム冊子（全28頁）を素材に、45年前の名大祭の姿を紹介しておきます。

名古屋大学主催・名大祭実行委員会主管という形で開催された第１回名大祭は、東山・鶴舞の両キャンパスを主会場とする「名古屋大学史上初のフェスティバル」と位置づけられ、学内には名大祭誕生に対する喜びと期待が満ちていたと思われます。こうした喜びや期待の背景には、少なくとも二つの要因がありました。一つは、「たこ足大学」ともいわれていた本学において、それまで市内各所に分散していた部局の東山地区集結が進むとともに、豊田講堂の完成（1960年）によって地理的な環境の改善が図られたことです。もう一つは、「60年安保条約改定」問題（1958～59年）や伊勢湾台風被災者への救援活動（1959年）などによって、「学生運動」が盛り上がりをみせていたことです。

以上のような時代背景のもとで開催された第１回名大祭では、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて―日本人民の歴史づくりのために―」という基本テーマが掲げられ、全学的な規模での講演会・討論会・シンポジウムをはじめとして、各学部展示会･施設公開、医学部祭、自治会・サークルなどが主催する研究発表、音楽・演劇・舞踊の各公演が期間中に数多く開催されました。

なお、第１回名大祭プログラム冊子の催し物案内には、「キャンプ村開設」（６月３・４・５日／東山一帯）という項目が掲載されており、東山キャンパス整備・拡充期ならではの行事が行われている点も興味深いです。





■キャンプ村

東山は絶好のキャンプ地で有る。集まって、青春をうたおうではないか。学生のファイトと集団生活の素晴らしさを御覧あれ。

1 2 3 4

1　第１回名大祭プログラム
2　名大祭会場案内
3　「キャンプ村開設」案内
4　第１回名大祭開催当時の東山キャンパス

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

39 名大初の女性博士

2003（平成15）年度の名大における博士号取得者は557人にのぼります。そのうち、約４分の１にあたる148人が女性であり、すでに女性の博士は珍しい存在では全くなくなっています。

しかし、女性が大学教育から疎外されていた戦前において、女性の博士号取得はきわめて稀であり、それだけで大きなニュースになるほどだったのです。

名大初の女性博士は、早くも名古屋帝国大学（名帝大）が創設された1939（昭和14）年に見ることができます。湯本（旧姓中尾）アサ（1902－1979）という女性でした。

1902（明治35）年、神奈川県箱根に生れた中尾アサは、父親を早く亡くして貧しいなか、母と兄に支えられながら、その抜群の成績により奨学金などを受け、横浜英和女学校から東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）に進みました。同校を首席で卒業したアサは、卒業生で初めて海外に留学し、アメリカのミシガン大学から公衆衛生学の学位を授与されています。

再度の留学先であるドイツでエリート官僚の湯本昇と結婚したアサは、1935年、夫の赴任先である名古屋に同行します。そこで金城女子専門学校（現金城学院大学）の講師をしながら、名古屋医科大学専攻科で研究を続け、同大学が名帝大となるのとほぼ同時に、37歳で博士の学位を得たのです。博士論文の題目は、「女子の身体発育におよぼす職業の影響」でした。

その後、戦争による混乱や夫の病気などで研究を断念せざるをえなかったアサですが、戦後は教育家としても活躍することになりました。群馬県の教育委員を8年も務めたのち、1956年に母校成美学園（元横浜英和女学校、現横浜英和学院）の学園長に就任し、以後16年にわたり、同学園の発展に大きな足跡を残しました。

職場の彼女を代辯
湯本さん名大初の女醫博
陣中論文では宇佐美中佐

1
2
3

1　湯本アサ（成美学園時代、『湯本アサ先生の思い出』より）
2　米国公衆衛生協会欧州視察団（1930年）に加わったアサ（一列目中央、『湯本アサ先生の思い出』より）
3　当時の新聞記事（『名古屋新聞』1939年8月2日朝刊）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

40 青色発光ダイオードと豊田講堂時計台

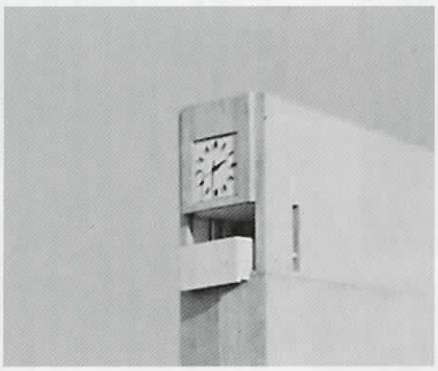
現在、本学東山キャンパスのランドマークである豊田講堂は、夜間のライトアップが行われ、時計台にも鮮やかな青色のイルミネーションが施されています（写真１）。今回は、その時計台のイルミネーションについて紹介します。

本連載第８回（No.115）で取り上げたように、豊田講堂は1960（昭和35）年に完成しました。当時、豊田講堂時計台（直流式塔時計・文字盤直径２m）はライトアップやイルミネーションなども全く施されておらず、昼間しか時計をみることはできませんでした（写真２）。

では、時計台にイルミネーションが施されるようになったのはいつ頃であるかというと、それは1994（平成６）年度のことです。ただし、その当時のイルミネーションは、文字盤および時針・分針に赤色の発光ダイオード（LED）が組み込まれたものでした（写真３）。その後、現在のような青色 LED へと変更されたのは2001年11月のことで、豊田合成株式会社からの寄付によるものでした。

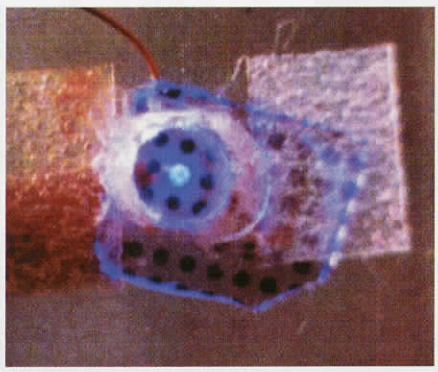
特筆すべきは、現在の時計台に組み込まれている青色 LED は、本学の赤﨑勇特別教授が本学工学部に在職中の1989年に発明・開発したもので、豊田合成㈱によって実用化されたものです。豊田講堂ロビー西側入口手前の壁面には、「豊田講堂時計台に用いられている青色発光ダイオードは、本学 赤﨑 勇 名誉教授が工学部在職中に開発されたものであり、豊田合成株式会社の寄付により完成したものである。」と記された記念プレートが設置されています。

なお、当時不可能とされていた「青」色発光の半導体開発を世界に先駆けて実現した研究業績は半導体研究に革命をもたらしたともいわれ、赤﨑特別教授は2004年度の文化功労者として顕彰されています。また、本学では、2000年度から本学に還元されるようになった青色 LED の国有特許実施料を活用して、赤﨑記念研究事業（特定研究推進、研究奨励、産学連携推進の３事業）を行っています。



1	2	3
	4	5

1　青色 LED が輝く豊田講堂時計台
2　完成当初の時計台
3　赤色 LED 当時の時計台
4　世界初のGaNp-n 接合型青色LED（1989年）発光させている１つの LED の光がウェハー内を透過し、周縁で反射している。（名大トピックス No.138より転載）
5　赤﨑記念研究館模型



本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

41　ＮＵマーク　―名大の学章―

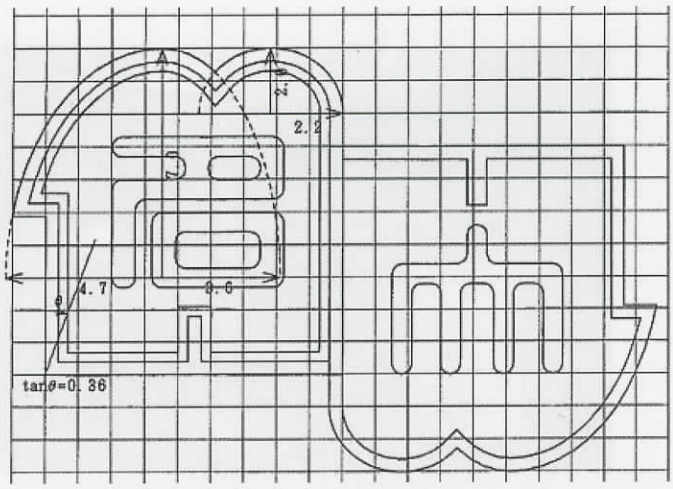
図案化されたNagoya Universityの「ＮＵ」に、篆書体の「名大」を合わせた、通称ＮＵ（エヌ･ユー）マークは、名大の象徴たる学章として、学生バッジや学旗、印刷物、名大グッズなどに広く用いられています。

このＮＵマークが公式に名大の学章になったのは最近のことで、1998（平成10）年に「名古屋大学学章取扱要項」が定められてからです。さらに今年３月には、「名古屋大学学章規程」が制定され、図案のサイズや字の傾き具合も決められています（図２）。色の部分は、本来は黒ですが、名大の尊厳や品位を損なわなければ、名大カラーの濃緑をはじめ特に制限はありません。

ただこのマークは、公式化される以前から長く使われてきたものです。もともとは学生バッジのデザインですが、バッジとしてはそれ以前から、1953（昭和28）年に開学記念行事として記念祭実行委員会が募集選定した、通称シャチバッジ（図３）がありました。その他にも、黒地に金文字で「名大」と書いた業者製作のバッジも使われていましたが、いずれもデザイン的に評判がよいとはいえなかったようです。

そこで1958年には、学生部の発案で新しい学生バッジが作成されることになりました。名古屋大学学生バッジ選定委員会が組織され、図案の学内公募が行われました。その結果、68点もの応募の中から、教養部（法）２年の北川英之君の作品が選ばれ、これをもとにしてＮＵバッジが作られたのでした。

この頃、1954年から56年にかけて、「若草もゆる」、「大空に光はみてり」、「若き我等」と、現在でも歌われている学生歌、応援歌も学内募集であいついで選ばれています。1949年に新制大学としてスタートしながらも、施設が各地に分散する「タコ足大学」であった当時、こうしたバッジや歌は、名大生としての一体感を形として示す、数少ないものだったのかもしれません。



1	2
3	4

1　ＮＵマーク
2　ＮＵマークの図法（「名古屋大学学章規程」）
3　シャチバッジのデザイン
4　四ッ谷３丁目交差点の看板

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

42 豊田講堂と勝沼胸像

名古屋大学東山キャンパスにある豊田（とよだ）講堂の南側ロビー内には、１体のブロンズ胸像があります（写真１）。これは、日本芸術院会員の清水多嘉示（たかし）製作による本学第３代総長・勝沼精蔵（1886－1963）の胸像で、本学医学部第一内科同窓会から寄贈されたものです。

豊田講堂が1960（昭和35）年にトヨタ自動車工業株式会社（現・トヨタ自動車株式会社）から建設寄付をうけたものであることについては本連載ですでに触れましたが、その建設寄付をトヨタ自動車工業に持ちかけたのが勝沼精蔵第３代総長でした。

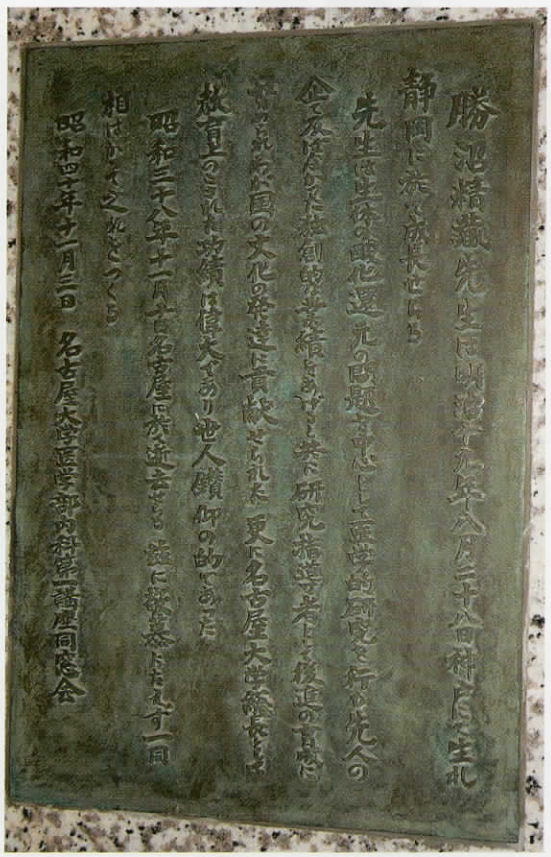
本学では、1950年代後半以降、東山キャンパスの整備が進むにつれて、戦前の名古屋帝国大学時代からの念願であった図書館と大学講堂の建設寄付の実現が課題となっていました。しかし、図書館と講堂の同時建設が困難な状況のなかで講堂優先の方針が定まったことをうけて、勝沼はトヨタ自動車工業の石田退三社長に対して、同社の創設者であり、発明王といわれた豊田佐吉の記念事業として１億円規模の講堂の建設寄付を打診しています。これをうけた石田社長は、1958年11月に「折角寄付するのだから恥ずかしくないものを」と２億円規模の建設寄付に応じたのでした。

勝沼の要請にこたえる形で始まった豊田講堂の建設は、1959年３月に着工し、翌年５月には竣工しました。しかし勝沼自身は、1959年３月末に任期満了にともなって総長職を退いていました。その後、勝沼は1963年に他界し、豊田講堂で告別追悼式が挙行されました。

1965年11月、医学部から勝沼胸像完成の報告をうけて、11月３日に豊田講堂で除幕式を行うことが学部長会で認められました。除幕式には、勝沼家遺族や篠原卯吉第５代学長など関係者約200名が参列しました。

勝沼胸像の設置場所は、除幕式から約10日後の評議会を経て豊田講堂ロビーとすることが認められました。

なお、勝沼精蔵の胸像は、豊田講堂のほかに医学部図書館内にも設置されています。



1 豊田講堂ロビー内の勝沼胸像
2 勝沼精蔵ブロンズ胸像
3 胸像台の銘版

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

43 嚶鳴寮から国際嚶鳴館へ

2002（平成14）年、嚶鳴（おうめい）寮の老朽化と、増加する外国人留学生に対応するため、日本人学生と留学生が共同生活を営む混住型施設として、国際嚶鳴館が竣工しました。定員は約300名、居室は全て個室（バス・トイレ・エアコン付）で、３棟のうち１棟は９階建ての高層建築となっています。

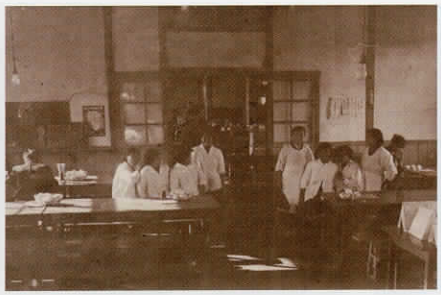
これにともなって取り壊された嚶鳴寮は、1961（昭和36）年に完成したものですが、その系譜は大正時代にまでさかのぼることができます。

嚶鳴寮は、1920（大正９）年に創立された名古屋高等商業学校の構内（現名市大川澄キャンパス）にあった学生寮をその起源としています。嚶鳴とは、鳥が友を求めて鳴きかわすさまをいい（『詩経』小雅の伐木の詩による）、江戸時代の儒学者で、米沢藩主上杉鷹山の師としても知られる、細井平洲（愛知県東海市出身）が江戸に開いた私塾「嚶鳴館」からその名がとられたともいわれています。

戦後の1949年、名高商は新制名古屋大学に包括されて、経済学部の母体となりました（桜山キャンパス）。同時に嚶鳴寮も、そのまま名大の学生寮として引き継がれます。この当時は、学生の約15％が寮生活をしていました。

そして1959年、名古屋市が東山キャンパスに新築した校舎と桜山キャンパスを交換する方式で経済学部の移転が行われると、国際嚶鳴館のある昭和区高峰町の敷地に新しい学生寮が新築され、嚶鳴寮の名も継承されました。

大学文書資料室では、嚶鳴寮に関する資料をほとんど所蔵していません。このままでは、その歴史が風化してしまいかねず、本格的な資料の収集が急務であると考えています。すでに廃止された、豊川分校の振風寮、安城市の碧明寮、瑞穂分校の旧八高学寮などもふくめた、名大学生寮に関係する資料の情報をお持ちの方は、どんな些細なことでもぜひ大学文書資料室までご一報ください。



1 2 3
4

1　名高商の嚶鳴寮（大正時代）
2　1955年頃の嚶鳴寮食堂
3　1991年頃の嚶鳴寮
4　国際嚶鳴館

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

44 愛知医専・愛知病院正門遺構

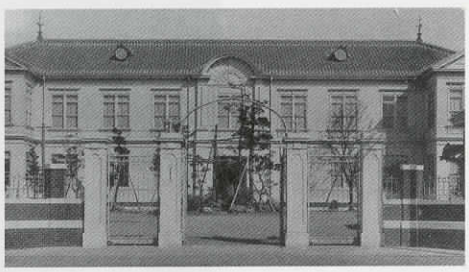
名古屋大学鶴舞キャンパス（名古屋市昭和区）は現存する本学キャンパスのなかで最も古く、1914（大正３）年に本学医学部の前身校である愛知医専（愛知県立医学専門学校）および愛知病院の移転先として設けられました。以後、鶴舞キャンパスは、県立愛知医科大学（1920～）、官立名古屋医科大学（1931～）、名古屋帝国大学医学部（1939～）、旧制・新制名古屋大学医学部（1947～）の各キャンパスとしての約90年のあゆみをへて現在に至っています。

この間、施設の拡充・更新や戦災などによって、鶴舞キャンパス内に戦前の面影を残すものはほとんどなくなっています。しかし、同キャンパス内には、1914年移転当時の愛知医専・愛知病院の門と囲障がそれぞれ遺構として残されており、本学の歴史上も貴重なものとなっています（写真１、２）。

これらの遺構は、本学附属病院病棟の新設工事が1999（平成11）年に行われた際、本学医学部学友会からの建設寄付によって復元保存のための工事がなされたものです。この工事では、遺構の構造補強をはじめとして洗浄・補修、鉄部など欠損部の新設がなされるとともに、夜間照明装置や銘板の設置も行われました。

遺構の復元保存にあたっては、遺構の沿革調査なども踏まえて本学の施設部および本部施設計画推進室（現・施設管理部および施設計画推進室）において計画案の検討が進められました。遺構は、1930年の愛知医科大学時代における囲障新設・改修工事以降、1941年に戦時下の鉄材供出によって鉄柵・門扉などが外された時期までの形態にほぼ復元されているとのことです。

なお、この愛知医専・愛知病院正門遺構の沿革や保存経緯の詳細については、本資料室編『名古屋大学史紀要』（第10号、2002年刊）を参照ください。



1 愛知医専正門遺構（手前）と名大附属病院病棟（奥）
2 愛知病院正門遺構
3 移転当初の愛知医専正門（1914年）
4 キャンパスマップ

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

45 名大グラウンド小史

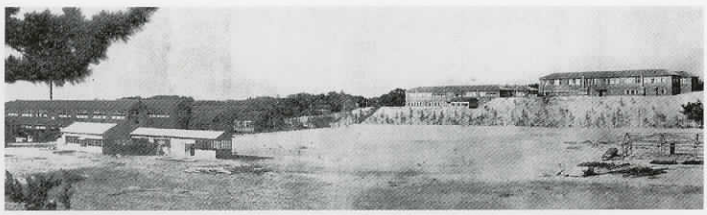
東山キャンパスの東南端にある総合運動場地区（通称「山の上」）は、多くの学生がクラブ活動や全学教育科目のスポーツ実習などで利用する施設です。

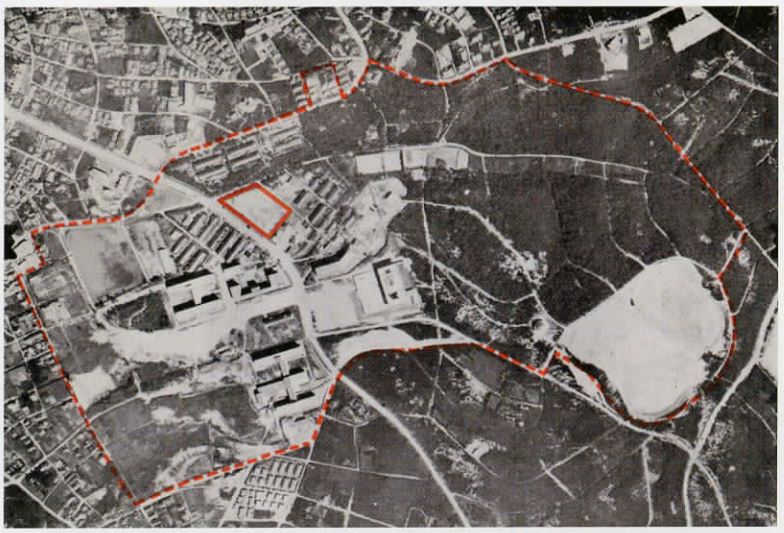
歩くとちょっとした時間のかかる、この山の上地区が整備されたのは、今から45年近く前の1961（昭和36）年のことですが、それまでの東山キャンパスの運動場は、現在の工学部４号館と５号館のあたりにありました。この場所に運動場を設置するという構想は、すでに名古屋帝国大学創立当時からあり、実際に創立後すぐにここが運動場となりました。

敗戦後も、東山キャンパスにこれ以外の本格的な運動場が増設されることはありませんでした。ただ教養部では、旧制八高から引き継いだ瑞穂キャンパスの運動場が使えました。また、桜山キャンパス（経済学部）には旧名高商運動場が、旧陸軍歩兵第６連隊兵舎跡の名城キャンパス（本部、文系学部）、愛知学芸大学安城分校の敷地を転用した安城キャンパス（農学部）にも運動場がありました。八事にも借地のグラウンドがあったようです。

しかし、1950年代末から60年代にかけて、東山キャンパスに本部、文系学部、農学部、教養部などが続々と集結します。そうなると東山にも本格的な運動場施設が必要となりますし、立地条件のよい旧グラウンドの敷地に学部校舎の増設を求める案も出てきました。そこで、少し前に追加取得された山の上敷地に、陸上競技場や野球場が設置されたのでした。まだこの地域の開発が進んでいなかった当時、夕方になると新グラウンドから東山動物園のライオンの吼える声が聞こえたといいます。

本誌前々号でも紹介されたように、このたび山の上の陸上競技場のフィールドに、最新の人工芝が導入されました。雨天時の使用やケガの軽減、人工芝が人体に及ぼす影響の研究など、さまざまな効用や成果が期待されています。





1	4
2	3

1　現在の豊田講堂方面から見た、1942年当時の東山キャンパス運動場
2　1943年の開学式に配布された、名帝大の建設構想を絵画化した絵はがき。右下に陸上トラックが描かれている
3　山の上地区が整備された当時の東山キャンパスの航空写真（赤で囲った部分が旧グラウンド）
4　フィールドを人工芝化した山の上陸上競技場

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

46 名古屋大学「職員用バッヂ」

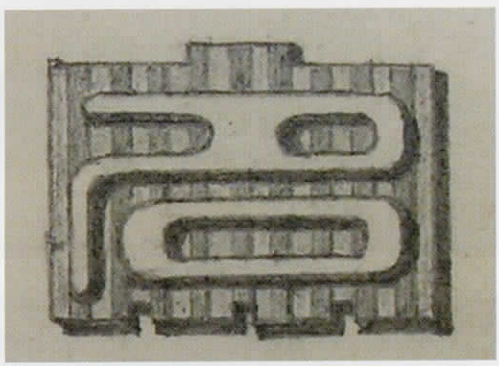
「本学職員と外来者とを容易に識別し併せて之を佩用(はいよう)することによって本学職員たるの気品を保つに役立たせるため一定のバッヂを制定して之を全学職員に佩用させる」――これは1948（昭和23）年３月に作成された簿冊『職員用バッヂ関係書類綴』に収められている「名古屋大学職員用バッヂ図案募集要綱」の目的規定文です。

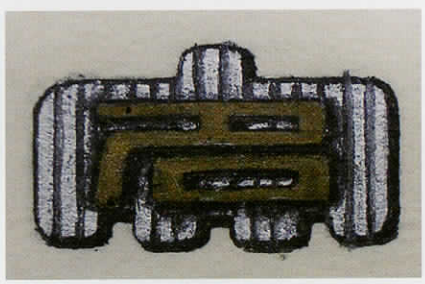
本連載第41回「NUマーク」（No.148）で1953年制定の学生向けの通称シャチバッジに触れましたが、本学ではそれより５年前に職員用バッジの制定が行われていました。この職員用バッジに関しては『名古屋大学五十年史』（部局史一）において、「警備上職員バッチを制定されたい」との職員組合の要望を受けて、通し番号入りの職員バッジが作成されたとの記述があります。

冒頭に紹介した募集要綱は、このバッジ制定にあたって本学在職者からの図案募集を行った際に作成されたものです。同年３月５日に締め切られた図案募集には約140件の応募があり、総長ほか各部局長等15名の審査員による投票が行われましたが、採用図案を決めるに至りませんでした。そこで、同年４月15日締め切りで再募集を行ったところ約30件の応募があり、審査の結果、医学部教員の応募図案がバッジのデザインとして採用されました（写真１）。

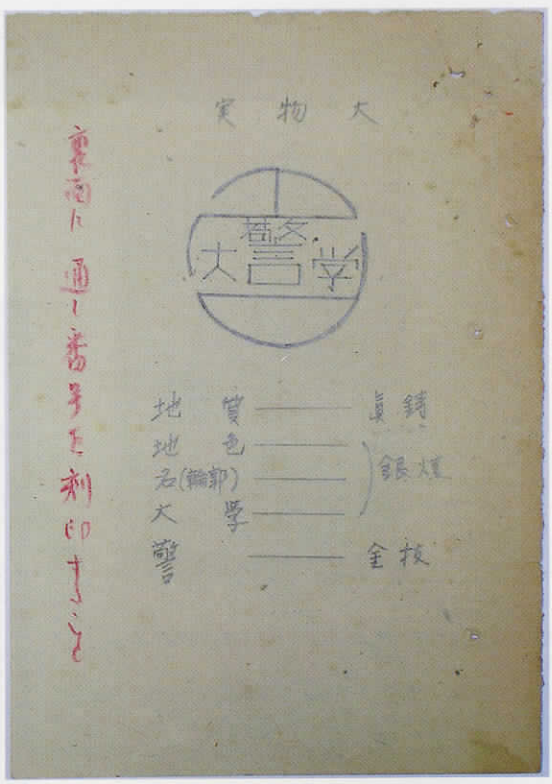
その後、職員用バッジは同年内に2000個が製作され、部局別の番号区分にしたがって全職員に貸与されています。残念ながら、大学文書資料室には当時の職員用バッジが保管されていませんが、おそらく最終的には写真２のようなデザインで製作されたものと思われます。また、職員用バッジの貸与に際しては1949年２月に「職員用バッヂ取扱要項」が定められて貸与台帳による管理が行われ、職員には通勤途上および公務執行中の着用、大学離職時の返還ならびに破損・紛失時の実費弁償などが義務づけられていました。本資料室に残されている資料によると、1951年からの４年間に少なくとも40個の紛失届が提出されています。

なお、本学では職員用バッジとは別に、1948年に写真３のようなデザインの警務員用徽章(きしょう)が制定されています。これは、当時、被服規程に基づく制服の貸与が困難であったため、代替措置として行われたものでした。





1
2
3



1　第２回募集で採用された図案（オリジナル、鉛筆書き）
2　オリジナル図案に修正を施したと思われるカラーデザイン
3　警務員用徽章の図案メモ（鉛筆書き）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

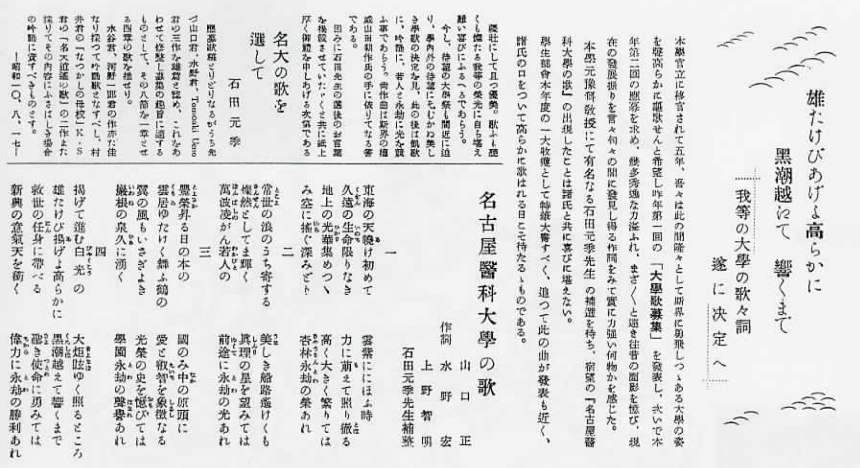
47　名古屋大学と歌

一昨年、東京大学では、新校章とともに「東京大学の歌」を定めることになり、歌詞を一般公募しましたが、名古屋大学では1939（昭和14）年に名古屋帝国大学として創立されて以来、校歌や大学の歌と正式に呼ばれるものを持ったことはありません。たとえば入学式では、1956年に学内公募で選定された「若き我等」が、歓迎の歌として混声合唱団によって歌われますが、「学生」歌であるため、大学院関係の式典では歌われていません。

しかし、名帝大創立以前の前身諸学校の多くには、それぞれ校歌が見られます。名大史において明らかになっている最も古い校歌は、1908（明治41）年に創立された旧制第八高等学校（旧教養部の前身）の校歌です。ついで、1920（大正９）年に愛知県立医学専門学校から昇格した県立愛知医科大学（医学部の前身）では、昇格祝賀歌の１つで、第３師団軍楽隊作曲・石田元季教授作詞のものが校歌として歌われました。また官立となった後の1935年には、山田耕筰作曲・公募作詞による「名古屋医科大学の歌」が選定されています。1920年創立の名古屋高等商業学校（経済学部の前身）でも、その翌年に校歌が作られました。

もっとも、学生の多くが寮生活を送っていた戦前にあっては、校歌よりも寮歌の方が学生だけでなく市民にも親しまれ、盛んに歌われました。たとえば八高では、いわゆる校歌よりも、代表的な寮歌「伊吹おろし」の方が圧倒的に有名であり、現在の名大でも体育会や学生寮などで歌い継がれています。

寮歌といえば、教育学部の前身にあたる岡崎高等師範学校には校歌がなく、寮歌が校歌であると位置づけられています。これは同校が1945年の敗戦の直前に創設され、さらにその直後に空襲で校舎が焼失するなど校歌を作る余裕がなく、名大へ包括されたのち1952年には廃止されてしまったからでもあったようです。


雄たけびあげよ高らかに
黒潮越えて　響くまで
我等の大學の歌々詞
遂に決定へ

本學官立に移管されて五年、吾々は此の間隆々として斯界に勇飛しつゝある大學の姿を聲高らかに謳歌せんと希望し昨年第一回の「大學歌募集」を發表し、次いで本年第二回の應募を求め、幾多秀逸な力溢ふれ、まざ〳〵と過き往昔の面影を偲び、現在の發展振りを言々句々の間に發見し得る作問をみて實に力強い何物かを感じた。

本學元豫科教授にて有名なる石田元季先生の補選を待ち、宿望の『名古屋醫科大學の歌』の出現したことは諸氏と共に喜びに堪えない。

學生部會本年度の一大收穫として特筆大書すべく、追つて此の曲が發表も近く、諸氏の口をついて高らかに歌はれる日こそ待たるゝものである。

傑壯にして且つ優美。歌ふも聴くも燦たる我等の榮光に自ら堪え難い喜びにふるへるであらう。

今し、待望の大學祭も間近に迫り、學内外の待望にそむかぬ美しき學歌の決定を見、此の後は凱歌に、吟詠に、若人と永劫に光を輝ふ事であらう。尚作曲は斯界の權威山田耕作氏の手に依りてなる筈である。

因みに石田先生の選後のお言葉を掲載させていたゞくと共に紙上厚く御禮を申しあげる次第である

名大の歌を選して　石田元季

應募歌稿とりどりなるがうち先ず山口君、水野君、Tomoaki Ueno君の三作を雄篇と認め、これをあわせて修整し募集の趣旨に適するものとして、その八節を一章とせる四章の歌を推せり。

水谷君、河野一郎君の作亦た佳なり採つて吟詠歌となすべし、村井君の「なつかしの母校」K・S君の「名大逍遙の歌」の二作また採りてその内容にふさはしき場合の吟詠に資すべきものとす。

—昭和一〇、八、一七—

名古屋醫科大學の歌

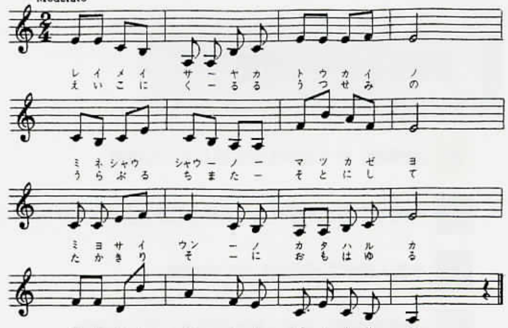
作詞　山口正　水野宏　上野智明　石田元季先生補整

一
東海の天曉け初めて　雲紫ににほふ時
久遠の生命限りなき　力に萠えて照り徹る
地上の光華集めつゝ　高く大きく繁りては
み空に揺ぐ深みどり　杏林永劫の榮あれ

二
常世の浪のうち寄する　美しき船路遥けくも
燦然としてま輝く　眞理の星を望みては
萬波凌がん若人の　前途に永劫の光あれ

三
豐榮昇る日の本の　國のみ中の原頭に
雲居ゆたけく舞ふ鶴の　愛と叡智を象徴なる
翼の風もいさぎよき　光榮の史を偲びては
巖根の泉久に湧く　學園永劫の聲譽あれ

四
掲げて進む白光の　大炬眩ゆく照るところ
雄たけび揚げよ高らかに　黒潮越えて響くまで
救世の任身に帶べる　聖き使命に勇みては
新興の意氣天を衝く　偉力に永劫の勝利あれ



1　「名古屋医科大学の歌」の歌詞決定を報じる『名大学友会報』創刊号。
これに、当時すでに世界的な作曲家であった山田耕筰が曲をつけた。
2　八高の寮歌集（1978年刊）。寮歌などが100曲以上収められている。
3　岡崎高等師範学校振風寮寮歌（『岡崎高等師範学校五十年誌』より）。
その哀調を帯びたメロディが寮生はじめ学生に愛唱された。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

48 揚輝荘衆善寮－戦前名古屋の留学生宿舎

今年１月、松坂屋創業家第15代伊藤次郎左衛門祐民氏の別荘である「揚輝荘」（名古屋市千種区）の主要施設が2007（平成19）年３月に名古屋市に寄贈されて一般公開されることが19日付け朝日新聞に報じられました。大正から昭和初期にかけて建設された揚輝荘は、覚王山日泰寺の東側に位置し、山荘風建築の「聴松閣」や和洋折衷建築の「伴華楼」などが有名です。

ところで、戦前この揚輝荘の敷地内には、主にアジアの外国人留学生が下宿していた衆善寮が設けられていました。戦前の名古屋には、アジアなどから多数の留学生が来日して、本学の前身諸学校である第八高等学校や愛知医科大学などで学んでいました。衆善寮の起源は、祐民氏が日本とタイとの友好事業の一環として名古屋日暹協会（のちの名古屋日泰協会）を設立して、1936年に３名のタイ人留学生を受け入れたことにあります。

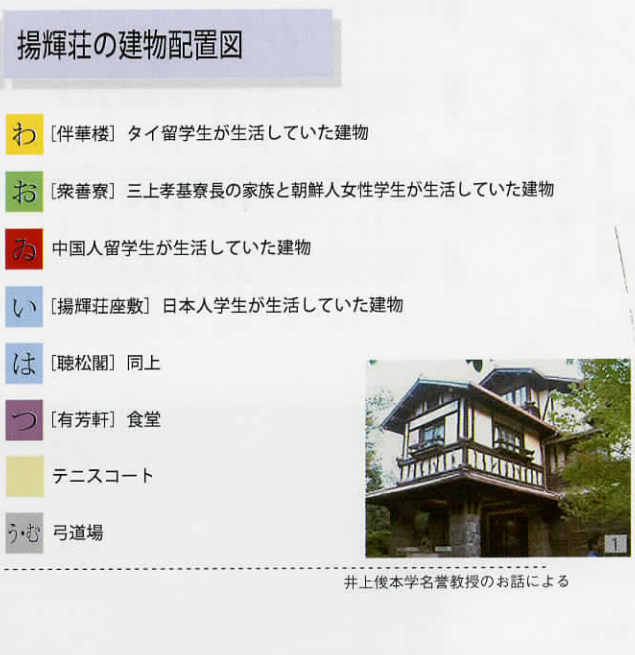
その後、衆善寮では、モンゴル・中国・朝鮮民主主義人民共和国からの留学生も受け入れるようになり、日本人学生も入寮するようになりました。上坂冬子著『揚輝荘、アジアに開いた窓』（1998年刊）には揚輝荘（衆善寮）における留学生の生活が描かれており、戦前期、日本とアジアとの関係が悪化する中にあっても、衆善寮内では宮城遙拝もなく、スプーン・フォークも用意されており、自由で友好的な雰囲気が保たれていたとされています。また、食堂やテニスコートなどの施設設備も整えられており、専属の料理人も雇用されていました。これは当時の寮長であった三上孝基氏の人柄や尽力によるものであったといわれています。

揚輝荘は、1945年３月の名古屋大空襲の際に大半を焼失し、衆善寮も自然に廃寮となりました。

なお、当時の揚輝荘内には全長約1.5キロメートルにおよぶ地下トンネルが設けられていたことが知られています。その建設時期や目的などは今日も明らかではありませんが、三上寮長の日記には、戦時下の1944年３月に極秘来日した汪兆銘の療養場所としてこの地下トンネルの利用を打診されたという記録が残されているとのことです（2006年12月29日付中日新聞）。

2

揚輝荘の建物配置図



1

揚輝荘（ようきそう）の建物配置図　CD-ROM 版「名古屋大学の軌跡―国際社会との知的交流―」より
1　聴松閣（ちょうしょうかく）「あいち地域資源デジタルアーカイブ」ウェブページより
2　伴華楼（ばんがろう）の全景　「あいち地域資源デジタルアーカイブ」ウェブページより

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

49 鏡ヶ池 —名大の70年とともに—

1939（昭和14）年に名古屋帝国大学として創立され、まもなく70年をむかえる名大ですが、残念ながら東山キャンパスには当時からの建築物は残っていません。ただ、創立以来名大とともにあり、その歴史を見守ってきたものとして、鏡ヶ池があります。キャンパスの北西端に位置する、面積約11,500㎡の大池です。

この鏡ヶ池は、もともとは農業灌漑用の溜め池でした。その後、大正末期から、この一帯の土地区画整理事業が始まりましたが、あえて埋め立てず、自然の風趣を保存するために残されたのです。

東山キャンパスの敷地は、名帝大の創立とほぼ同時に、地域の土地区画整理組合から鏡ヶ池とともに無償で寄付されました。渋沢元治初代総長は、「緑の学園」をテーマとするキャンパス構想をかかげ、植樹に力を入れましたが、鏡ヶ池の水景もその重要な一環でした。大学の外周に堀を設け、そこへ鏡ヶ池から滝を落とすとか、池の南側を風致地区にして、学生集会所を建てるなどの計画が立案されています。当時の鏡ヶ池は、現在の2倍くらいの面積があり、形も正方形に近い台形でした。現在の工学部1号館やベンチャービジネスラボラトリーなどの地区はかつて池だったのです。

ただ学部の東山への集結が始まり、平坦な敷地が少なくなると、風致ばかりを重視するわけにはいかなくなりました。1956（昭和31）年に、工学部拡張のため第1次の埋め立てがなされ、さらに1979年度にも埋め立てられて、現在のような細長い台形になったのでした。

しかし、今でも鏡ヶ池は、貴重な水景であると同時に、さまざまな水生生物や野鳥も観察でき、春には桜の名所となるなど、名大の憩いの場であり続けています。

1 1947（昭和22）年当時の米軍撮影による航空写真（国土地理院所蔵）。現在の北部厚生会館や工学部７号館のすぐ近くまで池であった。
2 1970（昭和45）年当時。第１次の埋め立て後だが、まだ現在より幅が広い。
3 1985（昭和60年）当時。第２次埋め立てにより、現在の形になった。
4 現在の鏡ヶ池付近図

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

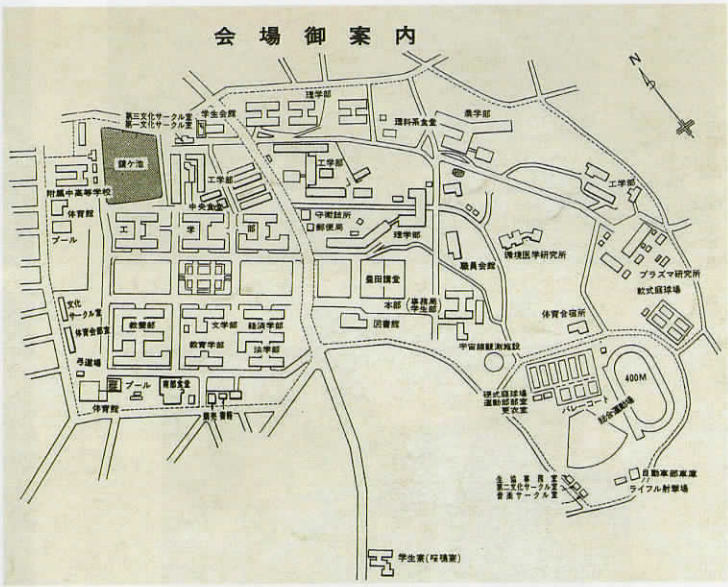
50 第11回名大祭 —1970年代の名大祭—

2006（平成18）年６月１～４日、今年も本学恒例の名大祭（第47回、テーマは夢源）が開催されました。本連載では、ちょうど１年前に第38回（No.145）で第１回名大祭を取り上げました。今回は、その10年後の第11回名大祭のようすを紹介します。

第１回名大祭は、いわゆる「たこ足大学」の解消（東山キャンパスへの集結）を背景に、「60年安保闘争」問題や伊勢湾台風被災者救援活動などを契機に盛り上がりをみせた「学生運動」の一つの結晶として始まりました。その後、「学生運動」の分裂と混乱の時期を経て、1960年代後半には本学でも鶴舞・東山の両キャンパスで「大学紛争」が起こりました。第11回名大祭は、こうした時代状況の中で、「名大祭活動を通じて･･･自らの学生像を追求してきた。･･･一人ひとりの学友が考え、悩み、怒り、不満に感じていること、喜びを感じていることを率直に話し合う中で、1970年代の初頭にふさわしい大学祭をつくりあげようとしてきた」（第11回名大祭アピール）ものであったとされています。

「変革にいどむ青春—新しい歴史厳粛に迎える我ら 真理への情熱を燃やし 統一と団結の鉄槌を鍛えん—」というテーマのもと、第11回名大祭は東山キャンパスを中心に５日間の日程で開催されました。“長いメインテーマと短いサブテーマ”の1960年代とは対照的に、“短いメインテーマと長いサブテーマ”が1970年代名大祭の特徴です。また、５日間の開催期間中、豊田講堂のホールではテーマ講演（全５題）や「情勢講演」「パネルディスカッション」「全学シンポジウム」「全学フェスティバル」などの全学的な規模の企画が日替わりで行われており、1980年代以降の名大祭とも一種異なった1960～70年代名大祭のスタイルを見て取ることができます。

なお、パンフレット裏表紙に印刷された会場案内図にはほぼ現在の建物配置に近いキャンパスが描かれており、東山地区集結後10年間に施設設備の整備・拡充が急速に進められたことがわかります。



1 第11回名大祭パンフレット
2 名大祭会場案内
3 第47回名大祭テーマキャラクター「種」
「メイダイサイドットコム」ウェブページより

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

51 日本学士院賞と名古屋大学

日本学士院は、1879（明治12）年に福沢諭吉を会長に創立されて以来の歴史を持ち、現在は学術上の功績顕著な科学者を優遇するための文科省特別機関として、さまざまな事業を行っています。そして同院が授与する日本学士院賞は、日本の学術賞としては最も権威ある賞です。

名古屋大学における歴代受賞者は、広報室が毎年発行している『名古屋大学プロフィール資料編』に一覧が掲載されています。名大史上の初受賞は、1926（大正15）年、当時愛知医科大学（医学部の前身）教授、のち名大第３代総長となる勝沼精蔵名誉教授です。以来、恩賜賞を含め、これまで22人が日本学士院賞（戦前は帝国学士院賞）を受賞しているとされてきました。その中には、ノーベル賞を受けた野依良治特別教授の名前もあります。

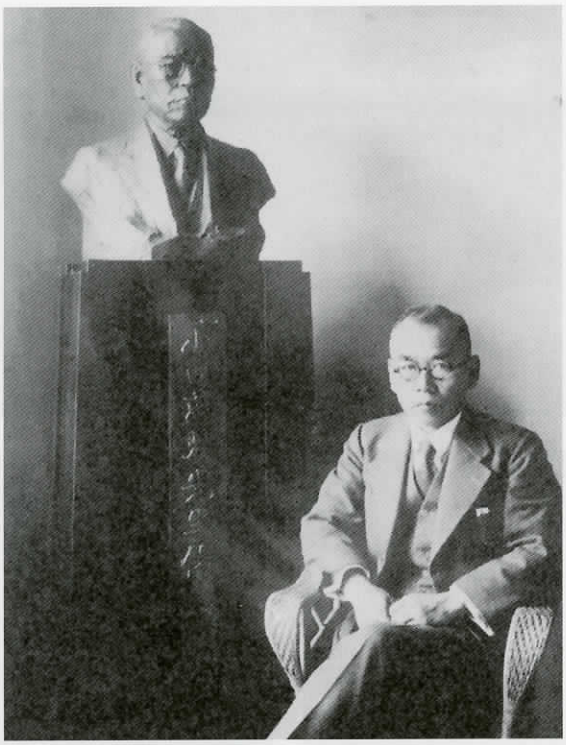
しかしこのたび、附属図書館医学部分館長の山内一信教授から、『プロフィール』の一覧は小口忠太名誉教授の名前が落ちているのではないかとの指摘がありました。

小口名誉教授は眼科を専門とし、1919年に愛知県立医学専門学校の講師となり、1926年には愛知医科大学学長に就任しています。1939（昭和14）年、名古屋帝国大学の教授となり、その直後に定年退官しました。小口病の発見で国際的にも著名な医学者です。

大学文書資料室で調査したところ、1933年に小口が受賞したのは、厳密には「帝国学士院賞」ではなく、帝国学士院が授与する「大阪毎日新聞東京日日新聞寄附東宮御成婚記念賞」であることが分かりました。東宮（皇太子）、のちの昭和天皇の結婚を記念して創設された賞です。

ただ当時の帝国学士院賞にしても三井家と岩崎家からの寄付によるものであり、さらに1944年には同記念賞と帝国学士院賞が合併しているのですから、これを学士院賞受賞者としてもさしつかえないと思います。

先月発行の本年度版『プロフィール』には、小口忠太の名前を載せました。受賞者は23人となったわけです。



1 小口忠太（1875－1945）とその胸像（『日本医学のパイオニア（１）』より）。胸像は退官記念に門下生が製作し、名古屋帝国大学に置かれたが、空襲によって破壊されてしまった。
2 勝沼精蔵（1886－1963）。1949年から59年まで10年にわたり総長を務め、1954年には文化勲章を受けた。
3 野依良治特別教授。1995年に日本学士院賞を受賞した後、2001年にノーベル化学賞を受けた。
4 『名古屋大学プロフィール資料編』（2004～2006年）。名大の基礎データを網羅しており、学外者への利便と同時に、学内者も重宝する一冊である。

1 | 2 | 3 | 4

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

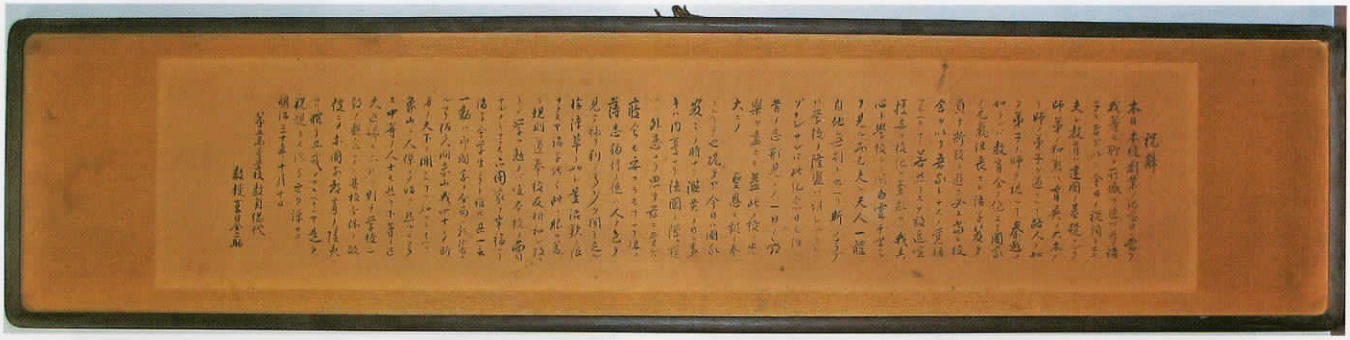
52 夏目漱石（金之助）「祝辞」横額 ―五高創立10周年記念祝辞―

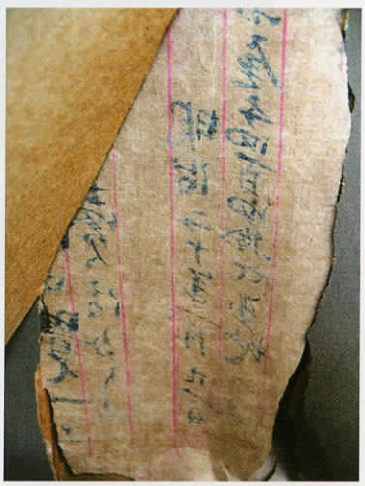
2006（平成18）年６月、大学文書資料室あてに一通の電子メールが届きました。差出人は本学名誉教授で、約20年前に本学職員クラブ内の一室にあった横額についての照会でした。その横額には旧制第五高等学校（五高）教員時代の夏目漱石（金之助）が述べた訓辞らしいものが書かれていたが、それは当時のままに現存するのかというものです。今回は、この情報をもとに行った調査で明らかになったことを紹介します。

現場確認の結果、職員クラブ内に漱石の横額はありませんでした。当時の様子を知っている職員から、かつて確かに横額はあったが、約10年前に職員クラブで小火があった際に焼失したようだとの推測情報を得ただけでした。そこで、職員クラブ建物を管理する部署にも尋ねましたが、その場では具体的な情報は得られませんでした。しかしその後、同部署から、キャンパス内の別の場所に保管されていた横額を発見したとの連絡がありました。縦36cm×横158cmの横額（写真１）には、1897（明治30）年10月10日に五高（熊本大学前身校）の創立10周年記念式で、漱石が教員総代として述べた祝辞が書かれていました。一見して、文字は肉筆ではなく印刷のようで、残念なことに横額裏面に数個の破損箇所がありました。

熊本大学の五高記念館に尋ねたところ、この漱石の「祝辞」原本（漱石の直筆ではなく代筆と思われる。写真２）は同館に保存されていること、約20年前に開催された五高100周年記念式典の際には同祝辞の複製品が作成・頒布されたことなどが判明しました。これによって、本学内にある漱石の横額は複製品であることが明らかになりました。

一方、横額裏面の破損部分から、額装部材に「明治二十年一月廿一日」と筆書きされた罫紙が利用されていることが判明しました（写真３、４）。これによって、約20年前に作成・頒布された複製品の横額部材に上述のような罫紙が利用されることは通常考えられないこともあって、その作成時期は不明のままです。また、何よりもこの横額がどのような経緯で本学に存在するのかについても明らかではありません。





1
2 | 3 | 4

1　本学シンポジオン内の倉庫に保管されていた横額
2　五高記念館に保存されている「祝辞」原本（熊本大学五高記念館ウェブページより）
3、4　横額裏面の破損部分からみえる罫紙

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

53 航空医学から宇宙医学へ

宇宙空間という未知の環境が宇宙飛行士の身体に及ぼす影響の解明は、スペースシャトルや宇宙ステーションなどの有人宇宙開発における最も重要な研究課題の一つです。こうした宇宙医学の基礎となったものに、高高度における高速飛行という、かつては未知であった環境における人体を研究する航空医学があります。

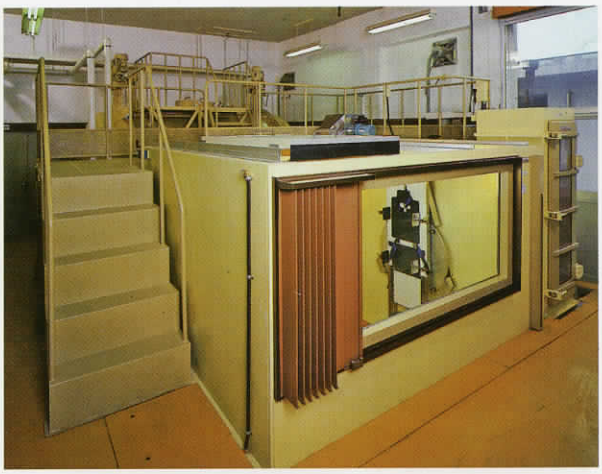
名大における航空医学研究の歴史は古く、名古屋帝国大学として創立された翌年の1940（昭和15）年には、医学部に航空医学二講座が開設され、1943年にはこれらが航空医学研究所（大学附置）として独立しました。時は太平洋戦争下、日本の財政は破綻寸前でしたが、航空戦力の増強が急務とされた当時、航空医学は軍部にとっても必要不可欠な学問だったのです。

敗戦後、日本の非軍事化を進めたGHQ／SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の指示により、航空医学研究所の廃止が決定されました。しかし渋沢元治総長は文部大臣や大蔵大臣と直接交渉し、縮小改組のうえ、環境医学研究所として存続させることにかろうじて成功したのです。

その後、1960年に航空医学部門が復活し、1970年代後半からは、宇宙医学の研究に積極的に取り組むようになり、1991（平成３）年には附属施設として、宇宙医学実験センター（～2005年度）が設置されました。

1992年、環境医学研究所は、日本人初の宇宙飛行士、毛利衛さんが搭乗したスペースシャトル・エンデバー号を利用して、NASA（アメリカ航空宇宙局）などとの共同で鯉を用いた宇宙酔いの実験などを行いました。また、1994年に向井千秋さんが乗ったコロンビア号における、有名な金魚による実験も同研究所が参画したものです。

９月30日に「宇宙から地球へ」をテーマに開催される第２回ホームカミングデイでは、毛利さんや向井さんからのビデオメッセージ上映、毛利さんが環境医学研究所で実際に使った無重量実験装置の展示などを行います。



1 | 3
2

1　45年ほど前の環境医学研究所。現在の理学部Ｅ館と環境総合館の間あたりにあった。1966（昭和41）年に現在の場所（野依記念学術交流館裏）へ移転した。

2　創設当時の航空医学研究所（看板）。当初は名古屋市東区西二葉町（現在は東区白壁、県立明和高校のキャンパス）にあったが、まもなく東山キャンパスに移転した。

3　準無重量実験装置。当時は日本で唯一の実験装置として知られ、毛利飛行士も本学を訪れた。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

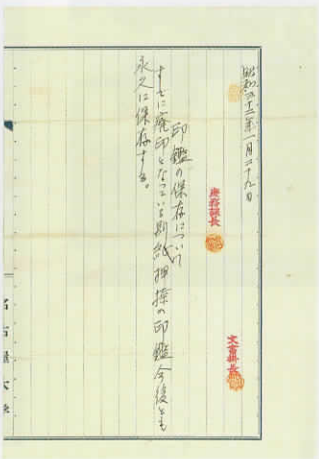
54 「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」等の学印

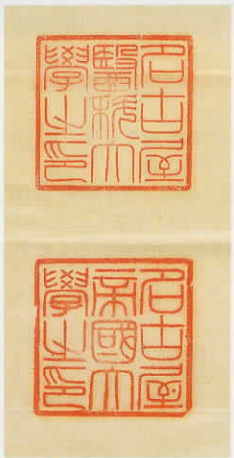
2006(平成18)年２月、総務広報課（現在の総務課）内で、すでに廃印となった公印等28本が箱に収められて書棚奥に保管されていたことが確認されました（写真１）。

これら28本の印鑑とともに保管されていた1957(昭和32)年１月29日付の原議書「印鑑の保存について」によると、それら28本のうち９本の印鑑については「廃印となっている別紙押捺の印鑑今後とも永久に保存する」こととされています（写真２）。「名古屋医科大学」「名古屋帝国大学」（２種）「名古屋帝国大学総長」「名古屋帝国大学事務局長」「名古屋帝国大学庶務課長」「名古屋帝国大学庶務課」「名古屋大学教員適格審査委員会委員長」「普通試験委員長」の印鑑がそれです（写真３、４）。

ここでは、「名古屋医科大学」（名医大）と「名古屋帝国大学」(名帝大）の学印について紹介します。名医大（1931－1939）および名帝大（1939－1947）は、いずれも名古屋大学の前身校です。写真５には二つの石印が写っていますが、左下にあるのが名医大の印面で、右上にあるのが名帝大の印面です（印影は写真３、ともに印面外寸は60mm平方）。この写真ではわかりにくいですが、名帝大のものは印材に亀裂が入っているため凧糸が巻かれており、その他の部分にも少なからぬ損傷があります。一方、名医大のものは印材の厚みが1.5cm程度しかなく、印面裏側には鋸で切断されたような痕跡がみられます。おそらく名帝大の学印は、前身校である名医大の学印を切り落とした印材を再利用したものと考えられます。

さて、今回確認された公印等には、上述の永久保存印鑑（９本）のほかに「名古屋大学」の石印も含まれていました（写真６）。この学印が収められていた封筒には、同学印が1947年10月１日から1959年３月24日まで使用されていたとのメモ書きがあります。学内に残された記録によると、この学印は当時の卒業証書や学位記等に使用されていましたが、摩滅が著しいため改刻することが1958年12月に決裁されています。その後、新たに彫刻された学印(印材は柘植、印面外寸60mm平方）は、翌年３月18日に制定され、同月25日から旧印に替えて使用されるようになりました。





1		2	5
3	4		6

1　総務課に保管されていた学印等
2　原議書「印鑑の保存について」(1957年１月29日付）
3、4　同上別紙に押捺された印影（全９個）
5　「名古屋帝国大学」および「名古屋医科大学」印面
6　「名古屋大学」印面

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

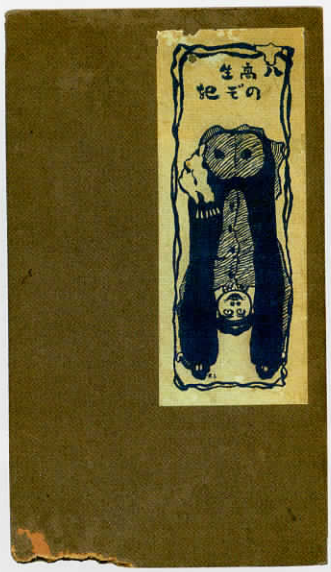
55 『八高生のぞ記』—旧制高校生たちの学園生活—

旧制高等学校のナンバースクールは、戦前における超エリートの養成学校です。卒業生のほとんどが帝国大学に進学し、各界の指導者として活躍しました。名古屋にあったのが、1908(明治41)年、現在の名古屋市立大学瑞穂キャンパスに創設された第八高等学校（八高）です。戦後は名大教養部となりましたが、戦前も３年間の教養教育機関であり、名大教養教育のルーツといえます。

その八高生の学園生活を、風刺をきかせながら描いた漫画集が『八高生のぞ記』です。1928(昭和３)年の創立20周年記念祭で売り出されたもので、経本のようなじゃばら式にとじた画帖の形式になっています。はがき大の漫画は全部で24点あり、入学から卒業まで、学寮を中心に当時の学校生活のエッセンスがつめこまれ、活気に満ちた生活がいきいきと描き出されています。また、キャプションとして、ユニークな短文の寸評もついています。昭和初期の時代における、旧制高校の学生文化史･生活史の貴重な史料です。

これは『八高五十年誌』（1958年）に再録され、現在では八高会（第八高等学校同窓会）の機関紙『伊吹おろし』に連載の紹介コーナーがありますが、八高卒業生以外にはあまり知られていません。『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第18号（昨年３月発行）には、加藤鉦治室長（当時）による詳細な紹介文が掲載されています。

最近になって、卒業生の遺品の中から、「八高生のぞき」が発見されました。題名は似ていますが、こちらは14枚の絵はがきであり、内容も講義や部活動など幅広いことが特徴です。こちらも作者や制作経緯などが分からず、謎の多い史料でもあります。



1	3	4
2		

1『八高生のぞ記』の表紙
2「4．コンパ　胃袋の現化が無けなしの財布の塵迄はたいて菓子を買ひ、Y談X談隠芸等々に頑張るところは仲々の見物である…」
3「6．寮雨　時間と労力の経済のために、我輩等最も卓越せる人格者は寮雨と称する至極便利な方法で、身を軽くし…」
4「13．試験の前夜　さア、普段すつかり怠けてゐるので、試験の前にはステンに頑張る。見る間に頭が膨張して、流石は秀才だ…」

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

56 豊田講堂地階倉庫

本学のシンボルの一つでもある豊田講堂については、本連載で何度か取り上げました。今回は、少し角度をかえて豊田講堂の地階倉庫について取り上げます。

一般の人々にはあまり知られていませんが、豊田講堂のロビーやピロティの下（地階）には、総面積約500㎡の倉庫エリアがあります（写真１、2）。本連載36号で紹介した「田村模型」は、2005(平成17)年２月にこの地階倉庫内で発見されたものです（写真3)。

ところで、1960年に竣工した豊田講堂は、2006年12月から約１年の工期予定で、大規模な改修工事を受けることになっています。これに先立って、今年の夏から秋にかけて豊田講堂内の備品等の整理・搬出作業が断続的に行われました。その際、大学文書資料室では、「田村模型」の事例もあるため、特に地階倉庫内で人目につかず長年保存されている大学史関連の資料が存在するのではないかと半ば期待を寄せていました。

事務局職員の手で進められた整理作業では多くの備品類とともに古い事務文書や印刷物在庫などの存在が確認され、それらのうち記録史料としての価値が認められるものについては大学文書資料室で保管することになりました。

写真４の豊田講堂の油彩画は、この整理作業で存在が確認されたものです。この油彩画は、木製の額に入れられていますが、作者ならびに制作時期は不明です。豊田講堂の手前（西）側に描かれているバス停周辺の景色から判断して、竣工数年後の様子を描いたものだと思われます。

竣工後46年を経た豊田講堂は、時の流れとともにその地階倉庫部分がタイムカプセルのような役割を果たしたともいえるのではないでしょうか。今回の改修後、現在の地階倉庫部分のうち約2/3の部分が控室として整備される予定ですが、残る倉庫部分にまた新たなタイムカプセルが生まれることがあるのかもしれません。

1 | 2
3 | 4

1、2　豊田講堂の地階倉庫入口および倉庫内の通路
3　発見された当時の「田村模型」
4　豊田講堂画（油彩、F15号）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

57 後藤新平の自筆書掛け軸—後藤と愛知医学校教師柴田邵平(しょうへい)—

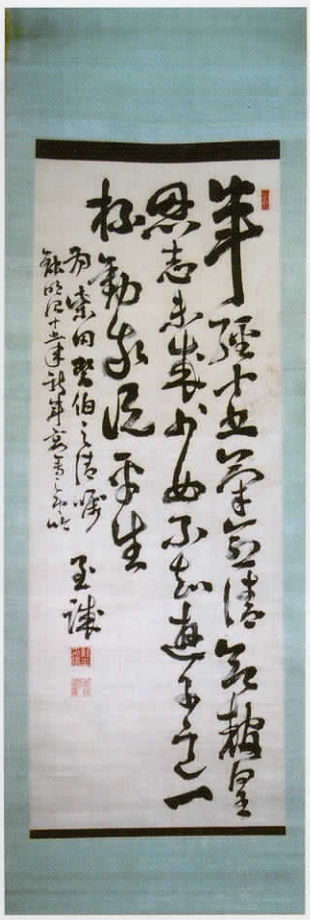
後藤新平（1857－1929）は、衛生・植民地・都市行政などに大きな足跡を残すとともに、内務大臣や外務大臣などを歴任した、近代日本を代表する官僚･政治家の１人です。

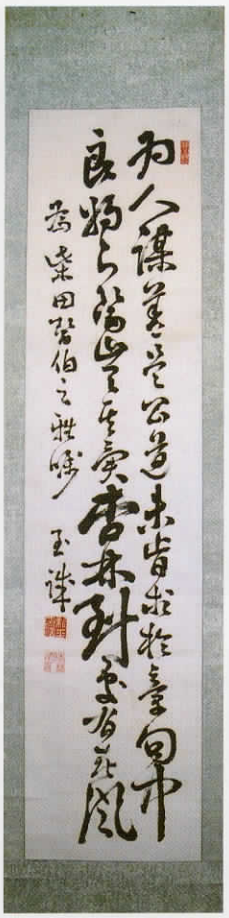
戊辰戦争で明治政府に敵対した水沢藩に生まれて苦学した後藤が、1876（明治９）年に初めて就職したのが、名大医学部の源流にあたる愛知県公立病院（のち愛知病院）でした。そして1881年には、24歳の若さで、愛知医学校長兼愛知病院長に就任しています。83年には名古屋を去った後藤ですが、愛知医学校の基礎を確立し、全国でも有数の医学校とすることに力を尽くしました。

今回紹介するのは、後藤の揮毫書をあしらった２つの掛け軸で、書は愛知医学校時代の後藤が一等助教諭柴田邵平に贈ったものです。いずれも、柴田の子孫の方々が所蔵されています。写真２の掛け軸の裏書に「逓信大臣後藤新平男ノ書」とあることから、後藤が逓信大臣の時期（1908年から1913年にかけて）に掛け軸にしたものと考えられます。

柴田邵平（1825－1898）は、日本や東海地方の西洋医学･医療の発展に大きな役割を果たした人物です。尾張国で育ち、京都や江戸で西洋医術を学んだあと、1873（明治６）年に名古屋仮病院の当直医となり、その翌年には医学校創立係に任命されて、愛知医学校の創立に深く関わりました。医学校創立後も教員として残り、若い後藤校長を支えました。写真１の書の奥書には、明治15年の「新年宴会」で、後藤が柴田のために即興で詠んだものを献じたとあり、２人の親密さがうかがえます。

所蔵者の１人である柴田義守氏からは、柴田邵平の蔵書や個人資料などからなる、1,000点近い資料が大学文書資料室に寄贈されました。現在、漸次公開を進めつつあります。





1 2 3 4

1　柴田光子氏（玄孫(やしゃご)、柴田整形外科院長）所蔵
読み下し文：年経ること十五　気愈々清し、只だ皇恩に報いんとするも志未だ成らず、少女知らず遊子の意、一杯我に勧め平生に沃(そそ)ぐ

2　柴田義守氏（曾孫、元愛知県厚生連海南病院副院長兼整形外科部長）所蔵
読み下し文:人の為に善を謀るは是れ公道、未だ肯(あえ)て章句の中に求めず、良将良医豈(あ)に其れ異ならんや、杏林到る処花風有り

3　愛知医学校長時代の後藤新平（後藤新平記念館所蔵、この頃からヒゲをたくわえはじめた）

4　両書に捺された後藤新平の落款（新平印信）

※漢詩の読み下しには、杉山理事の協力を得ました。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

58 医学部附属病院分院（東門前町時代）

本学の医学部附属病院分院については、本連載第12回(No.119)で「東新町時代」について触れました。今回は、「東新町時代」に続く「東門前町時代」について取り上げます。

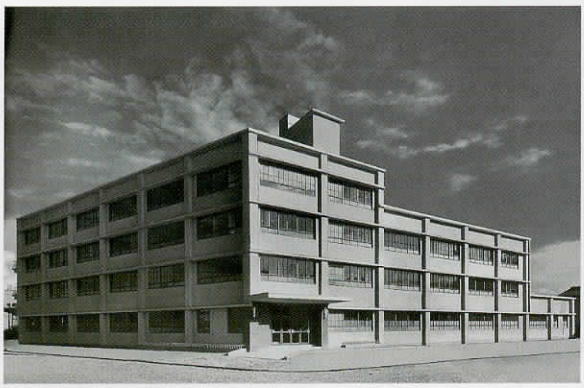
東門前町時代の分院(写真１)は、1961(昭和36)年５月に、市内中区新栄町三丁目（現在の中区栄四丁目）にあった旧分院（陸田ビル、写真２）から直線距離で約200m北側の土地に建設されました。『名古屋大学学報』（創刊号、1961年11月１日付）には、名古屋市都市計画の一部として市内東区東門前町二丁目（現在の東区東桜二丁目）に建築中であった新しい分院建物が同年５月に完成し、同年９月下旬から新建物での業務が開始されたとの記事が掲載されています。

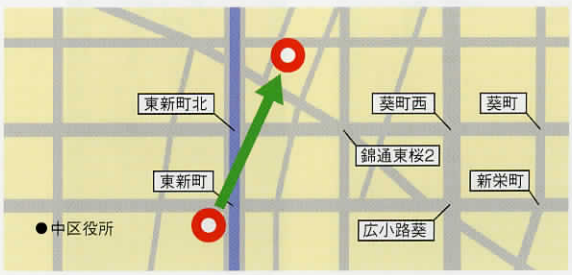
新しい分院は、鉄筋コンクリート地下一階・地上四階建て（延べ3,089㎡）の規模で、旧分院より700㎡ほど狭い施設でした。この点について当時の分院長は、新築移転に際して床面積が減少したことで「診療その他に色々と不便であることは申すまでもない」と述べています。

こうした不便を承知の上で分院移転を実施した背景には、当時の文部省内に分院の廃止を求める意見があったようです。しかし戦前期に陸田志よう氏からの個人寄附を受けた旧分院は、戦後も本学医学部の第二臨床病院としての役割を担うことで一般市民や警察・消防関係からも期待を寄せられていました。そこで本学としては、旧分院の近くで国費によらない移転を模索して名古屋市との折衝を重ねた結果、実現した分院移転だったのでした。

1961年11月14日、分院の移転披露式が分院中庭を会場に120名の出席者を得て開催されました。同披露式では、約18年間にわたって地域医療に貢献した旧分院建物を記念して、その寄附者である陸田氏に旧分院建物の石膏模型が贈呈されました（No.119参照）。これに対して、翌1962年10月には陸田直行氏から、新築移転を記念して新分院の敷地内に噴水の設置寄附がありました。写真３は、陸田氏からの噴水寄附を記念して、新分院の玄関前に掲げられていた銘板です。

この後、分院は1979年に東区大幸一丁目に移転し、1996年５月に本院に統合されるまでの「大幸町時代」を迎えます。





1 東門前町に開院当時の建物
（『名古屋大学医学部附属病院分院記念誌』1997年より）
2 東新町時代の分院（陸田ビル）外観（同上）
3 分院玄関前に掲げられていた銘板

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

59 農学部旧安城キャンパス記念碑

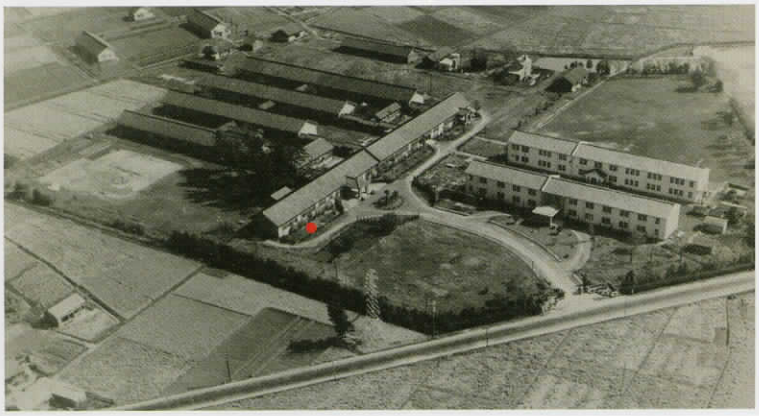
昨年、1951（昭和26）年から1966年まで名大農学部があった旧安城キャンパスの跡地、安城市総合運動公園（安城市新田町）に、「名古屋大学農学部創設発展跡地之碑」が建てられました。

一昨年６月、農学部第１回卒業生の卒業50周年祝賀会が開かれました。これをきっかけに、第１回卒業生から記念碑建立の提案がなされ、昨年３月、瓜谷郁三名誉教授を会長とし、安城時代の教職員、第１回卒業生、鈴木國夫農学部同窓会会長、松田大学院生命農学研究科長などを委員とする、名古屋大学農学部創設発展記念会発起人会が発足しました。

そして６月には、瓜谷会長から神谷学安城市長に対し、農学部跡地への記念碑建設の要望書が提出されました。「日本デンマーク」と呼ばれた安城市（当時安城町）は、農学部を熱心に誘致し、附属農場も安城町の提供によるものでした。また、1935（昭和10）年に設立された産業組合（現農協）立の安城更生病院には、医学部の前身の名古屋医科大学が全面的な支援を行うなど、名大と安城は戦前から浅からぬ関係がありました。今回も、安城市のご好意により、敷地が無償貸与されています。

建設費については、安城時代の関係者を中心に募られましたが、３ヵ月の間に目標額を上回る募金が集まり、昨年11月11日に、神谷安城市長、発起人会メンバーのほか、115名の臨席を得て除幕式が行われました。

現在、名大農学部時代の面影をしのばせるものといえば、当時テニスコートの隣にあった松林の一部のみで、記念碑もその近くに建てられました。すでにここには、農学部の前に同地にあった愛知青年師範学校（戦後愛知学芸大学安城分校）の記念碑があります。今回の建碑によって、農学部の基礎を築いた安城時代の記憶を残すとともに、この地の由緒の記憶も１つにつながったといえるでしょう。



1 2
3

1 今回建てられた記念碑（白御影石、95×170×95cm）。後ろに見えるのが愛知青年師範学校の記念碑。
2 除幕式の記念写真。安城市総合運動公園は、名鉄新安城駅もしくはJR安城駅から名鉄バスで10分（「総合運動公園」下車）。記念碑は、公園の西端、野球場の西側にある。
3 安城キャンパスの航空写真。写真中の赤丸の地点に記念碑が建てられた。その下方に現在ごく一部が残る松林が見える。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

60 名古屋帝国大学初代総長澁澤元治関係資料

澁澤元治（1876－1975）は、「日本の近代資本主義の父」といわれる澁澤栄一を叔父にもつ人物で、戦時下の多難な時代に創設された名帝大の初代総長（1939－1946）として、草創期本学の基礎づくりに尽力しました。

澁澤は、東京帝国大学工科大学（電気工学科）を卒業後、叔父栄一に随行して欧米を外遊し、帰国後は逓信省に勤務しました。この逓信省時代に工学博士学位を取得し、のちに東京帝国大学教授を兼任しながら逓信省電気局技術課長に任命されていた時期もありました。

澁澤の生涯等については自著『五十年の回顧』（1953）・『思い出の随想』（1974）のほか、手近なものとしては大学文書資料室発行の名大史ブックレット６（デジタルブック版・冊子版）などで知ることができます。

1955（昭和30）年、澁澤は電気事業行政および電気工学技術の研究教育における功績が評価されて、電気関係者として初めて文化功労賞を受賞しました。この受賞を契機に有志によって「澁澤元治博士文化功労賞受賞記念事業委員会」が設置され、翌56年に「澁澤賞」が創設されて今日に至っています。

澁澤元治の没後10年にあたる1985年、ご遺族が深谷市の澁澤生家敷地内に、日本語教育や国際親善などを目的とした外国人留学生のための「澁澤国際学園」が開校しました。そしてこの学園のなかに「澁澤元治記念館」が設置され、澁澤元治が生前使っていた机・椅子などの品々や蔵書・アルバム・書簡などが保存展示されていました。

その後、同記念館はご遺族が他界されたこともあって、2000年の春に閉館となりました。閉館後、残された資料の保存管理が問題となりましたが、多くの関係者の協力もあって2001年３月にその資料が名古屋大学に寄贈されることになり、現在は大学文書資料室がその管理を行っています。なお、大学文書資料室では、今年度からこの澁澤関係資料の一般公開を行っています。

2
1 | 3 | 4

1　名大史ブックレット６
（デジタルブック版はhttp://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/booklet/）
2　「澁澤元治記念館」看板（たて約50cm×よこ約180cm）
3　澁澤元治記念館内の展示のようす
4　大学文書資料室に移管された澁澤元治関係資料（一部）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

61 地域社会に支えられてきた名古屋大学

名古屋大学では、昨年６月、創立70周年事業として、「名古屋大学基金」を創設しました。長期的な大学基盤の整備のため、多くの企業・団体・個人の皆様にご協力をお願いしています。

歴史をひもときますと、名大が一貫して名古屋を中心とする地域によって支えられてきたことが分かります。そもそも明治初期、名大の源流にあたる愛知医学校が、浄土真宗からの寄附と新地方税の６万円によって設立されたものでした。６万円は、現在の約７億円にあたります（同年代の標準米価格で換算、以下同じ）。

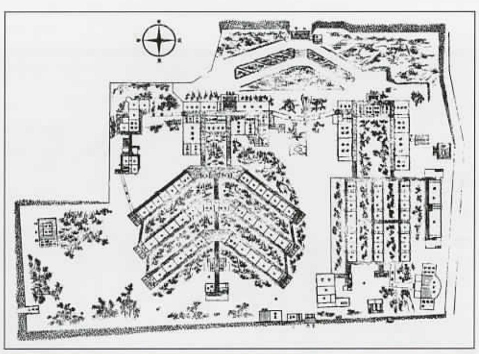
また、1920（大正９）年に県立愛知医科大学に昇格した時は、県会でその費用約70万円（現在の約10億円）の支出が可決されています。県の歳出総額がようやく1,000万円をこえた時代です。1931（昭和６）年に官（国）立に移管され名古屋医科大学となった際にも、県から国へ50万円（約14億円）が寄附されました。

そのほか、旧教養部の前身にあたる官立第八高等学校（1908年）は、愛知県による約30万円（現在の約10億円）の、また経済学部の前身にあたる官立名古屋高等商業学校（1920年）は、県と名古屋市からの約64万円（約９億円）の国への寄附によって誘致されました。

そして、1939年に名古屋帝国大学が創設された際には、愛知県がその創設費全額の900万円（現在の約128億円）を負担したのでした。これは、同年度の県歳出総額の約20％にあたるものです。広大な東山キャンパスの敷地も地元から無償で提供されました。

戦後の復興や学部新設も、名古屋帝国大学復興後援会が結成されるなど、地域の全面的な協力によるものでした。とりわけ農学部の創設には、県や諸団体から約１億円（当時の県歳出が約105億円）が寄附されています。

名大は日本の基幹大学の一つであり、世界水準の教育・研究を推進する知の拠点であるのはもちろんですが、こうした歴史をみる時、地域社会への貢献も忘れてはならないと思います。



東海文化の誇り

名帝大けふ誕生

澁澤博士 非常時總長ぶり

1	2
4	3

1　天王崎にあった1880年頃の公立医学校・公立病院（翌年愛知医学校・愛知病院となる）の校舎（右＝北側）・病棟（左＝南側）図。現在は名古屋市中区栄１丁目、トーエネックの社屋がある。1914年に鶴舞キャンパスへ移転した。

2　第八高等学校全景。1964年まで名古屋大学瑞穂キャンパス（教養部）として使われていた。現在は名古屋市立大学山の畑キャンパス（名古屋市瑞穂区瑞穂町）になっている。

3　1939年、名帝大医学部になる直前の名古屋医科大学全景（現在の鶴舞キャンパス）。

4　名古屋帝国大学の誕生を報ずる大阪朝日新聞（1939.4.1）。「東海地方多年の熱望こゝに成つてけふ一日花やかにも東海文化の最高峰われらが名古屋帝大は創設された」。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

ちょっと名大史 BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

62 第22回名大祭 —1980年代の名大祭—

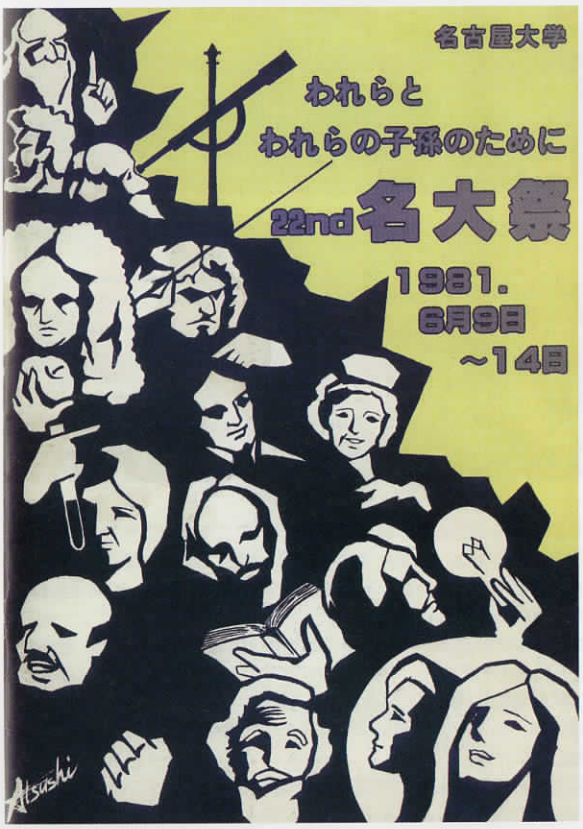
2007（平成19）年６月７～10日、今年も本学恒例の名大祭（第48回、テーマは「彩幻～サイゲン～」）が開催されました。今年は、豊田講堂が改修工事中のため、名大祭史上初めての豊田講堂をメインステージとしない名大祭となりました。

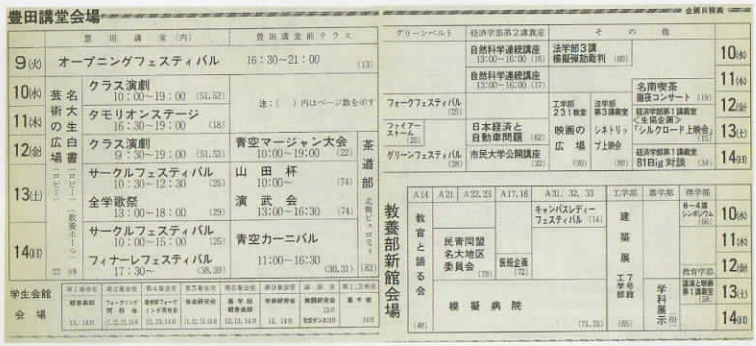
名大祭については一昨年（第１回名大祭）、昨年（第11回名大祭：1970年代）もこの時期に取り上げました。今年は、1980年代名大祭の特徴をよく示している第22回名大祭を取り上げます。

第22回名大祭のテーマは、日本国憲法前文からとった「われらとわれらの子孫のために」でした。本連載の第50回（No.157）で指摘したように、1960～1970年代の名大祭テーマはメインテーマとサブテーマで構成されていました。しかし、1980年代の名大祭では基本的にはメインテーマのみが決められるようになり、メインテーマ自体も短くなっていきました。また1980年代以降は、メインテーマに直結する「テーマ企画」が次第に姿を消していく傾向がみられました。

第22回名大祭パンフレットのテーマアピールをみると、当時の政治・社会情勢に対して、「憲法９条の解釈改憲にとどまらず『再検討して改憲を』と企み、…まさに、『恒久平和』の理想に大攻勢がかかっている」との認識をもち、「防衛論議や改憲論議がとかくすると一般人の頭上で交錯している今、憲法五原則（国民主権、恒久平和、議会制民主主義、人権の尊重、地方自治）を日常生活から判断することが大切である」と書かれています。そして、このテーマに連動する形で、実際の名大祭では学外講師による１時間のテーマ講演が「オープニングフェスティバル」の中で開催されています。

しかし、パンフレットの目次や「企画日程表」をみる限り、この「テーマ講演」の存在を確認することはできません。ここに、「テーマ企画」の存在感が薄くなる一方で「オムニバス企画」が目立つようになってきた時期である1980年代名大祭の特徴の一つを読み取ることができます。





1　第22回名大祭パンフレット
2　第22回名大祭「企画日程表」（一部）
3　第48回名大祭テーマキャラクター「サイタ」
（「メイダイサイドットコム」ウェブページより）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

63 瀧川文庫—瀧川幸辰（たきがわゆきとき）博士の蔵書—

名古屋大学附属図書館では、瀧川幸辰博士の膨大な蔵書「瀧川文庫」を所蔵し、研究利用に供しています。

瀧川幸辰博士（1891－1962）は、京都（帝国）大学法学部教授、戦後は同大学総長となった刑法学者です。1933（昭和８）年、政府は著書を発売禁止にしたうえ、瀧川自身も辞めさせようとしました。瀧川は大学の教官や学生、全国の支持者とともにこれに抵抗しますが、辞職をよぎなくされました。ファシズムによる思想弾圧の端緒として教科書にもとりあげられる、いわゆる瀧川事件です。

その瀧川の蔵書が、なぜ生前に特別な関係のなかった名大に所蔵されることになったのでしょうか。

瀧川と長男の瀧川春雄阪大教授（のち大阪高裁判事）は、これらを公共の図書館に一括して寄贈し、広く研究者の利用に供したいと強く希望していました。２人の死後、ご遺族はその遺志をはたすべく、受け入れ先をさがしはじめました。

当初ご遺族は、瀧川父子と親交のあった団藤重光博士（最高裁判事）を通じて最高裁判所に申し入れましたが、法律書だけならば可能との回答でした。しかし、それでは遺志に反することになります。そこで団藤博士は、直弟子の大塚仁名大法学部教授（現名誉教授）を紹介し、1983（昭和58）年に名大法学部へ一括寄贈のはこびとなったのでした。その後、2005（平成17）年度に中央図書館へ移管され、利用受付を法学図書室がおこなっています。

この文庫は、約１万冊の和書、約3,400冊の洋書、364の和洋雑誌などからなっています。とりわけ瀧川が戦前のドイツ留学時代に買い集めた洋書は、第２次世界大戦で多くの書物を失ったドイツにおいても入手が困難なきわめて貴重なものです。和書の多くは社会・人文科学書で、創立が遅く戦前の文献が多いとはいえない名大の蔵書をおぎなうとともに、瀧川の学識と教養の広さをうかがうことができます。また、手稿やスクラップ、遺品などの個人資料は法学図書室に保存されています。

瀧川文庫は、その学術的価値と同時に、瀧川幸辰博士を語る資料として、長く保存されていくべきものと思います。

抵抗の遺産
いま自由の学徒に
瀧川蔵書二万冊 そっくり名大に寄贈
弾圧事件のメモなど 未公開の資料も
団藤判事が遺族との縁を結ぶ

1 | 2 | 3

1　瀧川幸辰博士（瀧川文庫より）。京都帝国大学辞職後は、研究活動を続けると同時に弁護士として活動した。敗戦後、京大に復職。

2　瀧川文庫。法学部によって整理され、『瀧川文庫目録』（全３冊）が刊行された。現在、図書は中央図書館１階に配架されている。

3　瀧川の蔵書が名大へ寄贈されることを報じる『中日新聞』（1983年４月16日夕刊）。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

64 明治初年愛知県公立病院外科手術の図

「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」（額装サイズで縦99.3cm ×横123.8cm）は、本学附属図書館医学部分館内の医学部史料室に額装された状態で保管されています。この図は、愛知県出身の浮世絵画家である柴田芳洲（しばたほうしゅう）が描いたもので、正確な制作年は明らかではありませんが、1880年頃のものと考えられています。

図中の左上に書かれた「学士老烈先生嘱」との文字から、明治期の「お雇い教師」であるローレツ（アルブレヒト・フォン・ローレツ、オーストリア出身、1846-1884）の依頼に応じて描かれたものであることがわかります。この図では、当時天王崎町（現在の名古屋市中区栄一丁目）に新築された愛知県公立病院（1877-1881）内と推定される一室での外科手術の様子が描かれ、患者を含めた７名の人物が描かれています。これらの人物のなかには名古屋大学史のみならず、日本の近代医学史の観点からも枢要な人物３名―左端に描かれた和服姿で眼鏡をかけたローレツ、中央に描かれた洋服姿の片膝立ちで執刀している後藤新平、その右横で患者の右腕を支える和服姿の司馬凌海―が描かれているといわれています。

ただし実際には、この３名がここに描かれたような形で一堂に会することは不可能でしたから、この図は実際に行われた外科手術のようすを描写したものではありません。また、この図の制作を依頼したローレツは、当時30歳を超えたばかりの青年医師でしたが、「老烈」の表記にちなんで自身を老人風に描かせているともいわれています。

この図は、登場人物などに虚構性が認められる絵画ではありますが、そこに描かれた手術情景については「スキンネル・マスクを用いて施されたクロロフォルム麻酔下の手術記録、しかも視覚的記録としては、日本の近代外科史上、最古に属すると言われる」ものと評されています（第24回日本医学会総会「医学史展示」図録『尾張から見た日本と世界の医学史』1998年）。

1 | 2 | 3
1 「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」（本学附属図書館医学部分館内医学部史料室所蔵）
2 上記手術図に描かれているローレツ（拡大図）
3 ローレツの肖像写真（佐々木仁一『ホルン紀行』やまがた豆本第３冊、1971年所収）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

65 G・C・アレン—日英のかけはしとなった外国人教師—

現在、名古屋大学には20ヵ国80人の外国人専任教員が在籍しています。国立大学に講師以上の外国籍教員を任用できるようになったのは1982（昭和57）年からですが、それ以前から契約等により「外国人教師」を雇用することは認められており、名大の場合、その歴史は前身諸学校にまでさかのぼります。前回登場した、愛知県公立病院のローレツはその草分けです。

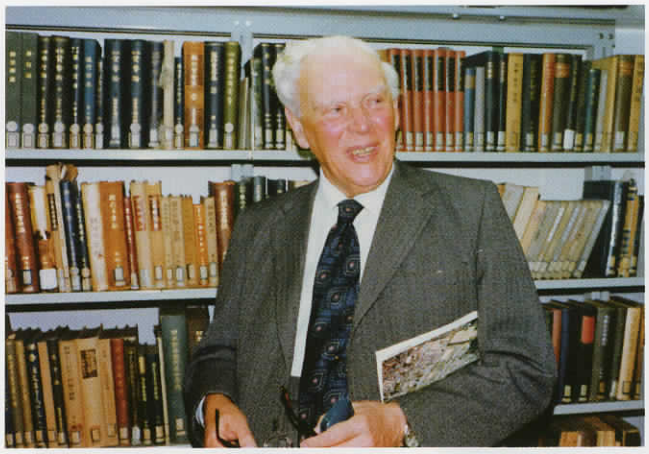
そのほか、名古屋高等商業学校（名高商）や第八高等学校にも、主に外国語を担当する外国人教師が多くいました。その１人が、名高商のイギリス人教師 G·C·アレン（George Cyril Allen、1900－1982）です。

アレンは、バーミンガム大学商学部を卒業し、大学院で修士号を得てすぐの1922（大正11）年、名高商に教師として赴任するため来日しました。商業学や商業史、英語を担当したアレンですが、学生に強い印象を残しながらも、わずか２年半で日本を去っています。しかし、アレンの日本との本当のかかわりは、ここからはじまったともいえます。

アレンは帰国後、リヴァプール大学教授などをへて、戦後はロンドン大学教授となりますが、主要研究テーマに英国ではほとんど研究されていなかった日本経済を選びました。その著書は17冊を数え、書名に「日本」を含むものが11冊もあり、３冊が邦訳されています。その多くが、日本の特性を理解し、その経済発展に寄与しようという好意的な視点から書かれたものです。また、第二次大戦終結直後にイギリス外務省経済産業企画室日本担当部長に就任した際には、極東委員会に日本への寛容な対応策を進言しつづけました。

こうした日本研究や日英友好に大きな功績を残したアレンに対し、日本政府から1961年に勲三等旭日中綬章が、また1980年には国際交流基金賞が贈られています。

アレンは1980年の受賞あいさつの中で、「私には二つの誕生日があります。一つはイギリスでの1900年に私が生まれた日、そしてもう一つは、日本での誕生日です。それは私が来日した大正11年のことです。」と述べています。



1 初めて来日した頃、22歳のアレン（『第参回卒業記念　名古屋高等商業学校』、1926年３月、大学文書資料室所蔵キタン会旧蔵資料）。
2 G・C・Allen 著『Appointment in Japan—Memories of Sixty Years—』（London, 1983）。ブックカバー裏表紙の『一英国人教師のみた日本　回顧六十年』は邦題だが、内容は英文。アレンから見た名高商や名古屋の様子が生き生きと描かれているだけではなく、外国人による日本論としても高く評価されている。
3 1979年春に来日し、名大経済学部などを訪れた際のアレン（当時はロンドン大学名誉教授）。経済学部の図書室で撮影されたものと推定される（「アレン教授来名写真集」、大学文書資料室所蔵キタン会旧蔵資料）。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

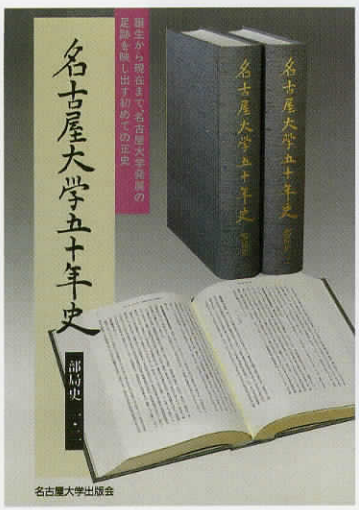
66 『名古屋大学五十年史』—部局史・通史・写真集—

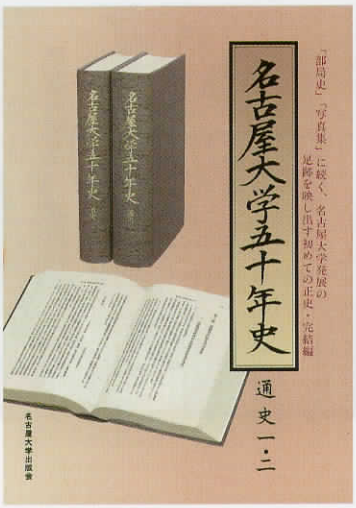
名古屋大学は、その淵源をたどれば1871（明治４）年の仮病院・仮医学校にまでさかのぼることができます。ただし、名大では1976年11月に開かれた評議会で、名古屋帝国大学官制施行日である1939年４月１日を名大の起点とすることが提案・承認されました。

その後1984年３月には、名大創立50周年記念事業の内容について予備的な検討を行うための委員会が設けられ、同年12月の評議会では、①名大史の編さんと刊行、②「学術交流基金」（仮称）の創設、③記念施設の建設、④記念行事の実施が承認されました。そして記念事業を実現するため、名古屋大学創立50周年記念事業委員会と名古屋大学史編集委員会の両委員会が設けられました。なお、この記念事業を後援するため、1987年９月には愛知県知事・名古屋市長・地元企業などからなる総勢1450名規模の名古屋大学創立50周年記念事業後援会（会長は名古屋商工会議所会頭）が発足し、募金活動などが展開されました。

1989（平成元）年11月９日、創立50周年記念式典が開催され、学内外から関係者1500名の出席を得ています。これに先立ち、同年10月末には「初めての正史」として『名古屋大学五十年史』（部局史１・２）が刊行されました。また、1991年12月に『写真集 名古屋大学の歴史 1871～1991』、1995年10月には『名古屋大学五十年史』（通史１・２）がそれぞれ刊行されています。

これらの名大50年史刊行物の編集作業は、左記に述べた編集委員会のもとに設置された名古屋大学史編集室が中心となって行われました。この編集室は予定された編さん事業を終えた1996年３月末に廃止され、翌４月には「名古屋大学史に係わる資料の恒常的な収集、整理、保存及び活用並びに調査及び研究」を行う名古屋大学史資料室が設置されています。その後、同室は2001年４月に大学史資料室へと改称され、さらに2004年４月には名大の国立大学法人化に際して現在の大学文書資料室に改組され今日に至っています。





1 2 3 4
5

1 部局史編案内リーフレット
2 通史編案内リーフレット
3 写真集案内リーフレット
4 編集室表札（1985-1996）
5 大学史資料室表札（2001-2004）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

67 伊勢湾台風と名古屋大学

今年もいくつかの台風が日本列島を通過して大きな被害をもたらしましたが、戦後の東海地方が甚大な被害をこうむった台風といえば、やはり1959（昭和34）年９月の伊勢湾台風がまっさきに挙げられるでしょう。

上陸時の中心気圧が929.5hPaというこの超大型台風により、愛知県では約3,300人の死者・行方不明者、約５万6,000人の負傷者を出し、被害総額は3,224億円にのぼりました。もちろん名大も例外ではありませんでした。死者は１名にとどまりましたが、教職員は家屋の半壊以上59名、床下浸水88名をはじめとする大きな被害をうけました。また、７割の学生が何らかの被災に遭っています。

被害も、当時は老朽化した木造建築物が多かったことから、極めて大きなものとなりました。台風の翌年に作成された調書によれば、被害見積もり額は約1,600万円、復旧見込み額は約4,900万円とされています。小学校教員の初任給が１万円に満たなかった時代です。

その一方で、被災者の救援活動に名大関係者が多く携わりました。学生大会は救援活動への積極的参加を議決し、教養部学生災害対策本部が結成されました。これにより、のべ3,000人の学生が、泥海が残る過酷な状況で救援活動に従事し、社会の大きな共感をよびました。

医療活動においては、医学部や附属病院の関係者が大きな役割をはたしました。附属病院では、７名からなる風水害罹災者救護班が７つ編成され、行政の要請に応じて出動しました。医学部学生も、授業に替わる実習として救護班に参加したほか、独自に医療班を結成して被災各地をまわりました。

愛知県議会は、名大の教職員や学生による救援活動に対し、感謝決議をおこなっています。しかし、以上のような被災と活動のため、授業や試験が半月以上も中断し、教養部の文化祭は中止をよぎなくされました。

1	2	3
4		

1 屋根が吹き飛ばされた教養部（瑞穂キャンパス）の体育館。屋根を失った建物は限られているが、ほとんどの瓦が飛ばされてしまった建物は少なくない。
2 文字通りの「泥海」の中を行き交う人々。救援物資を運ぶ学生の姿が見える。
3 名古屋近辺の大学生が結成した「被災学生を守る会」による記録雑誌『伊勢湾台風』（1960年４月）。当時としては異例の１万部を発行した。
4 台風直後の農学部校舎（安城キャンパス）。仮設建物が多いこともあり、ほとんどの校舎が大きなダメージをうけた。実験器具や装置は、遠くまで吹き飛ばされたものもあり、修理をせずに使えるものはほとんどなかったという。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

68 自校史教育 —名大の歴史をたどる—

2007(平成19)年度現在、名古屋大学では全学教育科目(全学教養科目)として、新入学生を主な対象とした前期授業「名大の歴史をたどる」を開講しています。学生に対して自らの大学の歴史を講義するタイプの授業は「自校史教育」と呼ばれ、国内では10年ほど前から一部の私立大学で試行的な取り組みがなされていました。私立大学では多くの場合、いわゆる「建学の精神」に基づくアイデンティティの追究が不断に求められる過程で自校史が常に意識される傾向が強いことから、こうしたタイプの授業が行われるようになったと思われます。

本学における自校史教育は、1999年度に大学史資料室(大学文書資料室の前身)によって始められました。当時は2年生を対象とした「日本の大学—近代日本と名古屋大学—」という講義名で開講されており、初年度の受講生はわずか12名でした。その後、この講義名は2003年度に「名大の歴史をたどる」と改められ、2004年度からは平野総長による「総長講義」(1コマ分)が組み込まれ、さらに2006年度からは200名以上の受講が認められる大人数講義に位置づけられて今日に至っています。

本学の自校史教育の特色は、総長講義実施のほかに、半期の講義を総説編と各説編に分けて、前者で通史的な授業を行った上で後者では特定のテーマごとに名大史を取り上げるというスタイルをとっている点にあります。さらに、この各説編の教材として使用される「名大史ブックレット」シリーズ(既刊12巻)は、受講生のみならず学外者からも好評を得ており、大学文書資料室ホームページ上で電子ブック版が公開されています。

また、今年度で4回目になった総長講義については、初回分からの授業記録が公表されており、特に2005年度分以降のものはDVDに録画されて本学附属図書館の視聴覚資料に登録されています。

なお、本学では1998～2000年度ならびに2007年度には、自校史教育のダイジェスト版である自校史講義が新規採用職員研修のプログラムに組み込まれています。

1 2
3 4

1 開講初年度(1999年度)の授業風景
2 2007年度の授業風景(平野総長による講義)
3 自校史教育の教材(名大史ブックレット)
4 総長講義の記録
(2004年度は記録冊子、2005年度以降はDVD)

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

69 名大トピックス—15年のあゆみ—

本誌『名大トピックス』は、1993(平成５)年２月に創刊され、来月で15周年をむかえます。当時、すでに『名古屋大学学報』がありましたが、こちらは学内規則、人事異動などの記事が中心で官報的性格が強く、年４回の発行でした。大学をめぐる新しい潮流や動向を適確に伝達し、本学の構成員と意思疎通を図ることを目的とし、本学での主要な出来事や話題などのニュース性を重視した記事を中心に提供する広報誌として本誌は創刊されました。

本誌は今月号で176号を数えますが、特集号・特別号として号外も出しています。科研費特集号が最も多く、そのほかには21世紀COE特集号、定年退官教授の特集号、新年特別号が見られますが、2001(平成13)年10月には、野依良治特別教授（当時大学院理学研究科教授）のノーベル化学賞受賞を報じる特別号が刊行されました。また、号外ではありませんが、2000年３月には、名古屋大学学術憲章の制定を別冊で報じる号も見られます。

皆さんの記憶にも新しいところですが、本誌は2005(平成17)年４月（第143号）から誌面のスタイルを一新しました。それまでは表紙と裏表紙以外はモノクロでしたが、全ページカラーとなりました。また表紙も、従来は記事の写真と目次で構成されていましたが、目次を表紙裏に移し、年度ごとに統一したテーマの写真（2005年度は豊田講堂の四季、2006年度は学内の建築物、2007年度はサークル活動）を全面に掲載しています。

バックナンバーは、2001年度以降のものを名大ホームページから閲覧することができます。それ以前の号は大学文書資料室に保存されており、どなたでも閲覧が可能です。

1	2	3
4	5	

1 創刊号(1993年２月)。当初はB5版で、第20号(1995年１月）から現在のA4版となった。
2 学術憲章制定を特集した第78号別冊(2000年３月)。
3 野依教授のノーベル化学賞受賞を報じる特別号(2001年10月)。
4 旧スタイル最後の第142号（2005年３月)。
5 新スタイル最初の第143号（2005年４月)。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

70　名大史ブックレット　―テーマ別の名大史―

大学文書資料室は、2000(平成12)年から『名大史ブックレット』シリーズ（以下、ブックレット）を編集発行しています。ブックレットは、A5判サイズの各巻カラー表紙で、本文・図版をあわせて60ページ前後の仕上がりとなっています。

このブックレット刊行のきっかけは、本連載第68回（No.175）で紹介した自校史教育にあります。2000年度当時、本資料室は大学史（自校史）教育のカリキュラム開発に取り組んでおり、その一環として自校史教育の教材についても検討を行っていました。その結果、新入学生および初任職員を中心とした本学構成員はもとより、本学の歴史に関心を寄せる一般市民にも気軽に読んでもらえるよう、テーマ別構成による「読み物」的な名大史の入門書を作成する方針が採用されたのでした。

この教材開発の企画は、2000年度の教育研究改革・改善プロジェクト経費（総長裁量経費）が認められ、同年度末までに３冊のブックレットが編集発行されました。自校史教育の教材開発という観点から試行的に編集発行されたブックレットは、幸いなことに学内外の方々から好評を得ることができ、2001年６月、中日新聞朝刊に取り上げられています（写真１）。

その後、ブックレットは毎年１～２冊のペースで刊行され、2008年１月現在で既刊全12巻となっています。各巻のテーマや表紙は下のとおりです（写真２）。

なお、2005年８月にはインターネット上からも閲覧・印刷などができるように電子版ブックレットの公開サービスを開始しました。この電子版ブックレットは、大学文書資料室のホームページ（http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/booklet/）から利用することができます。

名大の歴史
テーマ別に

全国初の試み

ブックレットを刊行

名古屋市千種区、名古屋大の大学史資料室（室長・加藤征治教育学部教授）は、同大の歴史をテーマ別にまとめた「名大史ブックレット」の刊行を始めた。全国でも初の試みで、単に同大だけではなく、日本の大学がどう動いてきたかを知る貴重な資料になりそうだ。

同資料室は『名古屋大学五十年史』の「部局史編」を一九八九（平成元）年に、「通史編」を九五年に出版した。いずれも大部の本で一般向けではないため、学生や市民が気軽に手に取れる本を出そうとブックレットを企画した。通史のダイジェスト版を出す大学は あったが、テーマ別で全冊新に書き下ろすというのは例がないという。

ブックレットはA5判。昨年十二月から、「これまでの大学院・これからの大学院」「名大キャンパスの歴史1（学部編）」「名古屋大学スポーツの歩み」の三冊を出版した。今後、毎年二、三冊、全部で十五冊前後を刊行する予定。「外国人教師」「名大祭」などがテーマに絡んでいる。ブックレットは無料で希望者に配っている。問い合わせは同資料室＝電052（789）2046＝へ。

1　『中日新聞』2001年６月15日付21面（同社提供）

2　名大史ブックレット　各巻表紙

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

71　槇文彦氏と豊田講堂　—50年の時をこえて—

2008年２月２日(土)、豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが大盛況のうちにおこなわれ、その主賓の中に、50年前に豊田講堂を設計し、今回の改修の設計も担当した槇　文彦氏（1928年～）の姿がありました。

槇氏は、1952(昭和27)年に東京大学工学部を卒業後、アメリカへ留学してハーバード大学大学院などで学び、ワシントン大学助教授となりました。そして58年、グラハム財団の会員として２年間にわたる建築視察のための世界旅行に出発しますが、豊田講堂を建設することになった竹中工務店の竹中藤右衛門社長が槇氏にその設計を依頼したのでした。竹中社長は槇氏の母方の祖父にあたります。

槇氏が世界旅行中に設計した豊田講堂は、そのデビュー作であると同時に、62年の日本建築学会賞を受賞するなど、日本を代表する建築家槇　文彦の出世作ともなりました。今回の改修において、内部施設の充実や耐震補強がなされた一方で、その外観の意匠は維持・復元されたのも、豊田講堂が日本の代表的な近代建築の一つとして広く認知されているからにほかなりません。

その特徴は、同じ時期に槇氏の設計により建てられたワシントン大学スタインバーグホール、千葉大学医学部記念講堂と共通する左右非対称の空間構成、日本の建築界の殻を打ち破り、当時の世界の潮流を積極的に取り入れたコンクリート打放し工法、東山キャンパスの地形を十分に生かした造園、など数多くありますが、80m × 36m の大きな屋根を細い柱で支え、広い架構を確保した構造がとりわけ印象的です。

かねてより槇氏は、豊田講堂を門としての建物と位置づけており、今回の改修竣工式での挨拶でも、正面から見た豊田講堂を門の略字「門」になぞらえたとの話を聴くことができました。豊田講堂は、明確な正門を持たない名大の象徴化された門であるともいえるわけです。

1　豊田講堂竣工式（1960年５月９日）に列席する槇氏（右端）。当時31歳であった。
2　豊田講堂改修竣工式であいさつする槇氏。
3　柱や壁などの杉板本実型枠を使用したコンクリート打放し。表面に木製型枠の木肌がうかび、近代建築の独特なスケール観と型枠職人の手の跡を感じさせる。
4　豊田講堂遠景。槇氏によれば、ホールの天蓋が門の略字の点にあたるという。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

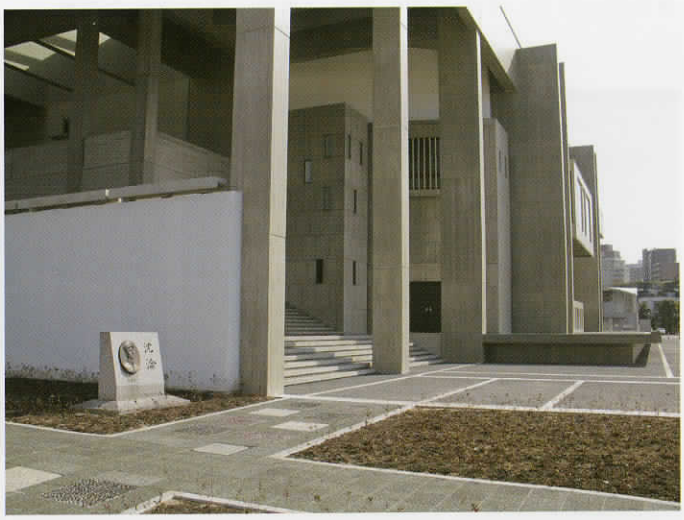
72 郁 達夫文学碑と名大学生歌歌碑 —豊田講堂改修に伴い移設—

魯迅・郭 沫若らにつぐ中国近代文学の代表的な作家である郁 達夫（Yu Du-Fu, 1896年中国浙江省富陽県生まれ）の文学碑が本学の東山キャンパス内に設置されていることは、本連載第16回（No.123）で紹介しました。この文学碑は、郁 達夫が本学の前身校である旧制第八高等学校（八高）の卒業生であったことから、同校同窓会である八高会によって1998（平成10）年６月に建てられたものです。

当時、文学碑は豊田講堂の北東角にあった芝生上（現在のホワイエの北側広場）に設置されていました。しかし現在は、2007年12月に竣工した豊田講堂の改修・増築工事に際して、豊田講堂の北西角部分に移設されています（写真１）。1960（昭和35）年に建設された豊田講堂はこれまでに数回の小規模な改修工事を受けていますが、今回の工事は講堂の建設から47年を経て建築家槇 文彦氏が再び設計を担当するはじめての大規模な改修・増築工事となりました。

文学碑の移設場所については、2007年春から夏にかけて八高会との協議が行われ、複数の候補地の中から現在の場所が選ばれています。晴れた日の午後、豊田講堂とならんで陽光を浴びる移設後の文学碑は、これまで以上に存在感が増したようにみえます（写真２）。

また、今回の改修・増築工事に伴い移設された記念碑には、郁 達夫文学碑のほかに歌碑「学生歌 若き我等」があります。この歌碑は、1962年に創団された名古屋大学応援団の創団30周年を記念して建てられたものです。これまで豊田講堂前庭の南西側植栽エリアに設置されていた同歌碑は、現在、同前庭西側にある芝生広場の一角に移設されています（写真３）。



1	2
3	4

1 移設後の文学碑
2 移設後の文学碑と豊田講堂
3 移設後の歌碑と豊田講堂
4 文学碑、歌碑設置場所地図

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

ちょっと名大史 BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

73 名古屋帝国大学の文学部設置構想

名古屋大学は、1939(昭和14)年に名古屋帝国大学(名帝大)として創立され、来年で70周年をむかえます。総合大学とはいえ、当初は医学部と理工学部（42年に理と工を分離）のみで、文系学部が設置されたのは戦後になってからでした。

名大に文学部が置かれたのは、1948(昭和23)年のことです。その前年には、すでに大学名も名古屋大学（旧制）となっていました。しかし、戦前の名帝大の時代から、文学部の創設は模索されていたのです。

初代医学部長で戦後には第二代総長となった田村春吉は、名古屋医科大学学長として、同大学を母体に帝国大学を創立する運動に大きな役割をはたした人物です。49年に総長在職のまま亡くなるまで、名帝大を真の総合大学とすることに情熱をかたむけました。

その田村は、初代総長の澁澤元治とともに、戦時体制という厳しい状況下にもかかわらず、文学部の設置に乗り出しました。当時の新聞によれば、澁澤総長は太平洋戦争開戦まで間もない1941(昭和16)年７月頃、名帝大の評議会で翌年度の文学部創設を文部省に要請することを言明したとされます。財源には、地元の財界から講堂と図書館建設のために寄付される予定であった100万円を考えていたようです。しかし、この時代に文学部を新設することは至難の技であり、構想は実現しませんでした。

戦後、いよいよ名帝大にも文系学部を設置する気運が高まりましたが、その財源は相変わらずの難問でした。そこで田村総長は、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の国家神道排除政策によって廃止されようとしていた神宮皇學館大学（のちに私立皇學館大学として再興）を文学部の母体とすることを考えました。これは構想だけにとどまらず、皇學館側にもその意向が伝えられ、学生大会は満場一致でこれに賛意を表しました。

しかし、結局これも実現せず、文学部は母体となる学校のない新設学部として創立されることになったのです。

名帝大に文學部創設
三公顯彰懇談會で 田村醫學部長示唆

昭和廿一年二月十七日 (二)
名大、皇學館を吸收
法文學部として新發足か
『皇學館』擧げて希望
學生大會の總意で猛運動

1 『新愛知』（現在の中日新聞）1941年７月３日の記事。
2 『毎日新聞（大阪）』1946年２月17日の記事。当時は、文学部と法学部を合わせた法文学部の設置が構想されていた。
3 文学部創立60周年記念式典（2007年11月３日）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

74 豊田佐吉翁肖像画

2008(平成20)年２月２日(土)、1960(昭和35)年の竣工以来、およそ半世紀にわたって本学のシンボルとして親しまれてきた豊田講堂が約１年におよぶ大規模な改修・増築工事を受け、その竣工を記念する豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが開催されたことが本誌NO.178に取り上げられています。

例年、大学文書資料室は、ホームカミングデイにおいて本学の歴史に関する企画展示を開催していますが、この竣工記念ホームカミングデイでは「豊田講堂のあゆみ」展を開催しました。この展示は、改修工事を２ヶ月後に控えた2006(平成18)年９月に開催された第２回ホームカミングデイで行われた企画展示を再現したものですが、今回はこれまで未公開であった豊田佐吉翁肖像画（写真１）を展示しました。

この佐吉翁肖像画は、キャンバス裏面などの記録から、1959(昭和34)年５月に株式会社豊田自動織機製作所（現株式会社豊田自動織機）から本学に寄贈されたものであり、作者のイニシャルがJ.H.であることがわかっていますが、寄贈された経緯などの詳細は明らかではありません。1959(昭和34)年３月下旬、トヨタ自動車工業株式会社から建設寄付される講堂の名称を「豊田講堂」とすることが確定し、それをうけて制作された肖像画が着工直後の５月に寄贈されたものと思われます。

本学に寄贈されて約60年を経た肖像画は、絵の具の状態も良好であり、全体的なクリーニングを行った上で新調した額に収めて展示公開されました。竣工記念ホームカミングデイ当日には、本学の全学同窓会会長である豊田章一郎トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長も佐吉翁肖像画を見学されました（写真２）。

今後、この豊田佐吉翁肖像画は豊田講堂内のしかるべき場所に掲げられることになっています。

1 新しく額装された豊田佐吉翁肖像画（油彩、F15号）
2 ホームカミングデイで佐吉翁肖像画を見学する豊田章一郎会長
3 クリーニング作業前の肖像画

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

75 キタン会（経済学部同窓会）旧蔵資料

大学文書資料室は、約1,000点のキタン会旧蔵資料を所蔵し、一般の公開に供しています。

キタン会は、日本ではきわめて珍しい、社団法人格を持った名古屋大学経済学部の同窓会です。その歴史は古く、経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校（名高商）が設置された４年後の1924（大正13）年に、「其湛会」として発足しました。この会名は、名高商初代校長渡辺龍聖が、中国最古の詩集『詩経』の一節、「子孫其湛、其湛曰楽」（音楽をかなで酒を酌んで祖先を祀り、一族が集まって楽しむさま）から名づけたとされています。

其湛会は、戦後の1953（昭和28）年に社団法人となり、同年設立された経済学部同窓会啓友会とは別組織でしたが、69年に一本化して其湛啓友会となり、76年からはキタン会となりました。現在は１万400人の会員を有し（2005年３月現在）、名古屋を本部に日本全国のほか海外にも支部を持ち、キタン財団による助成事業や、戦前以来の歴史を持つキタン新聞（月刊）の発行などの会員親睦事業をおこなっています。

キタン会旧蔵資料は、2005（平成17）年12月、キタン会事務所が東山キャンパスの経済学部校舎内に移転する際に寄贈を受けたものです。

この資料群には、日本有数の学部同窓会であるキタン会や、その中の卒業年別同窓会などの活動を記した貴重な記録（会誌、アルバムなど）をはじめ、経済学部の教員や卒業生の回顧録や著書も多く含まれています。中には戦前の名高商時代の資料もあります。キタン会の歴史はもとより、経済学部を中心とする名大と社会の関係を知るうえでも大変貴重な歴史資料となることでしょう。

目録データは、大学文書資料室 HP 掲載のオンライン検索システム（http://nua.jimu.nagoya-u.ac.jp/search/）から閲覧することができます。資料室にご来室のうえ、申請書をご提出いただければ、どなたでも閲覧することが可能です。

1 3
2

1　大学文書資料室の書庫に配架されたキタン会旧蔵資料
2　名古屋高等商業学校の卒業アルバム（いずれも戦前）
　どれも分厚く装丁も豪華（キタン会旧蔵資料）。
3　キタン会による「旧制名古屋高等商業学校（現名古屋大学経済学部）創立60周年記念大会」における祝賀会の様子（1980年10月５日）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

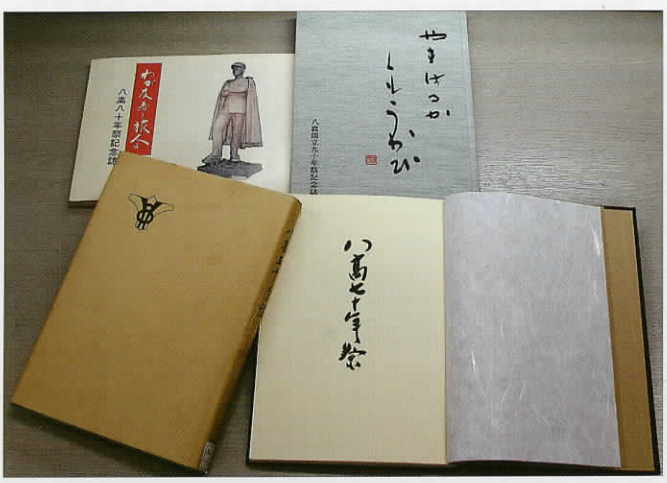
76　第八高等学校創立百年を記念して―八高会―

これまで本連載でも何度か取り上げた第八高等学校（八高）は、1908（明治41）年に創設された旧制高等学校で、今年2008（平成20）年に創立100周年を迎えます。八高は、戦後の学制改革にともなって1949（昭和24）年に新制名古屋大学に包括されて本学の瑞穂分校（旧教養部）となった後、1950（昭和25）年３月末日に廃止されました。

母校が廃止された後、八高卒業生は東京（1950年８月）、名古屋（1954年６月）をはじめとして各地区で同窓会（八高会）を創設し、各八高会が独自に活動を行った時期が長く続きました。しかし2001（平成13）年になって、各地区の八高会を一本化して現在の八高会が設立され、その本部・事務局が母校の地である名古屋市内に置かれています。この間、八高会は、1958（昭和33）年の八高創立50年祭など八高創立の周年行事を定期的に開催するとともに、節目ごとに記念誌等を刊行しています。

名古屋大学では、かねてから八高関係資料の収集を行っていましたが、2005（平成17）年２月に八高会（当時会長は故・山田鐐一名誉教授）から八高会資料の保存管理のための寄附を受けました。これをうけて大学文書資料室では、八高会機関紙バックナンバーのCD-ROM化を行うとともに、「創立百年記念」となる今年に向けて、八高会の協力を得ながら、同校卒業生に対して関係資料の提供を呼びかけてきました。その結果、2008（平成20）年７月現在、大学文書資料室は、八高会を通じて過去３回にわたって約40名の会員から約580点におよぶ資料の寄贈を受けています。

今年10月18日、八高会は、全国各地から名古屋市内に会員が集って「八高創立百年記念祭」を開催する予定です。



2005年（平成17年）2月11日（金曜日）

「八高会」資料を永久保存
3年後創立100年　名大施設で試み進む

旧制第八高等学校（旧名古屋大教養部の前身）の卒業生でつくる「八高会」の書籍や資料を、名大の大学文書資料室で永久保存する試みが進んでいる。十日には八高会の役員らが名古屋市千種区の名大を訪れ、「資料の管理費に」と五十万円を寄付した。文書資料室は「大先輩」ゆかりの品々を集めた八高コーナーの設置を計画しており、関係者は「創立百年記念となる、三年後の二〇〇八年を目標に収集を進めたい」と意気込む。（後藤　厚三）

八高関連の資料はこれまで、八高会の役員が手分けして保管。名古屋市博物館や長野県松本市の旧制高等学校記念館などにも寄贈されている。名大が学校史に関連した資料収集を進める中、昨年十一月、文書資料室が八高会の関連資料を永久保存することが決まった。

この日は会長の山田鐐一・名大名誉教授（八〇）、事務局長の青木幸一郎・岐阜大名誉教授（八四）ら五人の役員が名大を訪問。平野真一学長に寄付金の目録を手渡した後、文書資料室を見学。平野学長の「大先輩のご厚意を大切に使わせていただきます」との言葉に、山田会長は「計画が進めば、追加の寄付も考えていきたい」と笑顔で応えた。

現在、八高会が寄贈しているのは、同窓会の機関誌や卒業生の著作など。今後は八高の制服やマント、運動部のユニホームや八高時代のアルバムといったゆかりの品々を集め「八高コーナー」として展示していく予定。寄付された五十万円は、機関誌などのCD－ROM化の費用に充てる。

八高の卒業生は一万十人。哲学者の梅原猛さん、元経団連会長の平岩外四さんなどそうそうたる顔ぶれが並ぶ。しかし、最年少の会員でも七十代と高齢化が進んでおり、他の旧制高校同窓会も解散が相次ぐ中、三年後の創立百年祭を「活動の一つの区切りとしたい」としている。

山田会長は「会員一人ひとりが貴重な資料を持っているが、生きているうちは手元に置いておきたい気持ちもある。百年祭を目標に、積極的に資料の提供を呼びかけていきたい」と話す。

平野学長㊨に目録を手渡す山田会長㊧

八高会関連の資料を見る役員ら＝いずれも名古屋市千種区の名古屋大で

1　これまでに刊行された主な創立記念誌（50年、70年、80年、90年）
2　八高創立80年記念祭の様子（1988年、吹上ホール）
3　『中日新聞』2005年２月11日付22面（同社提供）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

77 名大教養教育の源流を語る八高資料

戦前の旧制高等学校は、現在の高等学校とは異なり、少数のエリートを養成する学校でした。時期によって制度が変わりますが、おおむね16～17歳で入学、３年後に19～20歳で卒業して大学へ進学します。これは年齢的にも、大学で高度な教育をうける準備という意味でも、現在の主に大学１、２年生を対象とする教養教育に相当します。

そして、戦後の学制改革で新制名古屋大学に包括され、教養部の母体となった第八高等学校（八高）は、名大教養教育の源流といえます。教養部は1993(平成５)年に廃止されましたが、現在は教養教育院の下、全学の教員が全学教育科目の講義をおこなっています。

大学文書資料室では、八高に関する多くの資料を所蔵しています。資料室が独自に収集したもののほか、前号でもふれたように、３年ほど前から八高会を通じて、卒業生の方々から約580点もの貴重な資料の寄贈をうけました。八高は、いわゆるナンバースクールの１つとして、旧制高校の中でも古い歴史を持ち、高い格式と教育水準をほこっていました。これらのコレクションは、名大の歴史を語るだけではなく、日本の高等教育史を語る貴重な資料群でもあります。

今年、大学文書資料室では、博物館との共催により、ホームカミングデイをはさむ10月７日から11月８日にかけて、八高の歴史をその学生生活を中心にふりかえる企画展示をおこないます。会場は博物館です。

そこでは、資料室所蔵の八高資料のうち、特に貴重なものを厳選して展示します。さらに、名古屋市博物館にも八高に関する資料が所蔵されていますが、今回はこれらを同館から借用して展示する予定です。

今回の企画展示により、今年の八高創立100周年を記念すると同時に、来年の名大創立70周年記念事業を盛り上げる一助とできればと思います。

2 | 1
3

1　第１回卒業生（工科２組＝第２部甲２組）記念写真（1911年、大学文書資料室所蔵）
2　戦時期の八高関係資料（1940～42年、大学文書資料室所蔵）
3　理科６組のクラス日誌（1943～44年、大学文書資料室所蔵）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

78 ホームカミングデイ —卒業生・地域住民との交流を求めて—

近年、日本の大学では、海外の大学を参考にホームカミングデイを開催する事例が増えています。国内におけるホームカミングデイの理念や開催形態は各大学によって異なりますが、多くの場合は卒業生を主な対象に、同窓生間の旧交を温めたり、母校の近況を知ってもらったりする機会を提供する行事として行われており、すでに40回以上の歴史をもつ私立大学もあります。

本学では、2008(平成20)年10月18日に、第４回名古屋大学ホームカミングデイが開催されます。今回のホームカミングデイでは、地域と大学で考える「人と地球環境」をメインテーマとして、卒業・修了生、元教職員、学生の家族をはじめ、地域住民が本学東山キャンパスに集って参加者間の交流が深まるものと思われます。

本学のホームカミングデイは、第１回が2005（平成17）年10月23日に、第２回が2006(平成18)年９月30日に、第３回が2008(平成20)年２月２日に、それぞれ本学の全学同窓会との共催により開催されています。約2,000名の参加を得た第１回ホームカミングデイでは、試行的に本部行事および部局行事の二本立てで各種の催しが行われましたが、この基本的なスタイルは現在に引き継がれています。第２回では、メインテーマ「宇宙から地球へ」が設定され、このテーマに即した講演会などの全学企画や各部局独自の様々な企画が行われ、約4,000名の参加者が思い思いに楽しむ姿がみられました。第３回は過去２回とは異なり、豊田講堂改修・増築工事の竣工式に合わせて２月に開催されました。このときは厳冬期にもかかわらず約2,500名の参加がありました。

本学のホームカミングデイは、過去３回の実績によって本学の定例行事として定着しつつあります。今後も本学ホームカミングデイは、大学の構成員・卒業生やその家族、地域住民が各々の立場で参画するスタイルを確立しながら、その歩みを重ねていくことでしょう。

1 表紙写真で第１回ホームカミングデイを報じる本誌 No.150
2 第２回ホームカミングデイ「交流サロン」あいさつする平野総長（本誌 No.162）
3 同「交流サロン」の様子（同上）
4 豊田講堂改修竣工記念ホームカミングデイ式典の様子（本誌 No.178）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

79 昭和30年代の名古屋大学 —ノーベル賞受賞者を生んだ時代—

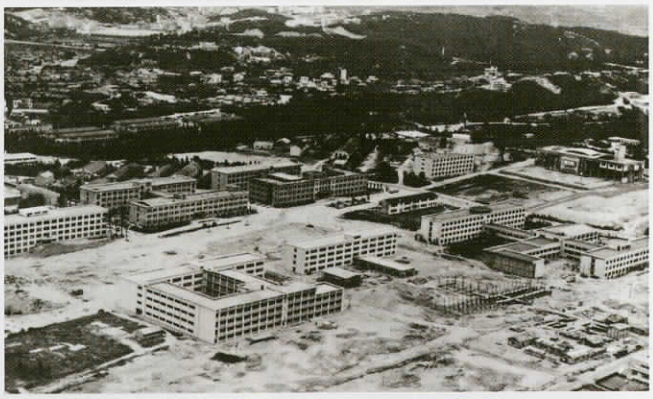
先月、名大卒業生の小林誠博士と益川敏英博士（名大特別招へい教授）、名大で学位を取得し、教員としても在籍した下村脩博士がノーベル賞に輝きました。

小林博士は、昭和38年に理学部に入学し、47年に博士（後期）課程を修了しました。益川博士は、33年に同学部に入学し、45年まで同学部の助手を務めました。下村博士は、30年から２年半、理学部の研究室で研究し、35年に理学部で博士号を得た後、38年から40年にかけて理学部助教授となりました。３人とも昭和30年代から40年代前半にかけて名大で学び、研究をしていたことが共通しています。

この時代の名大は、施設面でいえば、現在の東山キャンパスの原形ができた時期でした。工学部（高蔵地区、昭和31年）、経済学部・法学部（34年）、文学部・教育学部・本部（38年）教養部（39年）、農学部（41年）というように、学部や本部が東山に集まってきました。すでに東山にあった理学部でもＡ館の増築やＢ～Ｅ館の新築が、工学部では１、２号館の増築や３～６号館の新築がおこなわれました。豊田講堂（35年）、附属図書館（39年、現在の博物館、年代測定総合研究センター）が建設寄付されたのもこの時期ですし、学生会館（36年）、嚶鳴寮（36年、現在の国際嚶鳴館）、職員会館（38年）も建てられました。運動場などの「山の上」地区が整備されたのも36年のことです。

こうして東山キャンパスは、「タコ足大学」から脱却すると同時に、木造中心から鉄筋コンクリート建築の並び立つ景観へと劇的な変化を遂げ、重要な施設も整備されて、日本の基幹総合大学にふさわしい威容を整えたのでした。

またこの時期は、伊勢湾台風（昭和34年）で大きな被害が出たり、２つの安保闘争をはさんだ大学紛争の時代でもありました。３人は、こうしたあわただしくも活気に満ちた雰囲気の中で、ノーベル賞を受賞する研究の基礎をきずいたのです。



1 | 3
2 |

1 昭和29年当時の東山キャンパス。当時の東山には工学部と理学部しかなく、鉄筋建築も工学部１号館南側建物と、理学部Ａ館の一部のみであった。また、現在の文系地区はまだキャンパスに入っていなかった。左端に見えるのは鏡ヶ池。

2 昭和38年当時。文系学部や教養部の移転が進み、教育学部が建設中であった。小林博士、益川博士、下村博士が３人とも名大に在籍していた年である。

3 昭和45年当時。41年に農学部の移転も完了、グリーンベルトも整備されて、現在の東山キャンパスの原形が完成している。

※名大平和憲章にもうたわれている、名大の学風「自由闊達」という言葉が使われはじめた経緯などについて、少しでも何かご存じの方がおられましたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）までご一報ください。

80 名古屋大学創立50周年記念行事

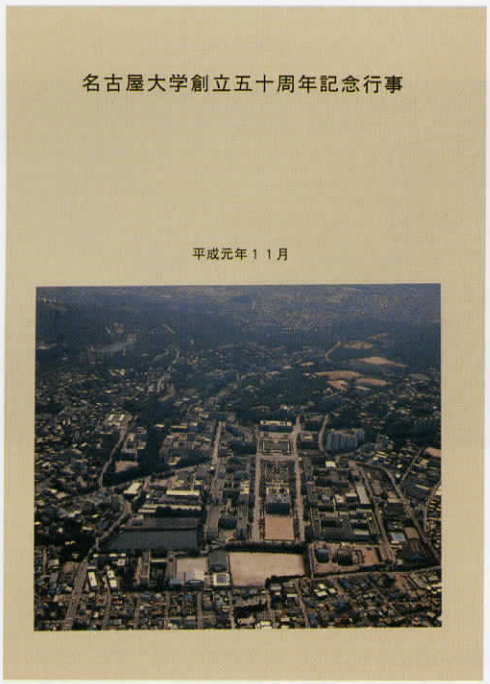
名古屋大学創立50周年記念行事は、わが国最後の帝国大学として1939(昭和14)年に創設された名古屋帝国大学を起点に大学の歴史を数え、1989(平成元)年に初めて全学規模での周年記念行事として開催されました。

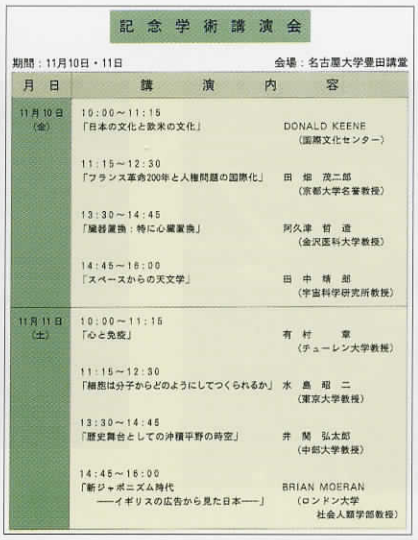
同記念行事の内容は、1987(昭和62)年に設置された名古屋大学創立50周年記念行事委員会によって検討され、記念式典、記念祝賀会、記念学術講演会、記念部局行事の４企画とされました。

記念式典および記念祝賀会は、1989(平成元)年11月９日、午前11時から３時間にわたって豊田講堂及び同講堂前庭で開催され、学内外から関係者1,500名の参加がありました。同式典では、石橋一弥文部大臣、有馬朗人国立大学協会長、鈴木礼治愛知県知事、西尾武喜名古屋市長、武田弘太郎記念事業後援会長から祝辞がありました。

記念学術講演会は、翌10日から２日間の日程で豊田講堂において開催され、日本文学研究者のドナルド･L･キーン･コロンビア大学名誉教授をはじめ国内外の講師８名が招かれました。また、記念部局行事は、同年11月７～12日と翌12月２日に開催され、記念シンポジウム・記念講演会・公開セミナーや展示会、実験公開・研究室公開・施設公開等、各部局がそれぞれの特徴を生かした企画を行いました。

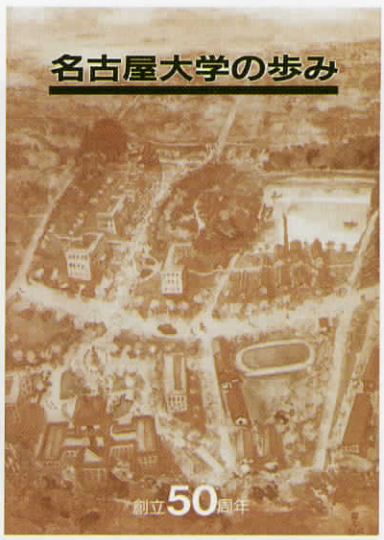
名古屋大学ホームページでも案内されているように、来年2009(平成21)年、本学は創立70周年（創基138周年）を迎え、10月17日に関係者による記念式典や祝賀会が開催されるほか、恒例となった本学ホームカミングデイや記念コンサートなどの各行事が開催される予定です。なお、「創基138周年」という表現は、本学で最も長い歴史をもつ医学部の起源である仮病院・仮医学校が設置された1871(明治４)年から数えたものです。




記念学術講演会

期間：11月10日・11日　会場：名古屋大学豊田講堂

月日	講演内容	
11月10日（金）	10:00～11:15「日本の文化と欧米の文化」	DONALD KEENE（国際文化センター）
	11:15～12:30「フランス革命200年と人権問題の国際化」	田畑茂二郎（京都大学名誉教授）
	13:30～14:45「臓器置換：特に心臓置換」	阿久津哲造（金沢医科大学教授）
	14:45～16:00「スペースからの天文学」	田中靖郎（宇宙科学研究所教授）
11月11日（土）	10:00～11:15「心と免疫」	有村章（チューレン大学教授）
	11:15～12:30「細胞は分子からどのようにしてつくられるか」	水島昭二（東京大学教授）
	13:30～14:45「歴史舞台としての沖積平野の時空」	井関弘太郎（中部大学教授）
	14:45～16:00「新ジャポニズム時代 ――イギリスの広告から見た日本――」	BRIAN MORAN（ロンドン大学社会人類学部教授）



1 | 2 | 3
4

1　創立50周年記念行事パンフレット表紙（B5サイズ、大学文書資料室蔵）
2　同パンフレットの「記念学術講演会」プログラム
3　創立50周年記念式典で配布された写真集『名古屋大学の歩み』（B5サイズ、大学文書資料室蔵）
4　創立50周年記念式典の様子

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡ください。

81　坂田記念史料室　―世界の物理学史を語る―

このたび、益川敏英博士（名大特別招へい教授）と小林　誠博士（名大特別招へい教授）がノーベル賞を受賞したことで、２人の師である坂田昌一博士（1911－1970、名大名誉教授）への関心が高まっています。

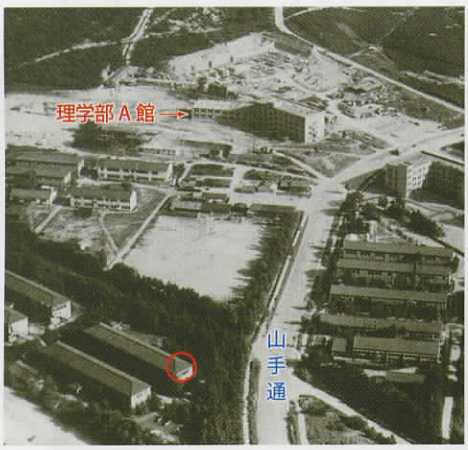
もっとも坂田博士は、もう少し生きていればノーベル賞受賞の可能性が高かったとも言われる、現在の素粒子物理学の基礎をきずいた世界的に著名な物理学者です。『広辞苑』にも「坂田」の項目にその名前が取り上げられているほどです。

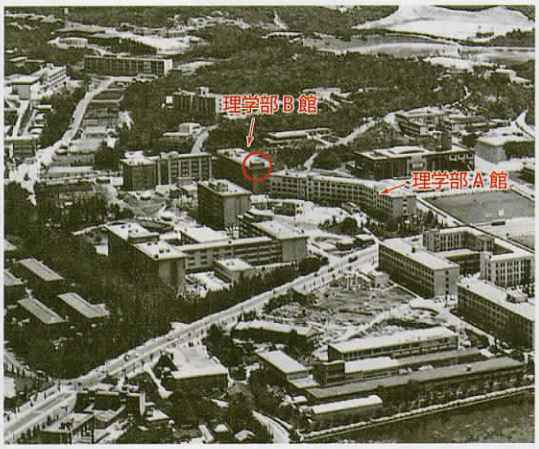
益川博士は昭和33(1958)年、小林博士は38年に名大理学部に入学し、坂田博士が在職のまま亡くなる45年まで、坂田研究室で学問的基礎をかたちづくったことを考えると、坂田博士が２人に与えた影響はきわめて大きなものがありました。益川博士は、受賞時のインタビューに対し、われわれが受賞できて多少なりとも「坂田物理」を世界に顕示できた、と語っています。

坂田博士が教員として28年在籍した名大理学部物理学科（物理学教室）には、博士の膨大な個人資料が保存されています。博士の死後、物理学教室は博士の諸活動に関する資料を収集・保存することを決め、昭和48年には博士の教授室を坂田資料室として、そこに残された資料とともに保存し、61年に坂田記念史料室と改称しました。

この坂田史料は、博士の原稿や手記、ノート、メモ、書簡類、蔵書、さらに日本学術会議原子核特別委員会といった博士が関わった機関の資料などからなっています。名大史にとどまらない、日本、世界の物理学史を語るきわめて貴重な資料群です。すでに『坂田記念史料室資料目録』がありますが、理学研究科では資料のフィルム化、デジタル化、目録の整備などを進めています。

現在、名大博物館で開催中の「2008年ノーベル物理学賞・化学賞受賞記念特別展」（３月28日まで）においても、坂田博士についての展示が行われています。





1　2　4
3

1　昭和34（1959）年の理学部一帯。A館の増築工事が進んでいるが、当時の坂田研究室は木造の２号館（○印）にあった。豊田講堂の基礎工事の様子も見られるが、この直後の伊勢湾台風によって工事が遅れることになった。

2　昭和45年の理学部一帯。この頃には坂田研究室もB館に移っていたが、この年に坂田教授は亡くなった。益川博士が京大へ移ったのもこの年のことである。

3　坂田記念史料室。B館の坂田教授室をできるだけ当時のままに残し、そこに坂田史料が保存されていたが、現在は耐震工事の関係でA館に移されている（写真は移転前）。また同室には、早川幸男、有山兼孝などの諸教授の資料も保存されている。閲覧を希望する方は、事前に物理学教室（052-789-2876）へご連絡ください。

4　坂田記念史料室にある坂田昌一像。昭和56年に坂田博士夫人の信子氏より理学部素粒子論研究室に寄贈された。製作者は彫刻家の清水多嘉示。

※名大平和憲章にもうたわれている、名大の学風「自由闊達」という言葉が使われはじめた経緯などについて、少しでも何かご存じの方がおられましたら、大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)までご一報ください。

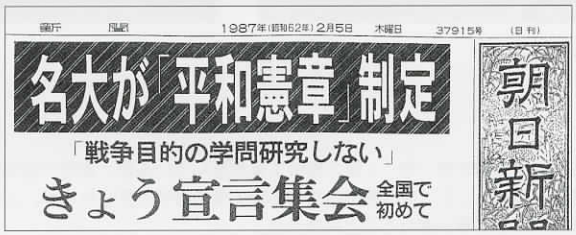
82 名古屋大学平和憲章 —「平和の創造に貢献する大学づくり」に向けて—

名古屋大学平和憲章（全文約2,200文字。以下、平和憲章）は、今から22年前の1987（昭和62）年２月に制定されました。その制定に際して、同年２月５日には本学構成員1,200名が集まり、豊田講堂において「名古屋大学平和憲章制定宣言大集会」が開催されています。

当時、この平和憲章に対する社会の関心は高く、制定前年の1986（昭和61）年10月19日、中日新聞が「名大が『平和憲章』制定へ」という見出しの一面トップ記事で取り上げ、また、制定宣言大集会の当日、朝日新聞が一面トップ記事でその開催を報じるとともに、同月７日の「天声人語」欄でも平和憲章を取り上げています。

この平和憲章の制定は、1983（昭和58）年５月、教養部学生自治会が学生大会で提案しようとした特別決議「名大平和憲章草案」がきっかけとなりました。それは、この時期多くの地方自治体が行っていた「非核都市宣言」にヒントを得たものでした。その後、1984（昭和59）年４月には飯島宗一学長を講師として豊田講堂で全学平和講演会を開催するなどの継続的な取り組みがなされ、翌年12月には平和憲章制定実行委員会が組織されました。また、1986（昭和61）年６月に開催された第27回名大祭の全学シンポジウムにおいて平和憲章起草委員会（顧問・飯島学長、委員長・小川修三理学部長）が発足し、同年11月に平和憲章の成文が確定されています。

成文の確定後、ただちに批准署名運動が開始され、冒頭に述べた制定宣言大集会をはさんで３月25日までに集められた署名総数は8,523名分（批准率58％）に達しました。その際、本学の全構成員約15,000名に配布された単記名方式の署名用紙には、「名古屋大学平和憲章を学問研究および教育をはじめとするあらゆる営みの生きてはたらく規範として確認し、私の名を記します」との文言が印刷されていました。



1 3 2
1 名古屋大学平和憲章制定宣言大集会の様子
2 平和憲章批准署名を呼びかけるポスター（藤江　充氏デザイン）
3 平和憲章制定を報じる朝日新聞記事の見出し（朝日新聞名古屋本社版）

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。

名古屋大学基金

名古屋大学基金へのご寄附をお願い申し上げます。この基金は、平成18年3月に創設され、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業などの充実のために活用されます。ご寄附のお申し込み、お問い合わせは秘書課（基金事務局）あて（電話052-789-4993, 5759、E メール kikin@post.jimu.nagoya-u.ac.jp）にお願いいたします。

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

83 名古屋大学の「創基」138周年

名古屋大学は、1939(昭和14)年に名古屋帝国大学として創立され、今年で70周年をむかえます。10月17日に関係者による記念式典が、24日には市民にも開かれたホームカミングデイが行われる予定です。

ところで今回、創立70周年とともに、「創基138周年」という言葉が添えられるようになったことが目を引きます。これは、創立70周年記念行事委員会で検討され、学内で正式に承認されたものです。

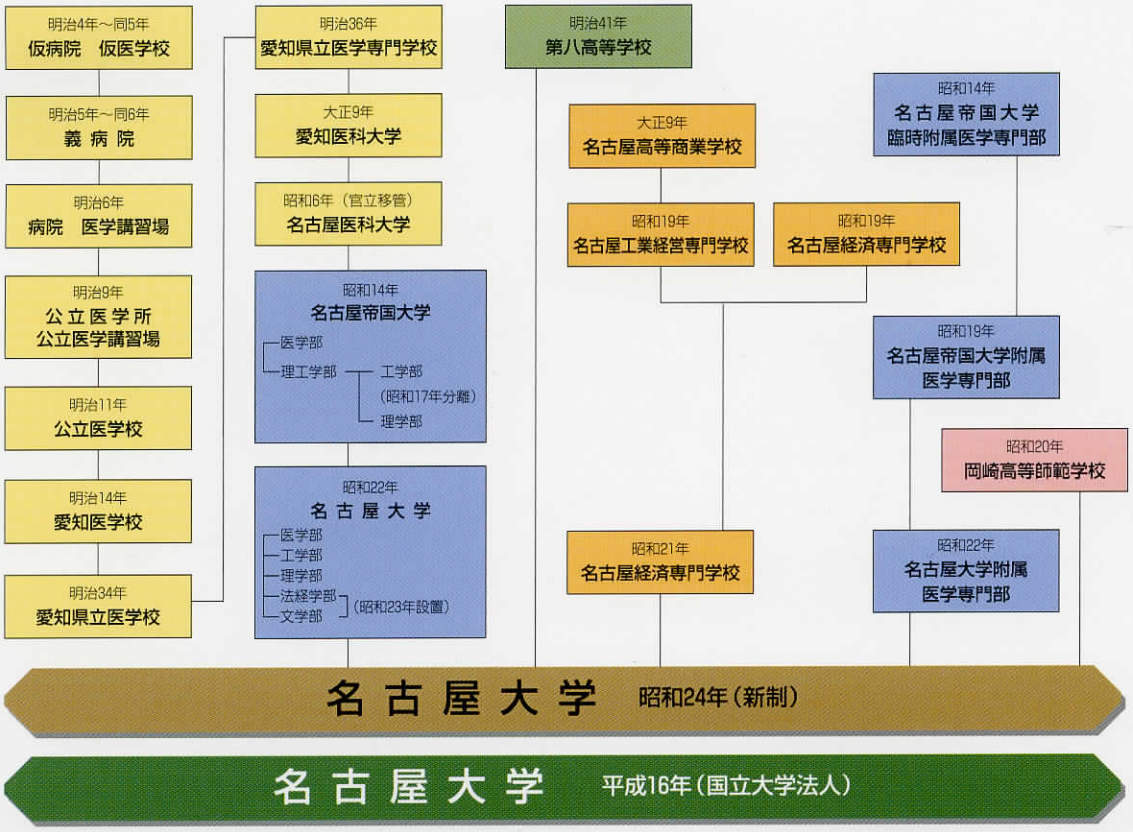
この「創基」という言葉は、大学なら大学と名乗る以前の前身学校の歴史を包括する概念として、すでに使っている学校もあります。北海道大学なら1876年の札幌農学校から創基133年、筑波大学なら1872年の師範学校から創基137年といったぐあいです。

名大は、医学部の前身をたどっていくと、1871(明治４)年の名古屋県仮病院・仮医学校にまでさかのぼることができます。そこから創基138年というわけです。そのほかにも、下の図のように、旧教養部の前身として第八高等学校が、経済学部の前身として名古屋高等商業学校が、名帝大創立前からありました。

もっとも名大では、これまでもこうした創立以前の歴史を大事にしてきました。それは、『名古屋大学五十年史』通史一（1995年刊）の全ページの実に約半分が、名帝大創立以前の「前史」に割かれていることでも分かります。この「創基」は、こうした考え方をより明確にする言葉ともいえるでしょう。

現在、記念式典での配布を期して、創立70周年記念図録の編さんが大学文書資料室を中心に進められています。また博物館では、名大史の常設展コーナーを記念式典の日にオープンする予定で、大学文書資料室もこれに参画しています。

ついては、名大の歴史にまつわる資料や写真、物品等をお持ちの方がおられましたら、まずはぜひ大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）までご一報ください。



名古屋大学基金

名古屋大学基金へのご寄附をお願い申し上げます。この基金は、平成18年3月に創設され、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業などの充実のために活用されます。ご寄附のお申し込み、お問い合わせは秘書課（基金事務局）あて（電話052-789-4993, 5759、Eメール kikin@post.jimu.nagoya-u.ac.jp）にお願いいたします。

名古屋大学の広報誌『名大トピックス』は、名古屋大学の公式ウェブサイト（http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/）でもご覧いただけます。また、『名大トピックス』の入手をご希望の場合は、名古屋大学広報室（052-789-2016）までご連絡ください。

名古屋大学
NAGOYA UNIVER